
蜜柑色の君

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜜柑色の君

【Nコード】

N1162S

【作者名】

桜

【あらすじ】

初恋をしたことがない少女・ココロ。友達は皆恋をしていた。そんなココロに今までなんともおもってなかった男の子が急に気になり始める。何年も思い続ける一途な女の子の恋のお話。

o n e s i d e d l o v e r 1 中学生（前書き）

前から書きたかった蜜柑色の君！

ついに投稿です！

あらすじでは「ん？」と思うかもしれませんが実際はゴチャゴチャです。

ではどうぞ！

one sided love 1 中学生

あなたは誰かを好きになったことはありますか？

想いを伝える勇気はありますか？

きつとほとんどの人が無理だと思う。

けれど想いを伝えたならば、あなたにはそれだけの勇気がある。
傷付くのを恐れない人はきつと強く、美しいんだよ。

私はあの人に出会い、たくさん泣いたし、たくさん笑えた。
辛かったし、切なかった日々もあったけど後悔はしてません。
恋をするー……それだけで人を信頼するという勇気があるんだから。

ー……初恋の相手があなたで良かった……ー

「髪の毛よし！制服ばっちり！うん、大丈夫かな」

私は鏡で上半身を見て、目立つところがないかチェックする。
少し髪の毛がしっぽ頭になったので手のひらで軽く頭を押さえ付

ける。

いや、押さえ付けるといふより、おいているといった方がいいのかもしれない。

これは私の癖だ。

「用意できた？お母さんはできたけど」

「うん、私もできた！時間はまだ早いね」

私は時計をみてまだ時間があまっていた。 今日から新しい季節……暖かい春の始まりだ。

「今日は中学校の入学式ね。誰と同じクラスになるのかしらね。ねえ、ココロ？」

私……ココロと呼ばれて母親の方を見る。 私の名前はココロ。 けど少し変わった名前だと思う。

理由は『他人の^{ひと}ココロが考えられるように』とつけられた。

「私は……誰となってもいいよ。なりたくない人もいるけどね」

母親はそう、とだけ言い、しばらく沈黙が続く。

「あ、こんな時間。もう行かなくちゃ！」

私は時計を見てはっとする。
急いで靴をはき、通学カバンをもつ。

「お母さん、早く」

「待つて！お母さん歳やから……」

はあ？ と少し呆れるけど突っ込んでいる暇はない。
でもこの母、いつも「私はまだ若い！」とか言ってるんだよ？それが歳？なんだこの母親！！と思う。

私は待つてられなかったので、ドアを開けて、廊下のような細長いところでエレベーターのボタンを押す。

私の住んでいるところはマンションでまあまあ綺麗だと思う。
階段もあればエレベーターもある。

母を待つている間とエレベーターがくるのを待つていた。

「コ、ココロは早いわね……若いつていいわね」

くるつと後ろを向いて母に一言だけ言った。

「遅い」

また、沈黙が続く。ちょうどいいところにエレベーターがきたのでよかった。

エレベーターにのり、一階までつくのを待つ。

すぐについた。

外に出ると、春の生暖かい風が髪を靡かせてくれる。

ブレザーを着てるから少し暑いけどシャツは案外薄くて寒そう。
学校につくと校門に誰かたっている。

男の子だろうか？男子の制服を着ている。

「おう、星野……」

「あ、るっちゃん！？ひさしぶりだね！」

校門にいたのは同じ学校だった音無　ルイ　だった。
ルイという名前だが、みんなルイのことをるっちゃんと呼んでいるから私もるっちゃんと呼んでいる。

星野というのは私の苗字。

「るっちゃん、男子の制服なんだ？女の子なのに」

るっちゃんは苦笑する。

るっちゃんは外見は男の子に近い女の子で、ショートカットの髪に少しぼっちゃりしている。

でもるっちゃんは心は男の子らしい。

だから男の子っぽい言葉遣いになるみたい。

「ん？星野、また髪のびた？」

るっちゃんが私に聞いてくる。

私はこくと頷いた。

私の外見は少しはねている長い髪に茶色っぽい瞳。

体はやせている。

髪は少し茶色がかかったぐらいで長い髪は少しの自慢だ。

「クラス表みたか？まだなら見てこいよ。俺はここで待ってる奴がいるからさ」

「うん、そうする。るっちゃん、またね」

私は手をふり、クラス表を見してみる。

「わ、六組だ！ん？美咲と千恵は違うクラス！？ええ……」

クラス表を見てがっかりする。

小学校の時から仲がいい美咲と千恵は違うクラスだったから。

「いいじゃない、新しい友達つくれば」

「うん……そうだよね……」

私は六組の列に並ぶ。

その時に声をかけられたので振り返ると真琴がいた。

「コロコロ！ひさしぶり！！」

真琴……宮内 真琴は同じ学校だった人で、肩までつく髪に少しぼつちやりしている。
でも、可愛いと思う。

「み、宮内 真琴！！」

「……どうしてフルネームなのかなあ？」

真琴が頬を膨らませる。

小動物みたいで可愛いけどな。

「なんとなく……かな？エヘヘ？」

「もう！別にいいけど……でも新しい学校の人ってなんか……
おびえちゃうね……特に女子……」

真琴がなんだか変？

私はおびえるというより、緊張するよ……。

「私は不安だなあ。友達できるか……私、人見知りだもん」

真琴はああ、とだけ返事を
してニンマリと意地悪な笑みをする……。　　なんだろう、嫌な予感
が……。

「ココロは人見知りだもんね」。初めてあつた人とか、そんなに仲良くない人と喋る時なんかものすごくおどおどしてるもんね？」

「……仲がいい人だったら、本当の自分でいられるんだけどね……」

私はテンションの低い声で言った。

だって、仲がいい友達は違うクラスだもん！！

私はふうつとため息をついた。　　少し自信がない。このクラス（六組）で友達ができるか。

「じゃあ、並びましょうか」

真琴がからかうような、楽しんでいるかのような声をだす。

ひ、ひどい……！！

並んですぐに体育館に行き、先生達の挨拶、校長の話で、その次に各クラスに移動した。

今、六組の自分の机に座って、先生の話を聞いている。

「初めまして！このクラスの担任の 工藤 鈴 です。
担当科目は国語です」

工藤先生は女教師でまあまあ綺麗な方だ。 声も透き通っていて綺麗。

「初めまして、このクラスの副担任の 中山 聖 です。
担当科目は理科です」

中山先生は男教師で顔は普通だなあ。

「では皆さんにも自己紹介をしてもらいます。一番からおねがいします」

「俺かよ！？えと……………です」

みたいな感じで始まった。

私は二十六番なのでまだまだだと思っていたけど、すぐに私の番になった。

「ほ、星野 ココロです。よろしくお願いします」

私の自己紹介は終わり、後ろを向くと真琴がいた。 私の次が真

琴なんだ。

「宮内 真琴です。よろしくお願いします……」

真琴はさつさと済ませて、ガタンと音をたてて座った。少し、
落ち着いた……。

全員の自己紹介が終わって、さよならの挨拶をした。 私は通
学力バンにもらった教科書をつめて、靴に履き替える。

ここは学校では上靴で、学校にくるときや帰るときには運動靴に
履き替えなきゃいけない。 体育はグラウンドだったら運動靴で体育
館だったら上靴らしい。 当たり前だけど……。

「美咲と千恵は四組か……廊下で待ってよう」

駆け足で私は四組に向かう。 待ってる間暇だったのでミニクラ
ス表を見る。 一瞬、時が止まったような感覚がした。

「……大西 棗……」

その名前を見ただけでチクン、と胸が痛む。 棗も四組だったん
だ……。 会わせる顔がないよ……。 だって、私は一度棗に……

「ココロー!!どうしたの?ぼーっとして!!」

私は考えるのをやめて、声のした方を向く。 大体予想はしてる

んだけどね。

「千恵か……美咲は？」

「美咲なら、まだ教室にいるよ」

美咲、おいていかれたんだね……。今、私の目の前にいるのは千恵。武内 千恵。外見は髪をポニーテールに結っていて、鋭い目、明るい性格かな。

「待つてよう！千恵は早いんだから」

美咲が来た。佐藤 美咲はのんびりした性格で髪はストレート、目は大きく、体重は普通。

「帰ろっか……！？」

誰かとぶつかったのどくろつと後ろを向いて相手を見ると……そこには……大西 棗が！？

「なんだ、星野かよ！」

「大西！？ぶつかって悪かったね！」

私はそれだけ言うと大西を無視した。千恵はクスクス笑っている。私、笑われるようなことしたかな？

「ココロ、大西だけは惚れちゃだめだからね？」

はあ？と思いつつも黙って頷く。実は私と大西は小学校の時に

両想いとかいう噂があった。 勿論、嘘だよ？

「そういえば、二人の初恋の相手は誰？」

美咲は顔を真っ赤にしてモジモジしてから言った。

「リ、リク……杉村 リク。今も好きだよ……」

美咲の後に千恵が言った。

「私は元カレだな。 ココロはまだ初恋をしてないんだっけ？」

「うん。 初恋……恋ってどんな感じなのかなーって思うぐらい」

私はこの時知らなかった。 私の初恋の相手はすぐそこにいることを……何年もその人を想い続けることを……。

one sided lover 1 中学生（後書き）

蜜柑色の君は思い付きで書いているので更新は早かったり遅かったりと不定期です。

けれど大体最後は決まっているので最後までよろしくお願いします！

one sided love 2 クラブ体験（前書き）

テーマは「恋」なんですがまだまだテーマは書かずにだらだら書いてます。

だらだら書いていてもちゃんと恋と関係あって進んでいるので大丈夫なんです。問題は自覚なんですよね。

one sided love 2 クラブ体験

朝。

目覚し時計が耳元で騒がしく鳴るので布団からもぞもぞと手を伸してカチツと小さな音をさせて時間をみる。

少しねぼけている私は目をこすりながら制服に着替える。

時間はきつちりとした7時。

歯磨きをして、髪をととのえ、制服についているゴミをなれたてつきで落としていく。 時間にまだ余裕があるので食パンを手にとり私の大好きなチョコレートをぬってぱくりと食べる。

飲み物は何にしようか迷う。

牛乳はアレルギーで飲めないし……。

考えた私はオレンジジュースにした。

オレンジは好きだ。

私は千恵が迎えにくるのを待つ。

昨日の帰りに千恵が私を迎えにきて、そのあと二人で美咲を迎えにいくという話をした。

私と美咲の家は中学校に近いけれど、千恵は遠い。

だから徒歩で私の家にくるには三十分ぐらいはかかる。

いろいろ大変なんだよなあ、千恵って。

そんなことをぼややんと思っていたらインターホンの音が家の中によく響く。

きっと千恵がきたのだろうと思い、私は鞆をもってドアを勢いよくあける。

あけた途端に千恵のうあ！？、という驚いた声が少しだけ聞こえたような……。

「あゝ、ビックリしたあ！ココロ、はしゃぎすぎじゃない？」

「だって！夢にみた中学生なんだよー？楽しまないかね！」

私は鼻歌を交えて軽々と美咲の家についた。

美咲の家は少し花が植えてある。

なので春……今の季節は蝶が花に舞っている。

心癒されるから好きな場面。

千恵が美咲の家のインターホンをおす。

だけど何の応答もないのもう一回おそうとすると美咲がでてきた。

美咲はのんびりしているので遊ぶ時も遅れることが多い。

そこが美咲の好きなところでもあるんだけど……。

美咲は私と千恵の姿を確認すると安心したように笑んだ。

そして学校の門をくぐる。

美咲の家は中学校に近いから歩いて二分でつくぐらい。

羨ましいと思う。

そんなことを思っていたら美咲が私に聞いてきた。

「ココロ？聞いてる？ココロはノートもってきた？」

ノート？どうして？……………あ！そうだ、今日から初授業なんだ……。

ノート……いるよね……。
忘れたあ！！

そんな私を見て千恵は大体予想がついたのだろう、鞆からノートを一冊取り出し、私にわたしてくる。

「ココロのことだから忘れたんでしょ？あげるよ。一冊だけなら」

それは大学ノートで緑色の綺麗なノート。千恵はいつも私を助けてくれる。

千恵は私の親友だ……。

美咲もだけどね！

いろんな話をしていたらもう教室の近くまできていた。
まだ話したいなあ、と思うけどしょうがない。

二人に手をふって教室にはいるうとすると美咲が私に言った。

「休み時間になったらいくからね、だから休み時間まで我慢だよお？」

につこりと笑い、美咲は私の頭をよしとなでる。

うう……なんか私だけが幼い子供みたい。

私は美咲にありがとう、といい教室にはいる。

はいつた途端、誰かから声をかけられた。

「おはよお！確か……星野さんだよね？」

「は、はい！？ほ、星野ですけど……」

その女の子は少し長めの髪に綺麗な目、なんていうか……もてそうな女の子。

……この人は柴崎さん。

このクラスで少し目立っていたから名前もすぐに覚えた。

「やだな！そんな敬語はいらない！タメでいいよ？」

「人見知りなんで……。じゃ、じゃあ」

私は逃げるように席についた。

柴崎さんはにやりと笑っていたような感じがする。

私はふう、とため息をつく。

こんな人見知りじゃ、友達をつくるのが難しい。

いや、できるかな？

私はどうしようもなく不安になる。

そんな気持ちのせいかもう先生がいて、朝礼が始まる。

「日直は一番からです！男女ペアでやってもらうので一番と二番、おねがいしますね。日誌は前においてあります」

一番と二番が前にいったと思ったら二番の女子は笑っており、一番の男子は恥ずかしそうにしていた。

「げえー！お前とかよ！？」

「何よー？私だってね、あんたとやるのは嫌なんだからね！」

仲がいいんだな。小学校が同じだったのかな？

中学校には違う小学校だった人が沢山いるから知らない学校からきた人は誰なのかわからない。

……でも、男子と一緒に日直をしないといけないのは嫌だ。

私は……男の子が苦手。

こわくて、乱暴なイメージが強いから。

気がつくとも朝礼はおわっていたようで先生の説明が始まっていた。

「日直は日誌を書いてもらいます。書き忘れたりしたらやり直しなので気をつけて下さいね。授業はほとんど受け方の説明だと思っています。では頑張ってくださいね」

そう言って先生は教室をでていく。

入れ違いで英語の先生がはいってきた。

そしてファイルを配っていく。

「そのファイルは授業で配るプリントをとじてもらうためのものです。なくさないように！配られたら名前を書いてくださいーい！」

私はファイルに名前を書く。

そしたら隣の男の子が話しかけてきた。

「へえ、ココロかぁ！いい名前だね」

「あ、ありがとう………」

優しげに微笑む彼はなんだか素敵で。
すぐにおとなしいな、と分かった。

私と同じ茶黒の髪に少しだけはねてるしつぽ頭。
ほんのりと赤に染まっている頬。
にっこり笑うとかっこよさそうな顔。
全てがととのった人だ。
黙っててもきつとカッコいい。
もてるだろうな。

しばらく先生の話を聞いてチャイムになる。
私はやっとおわったと思い、廊下の方をみる。
まだ、美咲達はきてなかった。
どうしようかな……。私、このクラスに友達いないし。知ら
ない人ばかり……。

……このクラスになじまないといけないのに、なじめない……。
淒く孤独を感じる。
おねがい、はやくきて……。

「……コッコー！ー！聞こえてるー？コッコー！ー！」

私は顔をあげる。

真琴がいた。心配そうに私を覗き込んでいた。
真琴が私に何の用だろう？

「さっきから美咲がいるの。ココロをよんでほしいと頼まれて
ね」

「真琴は？誰かと喋らないの？……友達とか」

私がそついうと真琴は苦笑した。

「んー……私、このクラスで仲のいい人いないから。それに一人の方が楽じゃない？女子なんか……裏でねちねち悪口言っしさあ」

それは私も思った。女子は男子のいるところでは女らしくするけど、裏では下品な人が多い。男子がいないと女らしくないんだよなあ。でも、裏表のない人もいるけれど。本当は、男子より女子の方がこわいのもかもしれない。だから私は男女嫌いだ。

「そつ……真琴、ありがとう。じゃあね」

私は廊下に行く。

美咲達を長くまたせるとなんだか軽く怒るような気がして。

廊下に行くと美咲がふぁー、とあくびをしていた。

千恵は私を軽くバシバシとたたいた。

「ココロ、ばーつとしてる！どう？そつちのクラスは？いい人いる？」

「それがね、気の強い女の子ばつかで。真琴以外苦手かも。……でも男の子では隣の席の人がカッコいい！優しそくない人……かな」

私は教室にいるその男の子の話をする。

千恵は羨ましい、とか言ってた。

私はなんでかな？、と思う。

まあいいか。

「今日さあ、クラブ体験だねえ？ココロはどこを体験していくの？」

え？クラブ体験なんかあった？

話、きいてなかった……。

私はうーん、と考えるしぐさをして少しうかんだクラブがあった。

「び……美術部は？絵を描くの好きだし。楽しそうだし！帰宅部でもいいな」

「そうか。ココロは美術部かあ！私も美術部にしようと思つてたんだよね。よっし！三人で今日体験しにいくか！いいよね？ココロ、美咲？」

私はこくこくと頷く。だって三人の方がなんか安心するから……。

辛いことも頑張れる……から。

チャイムがなり、私達の声は打ち消されかわりに先生の声が響いた。

またね、と教室にもどっていく二人をさびしく思いながら私ももどる。

席につくと隣の男の子が私をじっとみる。

なんだろう、と思いつながらも気にしないふりをする。

すると隣から聞こえないぐらいの声で「やっぱり可愛いなあ、凄いい好みだ」と聞こえた。

なんのことだろう？

終礼をしてすぐに美咲達と合流し、美術部のところへいく。

ドキドキしながら美術室にはいるとフワフワの髪を結った清楚な女の子がきた。

「体験しにきたのね？あ、この子可愛い」

そういつて私にだきついてきた。

え……なんか想像イメージと違う。

もっと……控え目だと思ってた。

「こら！困ってるでしょ！あんたはもう可愛い子ばかりだきついてー」

奥の方から背の高い美人さんがくる。

なんか……個性豊かな人達だな。

体験もおわり、帰る時間になったので千恵と美咲と喋りながら門

に近付くと男子バスケットボール部がまだやっていた。

特に気にすることなく男バスをよけて門をくぐろうとした。

あ、男バスって長いので短くしただけだよ！

「きめちまえー！」

そう叫ぶ声が聞こえた。

私は思わず後ろを振り返り今……シュートをいれた人をしっかりとらえた。

するとまるでー時間がとまったような感覚がした。

私に何がおきたのか分からないけど……『彼』から目がはなせなくなっていた。

そこにいたのは……あの男だから。

one sided love 2 クラブ体験（後書き）

問題は自覚と前書きに書きました。

それは主人公のココロがいつ恋をしたか自覚した途端恋になりますので。

そのへんではまだまだ自覚はできてないんじゃないかなー、と思います。

one sided love 3 彼の笑顔（前書き）

次話からは夏にする予定です。

すいません、季節外れで……。

そしてココロと棗の絡みがあるかな、と。

全然絡みがないので、二人の絡みが書けるのはある意味貴重なんですよ！

そして重要な人物も少しずつ出て来てます。

ココロの隣席の男の子の名前はかなり考えました！
気に入ってくれたら嬉しいです

one sided love 3 彼の笑顔

大西……。あの男があんな綺麗な笑顔、出来るの？

今まで見たことない真剣な顔。

シユートが入り、嬉しそうにしながら友達と肩を組み、ハイタツ
チしながら喜ぶ君。

何時間していたのだろうか？服は汗でびしょびしょだ。

私は、初めて君の笑顔を見たよ。君でもあんな無邪気に笑うんだね。

そしてどうしてだろう？ 今、私の鼓動がドクン、ドクン、と高鳴る。

胸がきゅっとしめられた感じがする。

けど苦しくなくてむしろ感じたことのないくらい緊張して、ドキドキする。

感じたことのない、変な気持ち。

なんだろう、この胸の騒ぎは。名前があるならどんな名前？

何の感情？

どうして君から目が離せないのー？

「……ココロ？どうかしたの？誰を見ているの？」

千恵が心配そうに私を覗き込む。

私は恥ずかしくて顔をぱっとそっぽむいてしまう。

千恵はニヤリと意地の悪い笑顔をして、私はなんだか千恵に全て見通された気がして、顔をあわせるのが嫌になる。

「大西を見てたね？あれえ？ココロの顔、頬が紅いぞー？」

「そ、そんなことない！暑いだけ！」

暑くはなかったけれど、今感じた胸の騒ぎはなんだか言えなかった。とても嫌な感情のような気がしてー。

私は夜も中々寝付けずにいた。

頭では寝ようと思っているけれど大西の笑顔が何度も繰り返し思い出しては胸が高鳴る。 こんなのどうして？

なんであいつにあいたいと思うの？

おかしいよ、こんなこと今までなかったのに……。

学校でも寝不足だ。 千恵からは「大西が気になる？」とからかわれるし……。

ため息を軽くして席へカタンと座る。

隣席の男の子はまだ来ていなかった。

どうしようかなあ、と考えていたら後ろからつんつんと制服が何かに触れる。

予想をしつつ、後ろを見ると予想通り真琴がシャーペンを持ち、ニコリと笑っていた。

「今日のココロ、何か悩んでる気がして。何か役に立てればいいな、と思ったんだけど……」

真琴は照れくさそうに頬を紅色に染める。 真琴なら言ってもいいかもしれない。

真琴は誰にも言わなさそうだしね。 それに真琴なら知っているかも……。

このわけのわからない気持ちだ。

私は真琴にそのことを話した。

真琴はうんうんと分かったように手を組む。

私は期待をこめて真琴を見る。

その時言った言葉は信じられなかった。

「それは『恋』だと思うよ？ 分からないけど一目ぼれじゃないかな？ 一目見て惚れるっていうあれ。 見たことない棗の笑顔に惹かれたんだね」

「そんなはずない！ だって…… だって、見たことない人の笑顔だってあんな気持ちにならないもん！」

私は真琴の言葉を信じられなく、いつも人の意見に流されるのに今回だけは納得しなくなかった。

否定したかった。

真琴はやれやれ、と呆れたように私を見つめ、その目には「まだ認めないか」という意味が込められていた気がする。

私はそんな真琴の瞳から逃げたくて目をそらした。

タイミングよく先生が教室にきてくれて朝礼が始まる。

朝礼が終わると真琴は隣席の男の子と喋っていた。 安心しながら教科書を机に置くと私の隣席の男の子がじっと見る。

そして話しかけ、優しく微笑む。 この人は優しい人だな。

「星野さん、悪いんだけど……教科書忘れちゃってさ。 見せて

くれない？」

私は出来る限り笑顔をつくり、うんいいよ、と頷く。

その男の子はありがとうと笑いながら真ん中に置いてある教科書をパラパラとめくっていく。そういえば、私この人の名前知らない。なんか聞きにくいなあ……。

「槇野 隼人。僕の名前。知ってるかもしれないけど」

先まで教科書にあつた視線が今は私をとらえる。

カッコいい顔がすっかりと私を見て顔が熱くなる。

真剣そうな瞳。目を逸らすのがなんだかもつたないくらい。

私は急に恥ずかしくなり、ぱっと目を教科書に向ける。

教科書を見やすいようにか手が教科書にのっており、凄く見やすい。

なんか紳士のように優しい。

他の女の子にもこんなに優しいんだろっな。

何か……モヤモヤする。今日、変なもの食べたかな？

なんか気持ち悪い感情。 隼人さんは「意地悪しすぎたかな」と

苦笑う。

どんなことを意味するのか分からなかった。

隼人さんがどんな気持ちだったのかも……。

休み時間になると教科書を私の机に優しく置くと次の準備を始めた。

はあ、と悩みがあるわけでもないのにため息をついてしまう。

心配したのか隼人さんが顔を覗き込む。
すっごい顔が近い!!

「隼人く? 何してんのよ? 星野さんが迷惑してるじゃん!」

「柴崎? …… あ、ごめん! 迷惑だよね」

柴崎さんは隼人さんの机に手をつき、まるで隼人さんを狙っているような感覚。

仲が良いのかな……。 柴崎さんは隼人さんの腕を引っ張り、廊下へ出て行く。

「またかあ! 柴崎が隼人狙ってるよお! いくら小学校が一緒に友達だからってえ! 隼人は皆のものなんだからあ!」

後ろの方で何か叫んでる人がいるけど、きっと隼人さんが好きなんだろうな。

柴崎さんと隼人さん、友達だったんだ……。

だからあんなに親しいんだね。

真琴が私の手をひいて、机に座らせる。

私はどうして真琴がそんなことするのか分からず、真琴を不思議そうに見る。

真琴は私の肩にそつと手をおき、小声で私に伝える。

「…… 槇野は女子から凄い人気があるの。だからココロ、気をつけて。女の嫉妬ってこわいから」

少し険しい顔。

どうしてそんな表情をするの? 気をつけるって何を?

そんなの知らないよ。 隼人さんが人気だろうと私に関係ないも

の。

それに隼人さんは誰にでも優しいからいいんじゃないかなって思う。

ぼんやり考えていたら少し変な笑い方をした女の子が教室に入ってくる。

柴崎さんだ。柴崎さんの隣には隼人さんがいて楽しそうに笑っている。

柴崎さんはチラリと私を見てニヤリと笑い、隼人さんの腕に手を絡ませる。

付き合っているみたい……。

女子のほとんどが悲鳴をあげている。

隼人さんは「どうしたの？」というように柴崎さんを見つめる。

真琴はギュッと強く拳を握り締めていた。

私は今日も美術部にいく。

今日は真琴もいた。

フワフワの先輩は私が来るのを確認すると必ずだきつく。

そのたび美人さんがとめにくるんだけど……。

そんなやりとりをしていると千恵が「男バスがいるよ？見ないの？」と笑う。

私は千恵を軽く叩くと美術室の窓をみる。そこからは男バスがシュートをしようと練習していた。

私はなぜかあいつが見たくなり、他の男バスの男など全然見ず、あいつー大西を見る。

シュートをはずすと悔しそうに強くボールをとり、シュートをすると以前のような笑顔を見せた。

私はまた胸がきゅっとしめられたようになり、高鳴る。私はこれが限界で大西から視線をはずす。

すると千恵が「あれ、隣席の男の子じゃない？」と私に知らせる。千恵が言うところを見ると隼人さんがいた。

友達と楽しそうに話しており、出番がくるとボールを投げる。見事シュートする。

「きゃあ！ココロ、あの男の子カッコいいよー！」

千恵がわあわあと騒ぐ。

隼人さんも男バス体験してたんだ……。

確かにスポーツしてるところはカッコいい。

足もしゅっつと細いけど筋肉はついており、前から運動してたんだろっな……。

きっと足もはやいだろっ。

私が窓を見るのをやめようとするとう隼人さんが少しだけこちらを見て、手をふってきた。

あまりの驚きに私は混乱し、千恵はきゃー、とはしゃいでいる。

私の顔はみるみる熱くなり、きつと真っ赤になっていると予想がつく。

隣にいた千恵がクスクスと笑い「ココロは誰に惚れているのかな？」と面白がる。

私はまだ隼人さんがこちらを見ているので恥ずかしくなり、窓から離れる。

でも顔が熱いのは消えない。

いくらクラスメイトで隣席だからってそんなことなくていいのに……。また女子がヤキモチやくよ？

私はなんだか早く学校から出たくて小走りで門をくぐる。
すると後ろには隼人さんが!!

「星野さんだ! 美術室にいたけど美術部に入るの?」

「あ、まだ分からないかな。今のところは美術部だけで」

隼人さんの隣にいる友達がジロジロと私を見る。

な、なんだろう? 私に何かついてるかな?

「この星野って奴、隼人の彼女?」

「は、はあ!? 何言つてんだよ!? 同級生で隣席だけで! 彼女なんかじゃない! そんなこと言ったら星野さんに迷惑だろ!」

隼人さんは顔を真っ赤にして否定する。

別に迷惑じゃないけど……そんなに全力で否定しなくてもいいと思うんだけど……。

でも彼女がいるなんて噂をたてられたら女子は嫉妬するし、むしろ隼人さんが大変な気がするなあ……。彼女、出来るのかな?

「ご、ごめんね。こいつに後でいろいろ話すから。じゃ、また明日」

その友達の背中をおし、私と反対方向に戻る隼人さん。
もしかして私に声をかけるためだけに反対方向なのにしたの?
どうして? 時間の無駄なのに……。

隼人さんが別れ際にみせた笑顔は無邪気で綺麗でかつこよくて……。

また、胸が騒がしく高鳴るんだ。

o n e s i d e d l o v e r 3 彼の笑顔（後書き）

隼くんは個人的に凄い好きです

沢山ココロと絡ませてあげたいのです……。

隣席のお話が好きで蜜柑色でも書いてしまいました……。

「君と繋がる」だけにしようと思っていたんですけど。

とりあえずほんわりした雰囲気を出したいなあ。

o n e s i d e d l o v e r 4 相談（前書き）

一カ月放置……。

不定期更新なので遅れる場合もあるのであたたかい目で見て下さいね。

二カ月放置はなんとかしないようにします！

one sided love 4 相談

あの日から数ヶ月が過ぎてもう真夏。

春とは違い太陽の光が強くなり、暑くなる。

夏が苦手な私は早く秋が訪れたらいいのに、と思う。

でもよく「夏は爽やかな恋の季節」と誰かが言ってた。
どういう意味か全く分からないなあ。

私は手に握り締めているスケッチブックを鞆にしまい、美術室に向かう。

「あらーココロちゃん、来てくれて嬉しい」

「来るのは当たり前じゃないですか。美術部に入部したんですから」

私はもう何か月前に美術部に入部した。

楽しそうだから、というのもあるけど一番の理由は先輩に頼まれたから。

「美術部がこのままじゃなくなっちゃう！お願い、入ってほしいの！」と頼まれ断れなくなった。

でも千恵と美咲も入ってくれたからいいんだけどね！

「もうすぐ五時かあ。そろそろ帰る準備でもしようか」

フワフワの髪先輩は持っていたスケッチブックをなおし、鞆を机に置く。

私もすぐに鞆を机に置き、先輩にさよならと言った。

今日も部活がある。

勿論楽しいのだが何か物足りない。

そんな気になる。

なんとなくだけど不意に教室に戻る。

そして隼人さんの机を指で軽く触れ、なぞる。

誰もいないから出来ただけで誰かいたら絶対に出来ないことだ。

そんなことをしたら隼人さんのファンの女子に殺されるのではないだろうか。

……こわい！ 考えただけでブルブルと震えちゃうよ……。

「……ほ、星野さん？」

慌てて振り返ると少し息を荒くした隼人さんがドアのところにたっている。

え。み、見られた！？

は、恥ずかしいー！！

「何してるの？そこ、僕の席なんだけど」

近くに寄ってきた隼人さんの声に私は震えてしまう。

お、怒ってる……かな？

ど、どうしようー！！ あ、謝らなきゃ！

「じ、ごめー」

「え？なんで謝るの？僕の席に触ってただけなら全然いいけど？それに忘れ物を取りに来ただけだし」

隼人さんの言葉に驚き、私は隼人さんを凝視する。

すると机の中からタオルを取り出し「これ、部活にいるんだよ」と笑う。

そういえば隼人さんは何の部活してるんだろう？

「何の部活してるか気になる？ そんな顔してるよ。……僕はバスケ部！」

バスケ部かあ……体験していたしなあ。

でも隼人さんは運動神経抜群だからサッカーでもよかったのに。

「バスケ部に入ったのはね、ライバルがいるからなんだ。名を棗。大西 棗。棗は運動神経抜群なんだよ？ だからバスケ部のエースだよ。棗とはいいいライバルになれそうなんだ。あいつも僕のことエースと思っててライバル意識されてるしね。それに……棗は恋敵だし」

ふえ？ 最後に言った言葉、よく聞こえなかった。

小さく呟くように言ったから。

「なんて言ったの？」と聞くと隼人さんは柔らかい笑みをして「星野さんは知らなくていいよ」と言うから余計に気になって。

「星野さんは部活は？」と優しく問うから私もつられて笑顔になって「美術部だよ」と言った。

「槇野さんは大西と仲が良いいんだね」

「……まあ。あのさ、星野さん。僕のこと『槇野さん』じゃなくて隼人って呼んでももらえない？ その方がなれていいんだ」

私は少し戸惑ったものの、他の人も呼び捨てだしいかと思い、隼人さんを隼人と呼び捨てにすることにした。

隼人、と呼ぶと本当に嬉しそうに彼が笑うから。

私も幸せな気持ちになってまた彼の名前を呼んでその笑顔が見たくなる。

「あー。もう戻らないと先輩に怒られるな。またね、星野さん」

君が手を振るから私も振替えして。

君が教室から出て行くと私は顔が熱いことに気が付いた。……

見られてないかな？

見られてたらどうしよう？ は、恥ずかしいよ……。

私は鞆を見て部活のことを思い出した。

あ、行かなくちゃ！先輩がきつと顔を紅く膨らませて「遅いよ」と怒りそう。

先輩はそんなことをしても可愛いから羨ましいな。

廊下を歩くと曲がったところに先輩と見知らぬ男の人が楽しそうに話していた。

先輩は俯きながらも必死に喋っているので可愛い。

先輩はその男の人と別れると私ににこりと微笑みかける。

「見られちゃったかあ」。ココロちゃんなら言ってもいいかも。わ、わた、私ね、あの人のことが好きなのー！」

きゅつと恥ずかしそうにはにかみながら先輩は小さな唇を動かす。
でもね、と悲しそうにも笑う。

「あの人は私を見てない。本当は私なんかより、あの娘の方がいいの」

先輩が見るのは美人さんだ。

先輩は『片思い』をしているのかな。だからそんなに切なそうに笑うの？

先輩の横顔は千恵や美咲の横顔とよく似ている。

千恵達も、好きな人のことを話すと嬉しそうにするけど、でも本当は深く悲しい笑顔。千恵も美咲も言っている。「アイツは私じやなくて他の人を見ている」と。

先輩もそう言ってる。

「相談が、あるんです」

「ん〜？私で良ければなんでも聞くよ〜？」

私はその場では言いにくいので裏庭に出た。

先生が花が好きらしいので育てている鮮やかな花が沢山。

中でも好きなのは向日葵。

夏限定で先生が育てているんだ。花言葉は『あなたを見ている』

。

私はその向日葵に近寄り、すぐ側でしゃがみこんだ。

「先輩、恋ってなんですか？」

先輩は驚いたように目を見開き、口を開けたままにする。

私は苦笑すると「恋がよく分からないんです」と付け加える。

先輩も向日葵に近寄り、向日葵を優しく見つめる。

「そうね、向日葵のよう。いつも彼を見つめていて、切ないくらいどうしようもなく想う。……喋れると嬉しくて、ドキドキしてでも他の女の子と喋ってる嫉妬しちゃう。案外複雑ね、恋する女の子は」

先輩はにこにこしながら向日葵を撫でるように向日葵の上に右手を翳す。

私は先輩が幸せそうに話すから、もつと幸せになってほしい。そして私はきっと酷いことを言った。

「恋なんてしなければいいんじゃないですか？」

「そう思うわよね？でも無理なのよ。恋は気付いたらしているもの。恋したら自分を成長させてくれる。強くさせてくれる」

先輩は少し表情を曇らせた。きっと私が無神経だから。

先輩に失礼なことを言ったから。

恋をしたら強くなれる？

分らないけど、傷つくのは恐

い。

「ココロちゃんもいつかするよ。そしたら応援頑張るよ。恋は素敵だって言うよ」

私には、そんな経験できますか？

先輩のように優しく相手を考えられる、優しい人になれますか？

私は相手のことを本気で想えるのですか？

先輩はその人を好きになって悔いはないのですか？

そう聞こうと思ったけれど、私は自分で確かめたかった。
私にもそんな人は出来るのか。

それに本当に先輩があの子の人を諦めたら聞きたい。

「先輩は後悔しませんでしたか？」

そして先輩はなんて言うのか。

なんて、言うのかな……。

先輩は「ココロちゃん、部活に遅れても大丈夫だから」と私の肩を優しく叩くと裏庭には私だけになった。

「星野？」

私はくるりと後ろを向く。

するとそこには……アイツが。

「なんだよ、んなところで」

私はアイツ、大西を見る。

大西は体操服を着ていて、片手にはタオルと水筒があった。
汗を凄いかいていて髪の毛が首に張り付いている。

確か……大西もバスケット部だね。

部活じゃないの？

「部活はどうしたの？まさかサボリ？」

「そんなことしねえよ。今は、その……休憩だ！」

そうなんだ？

私は少し頬が熱くなるのを感じながら大西に笑いかける。

そっぴいえば大西と喋るのは何年ぶりかな。

あの日以来まったく話すのもなくなつた。

あれは私が悪いんだって分かっているけれど。

「でもさ、星野と喋るの俺がフラれてから全然喋ってねえよな？俺が星野に告って星野にフラれて……あの時はズタズタだった」

やっぱり大西も覚えてる。

私は何も言えなかった。これ以上言ったらまた大西を傷付けてしまいそう。

失いそうで、怖い。

「棗！お前部活サボって何やってんだよ！？なかなか来ねえから心配したんだぞ？」

隼人が来て棗を軽く叩く。

え？やっぱりサボり！？

棗は隼人さんに引つ張られどこかに行ってしまった。

私はまだ美術室に行けなかった。

だって、きつと顔が紅い。そしたら千恵にからかわれてしまう。

「ココロ？こんなところにいたんだねえ？」

あ。誰の声かはつきり分かった。

私は声の主――美咲に抱き付く。抱き枕のように。安心感を求めるように。

美咲は「どうしたの？」と笑いながら聞く。そしてよしよし、

と私を抱えるように抱き締めかえしてくれる。

私は美咲に思い切って聞いてみた。

「七年も想えるのは本気の恋なの？」

美咲はうん、と首を左右に振ると急に真面目で真剣な表情になる。

「そんなことないよ。何年も想い続けたからって本気の想いとは限らないよ？一瞬でさめちゃう恋もあれば一瞬で本気になる恋だってある」

驚いた。

だっていつもは幼い美咲がしっかりと自分の意志をもっていたから。

美咲はしっかりとしないで千恵がいないとだめと思っていたけど全然違う。美咲はちゃんとしっかりとしてるんだ。

しっかりとしないのは私の方なんだ。

私もちゃんとおどしないで自分の意志をもたなくちゃいけない。

美咲のように、優しく見守るような、そんな強さを。

「大丈夫だよ。恋は叶わなくても相手の為に来ることが絶対にあるから」

美咲は「お見通しなんだから」とくすくす笑うけど、お見通しって何が！？

ま、まさか……美咲も思ってるのかな？

私が大西のことが好きだって……。

「わ、私は恋なんかしてない!!」

「あれえ〜？私、恋なんて言ってないけど〜？」

は、はめられた！

美咲も千恵に似てきて……私が困ってるのを楽しんでる！！

……うー、ひどいよ、美咲も千恵も。

「じゃあ、部活始まっているから早く戻るよ〜？先輩心配して
たんだからね〜？」

美咲が私の手をひいて早足で階段を上って行く。

途中こけそうになったけど美咲の優しさが嬉しくて。

私は美咲のようにしっかりするようにするからね。

友達を、支えられるように。

o n e s i d e d l o v e l 4 相談（後書き）

蜜柑色の更新ペースは月1更新です。

早かったら月に何回かは更新出来と思います。 5話は書き終

わっています。がすぐに更新しません。

探検隊の方もあるのでバランスを崩さないようにしていきます。

蜜柑色、次は六月更新かなあ……。

one sided loves 気になるのは(前書き)

蜜柑色の更新日は28日か29日にしようと思います。

一カ月に一回更新で決まりですね……。

でも更新日は守りたいと思います！

読んでくれている皆さんも更新日の28日か29日に読みにきて
くれると嬉しいです。

one sided loves 気になるのは

「ココロ。次、体育だよー」

真琴が体操服を持ちながら私に言う。

私は昨日のことでぼんやりしていた。

美咲や、先輩。皆強いってこと。

私はそうだね、と相槌をうち鞆の中に入れっ放しの体操服を取り出し、長く茶色が少しだけまざっている髪の毛をポニーテールに結う。

長い髪はいろんな髪型にアレンジ出来るから好き。でもくっついてないと邪魔になることもあるからせめて体育の時だけ結うようにしている。

「あ、そういえば今日の体育は四組とだね」

「……………はい？」

ぽかんとする私に真琴は知らないの？、と首を傾げる。

その時にさらりと揺れる髪はなんて可愛い仕草なんだろう。

「なんかね、時間割りが変わって四組になったよ。四組となるのって初めてだよね」

真琴はうーん、と伸びをする。

私は四組に誰がいるのだろうと思う。

千恵、美咲、大西……。

お、大西！？ なんて出てきたの！？

片手に持っているタオルを落としそうになりタオルを持っている

手に少し力をいれる。

「あ、暑いからお茶とタオル持って行かなくちゃ。待っててくれる？」

「うん。美咲達のところに行ってるね」

そう言うと四組に向かう。

窓から覗くと千恵が机の中を必死に探っている。　どうしたのかな？

我慢出来ずにドアノブをきつく握りガラガラと開ける。

千恵はびっくりしたように固まり、淡く笑む。

「来て、くれたんだ？美咲は先に行った。私も水筒を取ったらすぐに行く」

だから机をいじってたんだ。

ふと机の上を見ると制服が綺麗に畳まれている。　ブレザーは椅子にかけてある。

千恵は私のタオルを見て、それは？、とタオルをじっと見ている。

「このタオルは汗ふきだよ。夏は汗かくからね」

「へー、可愛いタオル！桜桃の柄だ。ココロらしい、可愛い柄」

千恵はふんふんと鼻歌を歌いながら水筒を片手に行こうよ、と笑いかける。

あ、真琴を待たなくちゃ！
でもまだいるかな？

「ココロ、待っててくれたんだ！千恵、だっけ？宜しくね？」

ひよこ、と小動物みたいな真琴が顔を覗かせてはにかむように笑う。

千恵もにこつと笑うと宜しく、と言いウィンクをおくる。

活発な千恵は見た目とギャップがある。

男っぽいな、って思ったら意外に女の子らしい。

そこがお姉さんの存在なんだけど。

「ココロ！ぼーつとしてない！遅刻するよ！」

「あわわ……。行くから！待ってー！」

千恵が軽く頭をポン、とたたく。

私は急いで千恵と真琴の後ろについていく。

2人は気が合うのか話が弾んでいる。

私には分からない、いろんな話。

あれこれしているとグラウンドに着き、皆並んでいた。

これは……。遅刻だ。

急いで並ぶとそのままマラソン。

少し息を切らすと先生が満足したように笑顔。

「よし！走ったことだし、今日の体育はサービスして1500メートルを走るぞ！タイムはちゃんと覚えろよ！」

先生……。それサービスじゃありません。

タオル持ってきて良かった……。

でも走るの嫌だな。そういえば大西の走り……。見たことないな。見て、みたい。

「隼人ー。棗いるぜ？ライバル対決だな！どっちが速いんだろ
うな」

「プレッシャーかけないでほしいんだけどな。ま、対決ってそ
んな大袈裟なものじゃないけど」

男子の列から冷やかしにも似た声。

隼人は呆れたように笑う。

大西も隼人の近くにやってきて肩に手をおく。

隼人もにやり、と楽しそうに笑う。

そんなに楽しみなのかな。ライバルと意識しているからその人
と勝負するのは嬉しいのだろうか。

私には分からない、ライバルの存在。

すぐに走る準備をするともういつせいにスタート。

後ろには千恵がいてくれて励ましてくれる。

で、でもしんどい……。

ゴールして、タオルで汗を拭くと隼人と大西は地面に座って、胡
座をかいている。

そしてお茶を飲みながら笑い合っていた。

「あー。まさかまた同じタイムでゴールするとはな。やっぱり
ライバルだ！隼人は、俺のライバル」

「嬉しいこと言ってくれるね？僕のライバルも棗しかいないよ」

そんな会話が聞こえる。

2人は信頼してる。

友達だけど、ライバル。 そんな関係なんだろうな。

「おし！もう一回勝負しようぜ！」

「うーん、いいけど先生が許してくれないとだめじゃん」

隼人は冷静。 逆に大西は落ち着きがない。

モテるのはきつと隼人の方だろう。

私なら隼人の方がいい。 大西はなんか……無理かな。

2人は先生のところへは行かずにそこらへんのグラウンドにスタ
ートラインをつくる。

そして次の瞬間……走った。

綺麗なフォームで走り、同じぐらいで横に並んでいる。

隼人さん、速い！

でも……目が追っているのは大西アイツでー！。

「こら！勝手に遊んでんじゃねえ！」

先生が気付き2人は途中で走りをやめる。

もう少し、見たかった。

君の、その走りを。

「へえ！カッコいいじゃん！あの、四組の」

柴崎さんがくす、と笑う。

大西のことを言っているのかな？

そんな不安に一瞬戸惑う。 どうして私、こんなに不安になるの
……。

別に大西に惚れた人がいても関係ない。

アイツが、誰かと付き合ってたって……私には……。

「あー、あれは大西 棗 だよ。柴崎さんに似合わない。平凡すぎるよ、棗は。柴崎さんは槇野 隼人 と似合うよ」

四組の女子がため息1つ。

柴崎さんはふうん、と呟くところに来て私の目の前でしゃがむ。す、凄い綺麗で整った顔が私のすぐそこに……！
男子なら一瞬で心を奪われるんだろう。

「ねえ、星野さん。大西 棗 と隼人、どっちが好み？」

どうしてそんなこと聞くの？ 分からないよ。

私にはそんな話する必要ないでしょう。

柴崎さんがどうしたいのか分からない。

言った方が、いいのかな……。

「ううんと……おお、……隼人」

大西と言いそうになって口を塞ぐ。

勘違いされると嫌だから。

アイツに気があるなんて思われたら、最悪。

だから隼人にした。

ごめんね。

「そうかあ。隼人紳士的だもんね！私ってカッコいい人より、どこにでもいそうな平凡な方がいいのよね！だから私は大西 棗 が好きかもね」

柴崎さんの言いたいことはそれだけ？

なら、他の人に言えはいんじゃないの？

私だって聞いて嫌なことってあるんだから……。柴崎さんは声を出すとまっすぐ迷いのない足取りで大西の前に行く。

そして笑って話しかけている。

「棗だよー！初めまして！六組の柴崎。さっきの走りかったよかつたじゃん！」

「俺のこと知ってた？初めましてなんていらねえよ。柴崎、か。ありがとな」

照れくさそうに大西が笑う。

柴崎さんは、積極的だ。気に入ったら手に入れようとアピールすると聞いたことがある。それはきつと大西を気に入ったということになる。

チャイムが鳴ったので重い足を引きずるようにして教室に戻った。あとから真琴達に心配された。

大丈夫だよ、と笑って誤魔化すけれど……。今感じてるもやもやはきつと気のせい。

気付いちやだめ。

この感情が何なのか、気付かないふりをして心の変化に目を瞑る。それが今の私に出来る、卑怯なやり方。

帰る時間になり、四組で2人が来るのを待つ。真琴も一緒に帰ったかったけど別に帰る人がいるみたい。

なら邪魔したらだめだよな。

だから真琴と一緒に帰ろう、と言わなかった。言ったら邪魔してるから。

私は待つてる間暇だったので窓からグラウンドを見る。

サッカー部が陸上部が知らないけど何人が走っている。

私も部活したいけど、今日は活動日ではない。だから大人しく帰るしかない。

「星野さん？あれ、四組に待つてる人がいるの？」

声のした方を反射的に振り向くと隼人がいた。体操服を着てい

て、今から部活があるのだろう。

水筒を手に持っている。

「うん。今日は部活がないから友達と帰るの。隼人は今から部活？」

「そうだよ。夏に運動部は走り回るから辛いんだ。吹奏楽部とか美術部はクーラーのきいてる部屋にいられていいなあ」

私は思わず笑ってしまった。こんな暑いなか毎日のように大西と走り回っているのかな。そう思うと笑ってしまう。

隼人も柔らかな笑顔を浮かべている。

「じゃあね。遅れると先輩に怒られる。あ、今日雨降るかもよ。気をつけてね」

隼人は階段を2段飛ばしでおりていく。

ちょうど四組のドアが開き、そろそろと出てくる。

千恵が怒ったように大西と言いつつ合っていた。こついつところは

小学校の時から変わらない。

「棗ー！」

ふとアイツを呼ぶ声がして大西の元へ駆け寄った女の子ー柴崎さんを見る。

体操服を着たまま。

この人も運動部だ。

「ね、一緒に行こうよ！私、女バスだしさあ！近いからいいでしょ？」

「んー。断る理由、ないしな」

柴崎さんはやったあ、と喜んで顔を綻ばせる。 2人は仲良く私の前を通り過ぎて行く。

そんなこと、気にしない……。

大西は、誰のものでもない。今は。

「もー！大西め！綺麗な子と幸せそうにして！……ココロ？大丈夫？」

「……………何が？わ、私は元気だよ。心配しないで」

作り笑いを浮かべ、窓をふと覗く。

するとさっきの晴れやかな天気とは比べられないくらい雨が降っていた。

「傘、持ってない」

そんな千恵の眩きすら聞こえないほどに私の心は雨に濡らされた
ようにしんみりとしていた。

o n e s i d e d l o v e r 5 気になるのは（後書き）

ココロの心情はぐらぐら揺れてます。

幼い子供じゃないんですが「恋」が分からず迷ってしまう。

柴崎さんは……もう分かりますね（笑）

隼人も分かるんじゃないでしょうか？

秋のお話、細かく設定中です。

one sided love 6 2人の距離（前書き）

サブタイトルは関係ないかもしれませんが。

さて、次回から秋話ですよ！

早くてすいません！秋話も3話ぐらいで終わります。

だいたい3話を目安に季節を変えています。だから春も夏も3話で終わっていますね。

もっと長くかけたらいいんですがサクサク進んだ方が読者様には読みやすいのかもしれません。

one sided love 6 2人の距離

私は鞆を頭の上に乗せて落とさないように手を添える。

その状態で雨の中、走り中。 千恵達を待っていて気がついたら降っていたもんだから。 傘、皆持っていないのでこうするしかない。

寒いし、濡れるし……。 風邪ひきそう……。

千恵がちらりと私を見てため息。
どうしたんだろ？

「ココロ、本当はもやもやしてるんでしょ？」

「してない！そんなことない！」

もやもやしてるんじゃない。

胸の奥がさつきからイライラする。

なんて、いうんだろう……。

何か、分からないけど見たくないものを見たような、そんな感じ。
何を見た？ 悪いものなんて見てない。

「まあいいけど。でも、忘れないで。私はココロの味方だからね」

千恵はいつものように優しく話す。

私は……強くなるって決めたのに。

イライラしてるからって友達に八つ当たりなんていけないこと。

ごめんね。千恵。

私は支えられてばかり。なら、私から恩返ししなくちゃ。

「じゃね。辛くなったら電話でもしておいで。家に来て私も私は

全然大丈夫だからねー」

「ありがとう……ごめん、千恵……」

泣きそうになるのを必死に押さえて言葉を紡ぐ。　泣いたらまた迷惑かけてしまう。

だから2人の前では絶対に泣きたくない。
意地なのかもしれないね。

2人と別れ、家にフラフラと帰る。

そしたら、誰かが家の近くのところ誰かが蹲っていた。
声をかけようとして肩に触れるとびくり、と震えた。　何かに怯えてるように。　顔を覗くと……あれ？　もしかしてこの子は真琴？

「真琴なの？どうしたの？」

その子は顔をパツと上げる。　あ。やっぱり真琴。　でもいつもの顔じゃない。

目は赤くなってるし、涙のあのようなものが1つ。
私が肩に手を添えると瞳の奥が揺れた。
泣くのを我慢してる？　目は潤んで今にも雫が零れそう。

「真琴、具合悪いの？道路でこんなことしてたら迷惑になっちゃうから……とりあえず私の家に来る？」

真琴は反応しない。

ほっとけないし、家にいれるしかないよね。　1人で泣いてたのかもしれない。

なら、私は傍にいてあげたい。　真琴の不安や悲しみを支えてあげたら。　力になれば。　真琴を擦りながらエレベーターのボタンを押し、待つてる間ハンカチを差し出す。　真琴は震えてる手で

握る。エレベーターには人がいないから良かった……。

家の鍵を開け、真琴を部屋の椅子に座らせて落ち着くようにとお茶を出す。あ、雨だったから私達、びしょ濡れだった……。

タオル、持っていないかなくちゃね。

窓を見るとますます雨が激しい。

真琴のところに戻るとお茶をおいてタオルを渡す。

「悪いよ、こんなの……お茶だって……」

「いいよ？真琴は友達なんだから。気にしないで。ほっとけな
いもん」

両親は仕事だから。そう言うとき真琴はゆっくりお茶を飲んで「
おいしい」と落ち着いたように涙を拭き取る。

「何が……あつたの？」

はつきり聞いたらだめだけど。

でもそうしないと聞けない気がしたの。

隠すっていうのかな。よく分からないけど。

真琴は黙る。言にくいのか、言いたくないのか。

言いたくないなら聞いた私が悪い。

「過去のことを思い出してた。ごめん、私長居するのはよくない
いからもう帰るね」

真琴は逃げるように玄関に行き靴をはく。あ、真琴って傘ない

よね？ 今、どしゃぶりだけど……。

貸したほうがいいはず。雨の中帰ったら風邪をひくからね。

傘を見ると私のお気に入りのお花柄がモチーフの可愛い傘がある。

クローバー、椿、秋桜、梅などの四季の花がちりばめられていて華やか。

真琴を引き止め傘を渡そうとすると真琴は暫く傘を見つめ苦笑。

「可愛い傘だけど私には可愛すぎるかな……。透明なのない？
シンプルなの」

「ん。そっか。待ってね……」

傘を見ていくとシンプルが少ない。いや、ない。

……しょうがない。透明はないけど全体が青ならある。

これでいいのかな？ 真琴に似合う色は分らない。

小動物みたいだから……。自然色。

その色が似合う。

私の勝手な想像でよく間違えるけど。

「青？わあー。シンプルでいいね！」

嬉しそうに真琴はきゃっきゃと笑う。

真琴はパン、と音をさせて傘を開くと雨の道を帰ってく。

その時の後ろ姿は寂しそうに見えた。

錯覚……。かな。

とりあえず私は宿題でもしよう。数学とか苦手なので分かるようにしなれば。

得意とすれば社会だろうか。いや。それは小学校の話。

社会は難しくなるだけ。得意科目……。ないかもしれない。

それはそれでだめだろうなあ。

宿題したらお風呂に入ろう。今入ってもいいけど宿題で手が汚れてしまう。

テキストを出してみると……。ううん？

あれ、なんだこれ？　こんなの分からない……。
計算式？　うーんと……。　…………　やめよう。　明日美咲に聞
こう。　美咲、あんなにゆっくりでも賢いからなあ……。
羨ましいなー！
お風呂入ろつと。
私はシャワーを浴びて冷えきった身体を温めそのまま布団に倒れ
こむように寝転ぶ。
眠い……。　少しなら寝てもいいよね……。　少し、だけ……。

「んー……。何か眩しい……」

起き上がって窓を見る。　太陽が出ていた。　私、あれからずつ
と寝てたんだ……。

太陽の光は眩しい。　思わず目を細める。

「ココロー！　いつまで寝てるのよ？」

お母さんが朝食を作りながら叫ぶ。

制服に着替え、味噌汁を飲み、ご飯に鰹のふりかけをかけていた
だく。

うん。美味しい。

…………　ん？　待つて。私、日直だった……？

「ご馳走さま！　行つてきます！」

小走りで学校に向かう。　隼人、来てるかな？　仕事してたらど

うしよう……。

隼人だけにさせるのは酷い。 日誌を書くのは私でいいかな？
男の子って書くの嫌がるしねえ。

「あー。 星野さん、来た」

隼人がいつもの笑みをして花瓶の水をかえていた。 男の子ってこんなこと嫌がると思ってたけど……違うのかな？ それに嫌みなく似合ってる。 隼人は何をしてても似合うから。
カッコいいからかなあ。

「ごめんね。 忘れてた！」

「いいよ。 僕も忘れてたしね」

え！ なんなんでも……？ いるんだろ？
たまたま早く来て思い出したとか？

「朝練だよ。 朝練があつたから早く来れたんだ。 で、思い出したわけだし」

なんだあ……。 朝練かあ。 私とかにはないから分からないけどきつと大変なんだろうな。 朝は何時起きなんだろう……。

考えただけでゾツとするよ。

私は教室に鞆を置いて黒板を綺麗にする。 あとは……号令とか日誌ぐらいかな。

隼人の仕事も手伝いに行こうつと。

さすがに恥ずかしいと思うから。

教室を出ると笑い声が響く。 この声は誰かすぐに分かった。

――柴崎さん。

柴崎さんの笑い声は癖があるから分かる。でも柴崎さんはどうしてこんなに早いのか？特に用事もないはず……。笑い声のした方を見ると4組の前。そこには小さなシルエツトが1つ。誰のかわかった。朝練。4組。小さい。大西しかない。

「素ー！それはだめでしょー。バカじゃん」

「るっせえなー。仕方ねえじゃん！ならどうすれば良かったんだよ？」

何の話……？聞きたい。2人が何を話しているのか。気になって仕方がないの。こんな気持ち、嫌だから。聞いたところでどうにもならないかもしれないけど、それでも……。

「うーん。あんまり話したことないんでしょ？なら女友達としてすればよかったのよ！……私じゃだめ？………みたいな冗談を言える関係にね」

「ふうーん。柴崎はそんなふうに言われるのがいいのか？」

柴崎さんは顔を少し紅くさせ、目を泳がせる。少しだけ手をパタパタと動かし何かを伝えようとしてるのは見て明か。

「わ、私は！自分から言う派！告白は自分が言いたいのに！」

「そーか。俺はなかなか言えねえよ。フラれたら最悪だし？」

告白……。私もしたことがなかった。

うっん、好きな人がいないからする機会もなかったんだ。好きな人が出来たら嬉しい……？

告白したい……？

そんな想い羨ましい。

「星野さん、そんなところでなんで蹲っているの？」

横を見たら心配そうに私を見る隼人が映る。私は立ち上がり出来るだけ笑顔を作って「何でもないよ」と話す。隼人はそれでも心配のまなざしをやめなくて。言ったことを信じてないな。

そこが隼人の優しさでもある。他人^{ひと}を心から心配して。この人は誰からも好かれる。そう思う。花瓶をそつと窓側に置いて窓を開ける。空気の入れ替え。

皆が来る前にはやはり綺麗にしておきたいものだ。

「そういえば美術部って文化祭何を体育館に飾るの？」

油絵のことかあ。もうすぐ秋だから文化祭には体育館に絵を飾ることになっているんだよね。私はまだ油絵を完成させてないけど先輩達の絵は上手い。さすが部長さん。

でも何を飾るか教えたらつまらない。

文化祭まで秘密。

「秘密。文化祭で見てほしいから」

隼人はそうだね、と苦笑う。苦笑う理由は分からないけど私が気にしてたらだめだろう。筆箱を取り出してノートに絵を書く。スケッチブックがないときはノートに書くようにしている。

それはそれでいけないなあ……。

ノート、すぐに減るし。すると隼人が後ろから覗き込んだ。びっくりして持っていたシャーペンを落としそうになる。

隼人の整った顔が近くにあると心臓に悪い。知っててやってる

なら性質たちが悪い。

「星野さん、頼みがあるんだけど、いいかな？」

「出来ることならいいよ？」

にっこりと笑いノートをとる。

そして自分を人差し指で顔のあたりを指すと「僕を描いてよ」と言う。 え……？ どうして？

「星野さんの絵って柔らかいね。優しいって言うのかな」

ノートをペラペラとめくり私が今まで描いた絵をゆっくり見ている。 褒められた……。 優しいなんて言われたの初めて。

未熟だ、とか荒削りってよく顧問の先生にも言われた。

だからずっとスケッチしてたの。 時間があつたらいつでも。

そんな絵を、好きだと言ってくれる人がいる。 もったいなくて泣き出しそうになるよ。

「描いてくれますか？」

わざとらしい言葉に思わず笑う。

私の返事を分かっているんだろうね。 君は。 だからそう言うんでしょう？ 私も嫌ではないよ。 むしろ嬉しい。 君を描けるなんて。 勉強にもなるから、ありがとう。

「油絵が、終わってからでもいい？今は油絵に集中したいから」

「いつでもいいよ。油絵、楽しみにしてる」

そうだね。 君に喜んでもらえるように良い作品になるよう、頑張るよ。 だから待っててね？ 君の柔らかな笑顔を描けるまで。

one sided love 6 2人の距離（後書き）

棗との絡みがなくてすいません！

なんだか棗より隼人の方がココロと恋愛関係になりそうですよね。

今の話を展開で例えると起承転結の「起」なんですよ、まだ。

「承」の部分はまだ先……。

ココロと棗の絡みはいつなのか？

それは……まだ先です

one sided lover 7 描くと決めたから（前書き）

蜜柑色更新ですね。 蜜柑色は書いてるとどんどんココロと棗が絡まないような……。

次回かそのまた次回に絡ませる予定です。 7で秋になりましたが冬あたりで蜜柑の意味が少し分かっていただけるか……。

one sided lover 7 描くと決めたから

私は隼人と約束してから熱心に油絵に取り組むようになったと思う。自画自賛かもしれないけど前よりはやる気が出たの。

綺麗な絵にしたい。隼人が褒めてくれた優しさがある絵に仕上げたい。

「あら。ここの部分、綺麗に出来てるよ。ん……でも少し悲しい絵ね。青が沢山あるからかしら」

ふわふわの先輩は片手に細筆、もう片手には絵の具を持っているという構図。

先輩、少しでも表情を曇らせるけどそんなところも可愛い。

やはり、可愛い人は何でも似合ってしまう。先輩の隣に美人さんがいても負けないくらい可愛いけどな。

ちらり、と先輩のエプロンを見る。音符や星が散らばっている可愛いエプロン。

それにくらべて私は黄緑と白のチェック柄。油絵の時は制服が汚れないように、と先生がエプロンを持つてくるようにと言ったので持ってきたのだが……。なんでそんなに可愛いんでしょう？

「ココロちゃん、聞いているの？」

先輩がぷくつと頬を紅く膨らませ赤風船のようになっている。

こんな可愛い仕草、真似出来ない。

うん。可愛い人しか似合わないね。

すると美人さんがふわふわの先輩の肩を数回叩き呆れたように先輩を見る。

「あのさあ……アイツが呼んでるわよ」

ちよい、と人差し指を廊下にあてる。

ドアから覗いてる男の人がいた。ああ、前にみた先輩と話してた人。先輩は紅い顔をさらに紅くして油絵の具と細筆を机に静かに置き、恥ずかしそうに、でも嬉しそうにその人の傍に行く。

「お？エプロン似合ってんじゃないか」

「か、からかわないでよ！な、何か用事でもあるんでしょう？さっさと行って」

先輩は冷たく言い放つ。照れ隠し？

男の人はちえ、と残念そうに背を向け、鞆を背負う。先輩はぎよつとし、慌てて男の人の腕を引っ張り足をとめさせる。

男の人は「何？」とでも言うように先輩をじとり、と見る。

「用事は何なのよ？なんで帰るのよ」

「あー。俺ね、お前に逢いに来ただけ。別に用事なんてない。逢いに来るのは、迷惑？」

先輩は男の人の腕を放し、戸惑っているのかな。瞳の奥が揺れている。なんて言うか迷っているんですよね？先輩。

素直になることは大切ですよ？意地を張ってたらきつといつか後悔します。

「そんな冗談やめてよ……。私じゃなくてあの娘に逢いに来てるんでしょ！？あの娘に聞けばいいじゃない！」

先輩は叫ぶように。すると泣いたのかその場にしゃがみこんで震えた。美人さんがやれやれ、と先輩に近付く。先輩が言うてる「あの娘」は美人さんのこと。

男の人はため息をついて美人さんをじろり、と睨む。美人さんも男の人を負けずと怖いくらい睨む。

「てめえ、泣かせんじやないわよ！約束が違うじゃない！」

「お前こそそいつに何か言ったんじゃねーの！？俺がお前に逢いに来るとか絶対無いし！」

なんか激しい言い合いに……。と、とりあえず先輩にも話を聞いてもらわないとだめだね？もしかしたら先輩が言ってることは誤解かもしれない！

先輩に近寄り肩を何回かぽんぽんと叩く。先輩は顔を上げて潤んだ紅い目で私を見る。

「だあー！誤解すんなよ！俺は好きな女を泣かせたくねえよ！」

その瞬間、美人さんの顔がふつと和らぎ先輩の方へ向けられる。先輩は顔を上げたくない、と訴えるように首をぶんぶん振る。

「はつきり言えばいいんだろ！？俺はお前が……好きだ！泣かして悪い！」

先輩はがばつと顔を上げて呆然と男の人を見る。みるみる先輩の顔が紅くなるとつられたように男の人も紅くなる。美人さんは先輩を抱き締めるように包み込み、また男の人を睨む。

「あんたが早く言えばよかったのよ！好きな女の子泣かせて……」

…何やってるの!？」

美人さんが男の人を殴りそうな勢い。

男の人は「う……」と申し訳なさそうに下を向いて頭をぽりぽりと掻く。美人さんはなんていうか……さっぱりしてるな。

千恵と似てる。

先輩はまだ顔が紅くなり、口をぱくぱく動かす。先輩はほっとかしですかー？

「あの、そのー……わ、私……のこと!す、好きなの!？」

「そのことについて今から話すわね。いろいろと誤解してるみたいだから」

ーコイツと私は単なる近所で。顔見知り程度。けどいつからかな。コイツに話しかけられたのよ。ふわふわの髪の毛の女の子は誰だつて。紹介してほしいって言うから。それであんたに紹介したのよ。んで、数日後に「好きになった」て報告してきたから応援するか。約束を1つ。「あの娘を傷付けないこと」それが、条件。まあ、ようするに「泣かせるな」ってことね。

それが美人さんが語ったこと。男の人の相談役だったみたい。先輩と話す機会が出来たのも美人さん繋がりのらしい。

「あとはあんたに任せるわ。上手く伝えなさいよね」

さあ、戻ろう? 美人さんはにこやかに笑って言うものだから私も2人をちらりと見て美術室に戻る。

大丈夫。あの2人なら。不器用で壊れそうな恋だけど。きつと伝え合えば。気持ちちは、繋がるよ。

「ココロちゃん。ありがとう」

美人さんは嬉しそうに言うからなんだろうって思う。けど理由は教えてくれない。

誤魔化すように油絵に取り組んで美人さんはあの2人の、幸せそうな絵を描いていた。

暫くすると先輩が戻りまだギクシャクとした歩き方。その途端、上手くいったんだなって分かった。

先輩はさっさと油絵を片付けスケッチブックを取り出す。

「約束、したの。油絵が終わったら……描いてあげるって」

描くって決めたから。そう言う先輩は幸せそうで。羨ましい。それにその約束は隼人と私の約束にそっくり。先輩は、あの人を好きになって後悔はありませんか？

その問いの答えはもう分かったような気がする。だってあんなに幸せそうな人が後悔なんてしない。

きつと笑って、ないよ、と言うだろう。

私は窓をじつと眺める。外では男バスがいた。その中から隼人を見つけることが出来た。ゼッケンと後ろ姿で。けどアイツがない。元気で、少しやんちゃで、隼人のライバルのアイツが――。

「棗――！こっちだ！」

誰かが叫ぶ。すると真っ直ぐにボールが叫んだ人の元へ。この投げ方は見覚えがある。遠い日の、アイツの投げ方。くるりと違う方へ目を向けるとアイツが。それを見て少し頬が緩んだ。君を、描きたくなりました。

君の彩^{いろ}はどんな彩ですか？
あるとしたら。

元気な君には太陽色ですか？ 少し優しい君には自然色？
でも一番似合うのは……。 苦い色が混ざった、あの色。

「ココロちゃん。油絵終わったのかな？」

先輩が私の絵を覗く。すると、うん、と笑いながら満足そうにする。理由が分からずにいると「ココロちゃんらしさが出てる」と言う。それは褒め言葉なんですか？
なんかすつごくダメだしされてるような……。

「嫌味じゃないよ？あね、ココロちゃんみたいに優しい絵だなあ、って思ってたね」

それは隼人と同じ。 どうして優しいと思うの？ 私は全然優しいくないのに……。

臆病で周りの人を振り回す、そんな性格なのに！ 勿体ないよ、私にそんな優しい言葉。先輩の方が優しいです。

「ココロちゃん……。つまらないこと考えていたら怒るからね」
「？」

つまらないこと……。 そうなのかもしれない。 今気にしていったってダメ。

油絵に集中しなくちゃ。 そして隼人に喜んでもらえるような絵にするんだから。

今はそれ以外のことを考えない。

「あ。この絵は……。ありがとう」

先輩は美人さんの絵を見て一瞬とまる。

美人さんは面白いのかそれとも別の理由なのか、微笑みながら返事を返す。

美人さんに何か言われたのか先輩は顔を固まらせ目に涙を浮かべる。先輩の顔、忙しいな。今日はころころ変わって。

先輩が他の人の絵を見に行くと美人さんは私に教えた。なんて言ったのかを。

「私をふってあんたを選んだアイツと別れるとか言わないでよね。もしそうになったら私、奪いにいくわよ？」

それは美人さんもあの男の人が好きだったということ。告白したけど男の人は美人さんじゃなく、先輩を選んだということになる。でも、美人さんは先輩と男の人を心から応援してた。応援するだけで辛いと思うよ？ 私には……よく分からないけれど。

「最初はね、くつつかなければいいって思ったわ。でもどうしてかな。応援したくなつたのよね。いつまでも友達のままの2人にイライラしてたかもしれないわね」

笑いながら話す美人さんは遠い日のことを思い出すように、振り返るように話す。美人さんはもう吹っ切れているんですね。態度からしてもう男の人は「前の好きな人」になっている。今は「友達」の関係なんだろう。

美人さんはため息をついて少し嬉しそうに笑った。

「でもこれで終わったわけじゃないわよ？あの2人だもの。喧嘩も沢山するわ、きつと。そうしたら絶対あの男は私に泣き付いてくるのよ。相談役は、まだまだ続くわね」

面倒よ、と美人さんは言うが言葉と違い顔は嬉しそう。それは

どうしてなのかな。

相談役はそんなに楽しいの？

美人さんはくすりと笑い「2人を応援してるって感じられるの」と言いキャンバスに色を塗り始める。

「さあ、完成させるわよ。あの2人の絵を描くって決めたんだから」

幸せそうな2人を描くとね、吹っ切れたんだって思えそうよ。

そう言って美人さんはまた柔らかく笑った。私も自分のキャンバスに戻って色を塗る。秋の風に秋の蒼空。絵を描き始めてから自然の微かな変化も気になり始めた。

絵に影響するの、と風景画を描いていた誰かが呟いた言葉。

風景画を描いたことがないから分からないけど風や蒼空に変化があると風景画を描いていた人は消しゴムを持って蒼空を消す。

それほど気になるみたい。絵を描くと先輩達が言った言葉を思いつく。私は風景画じゃなくて果物や花、瓶だけど。

でも次の油絵を描くとしたら私はきつと人を描くだろう。美人さんのように幸せそうな絵を描くなら。

「アイツ、なのかなあ……」

不意に大西が浮かんで呟いた。描きたいけど。もう1人ほし

い。隼人とか？ それとも……。

「そこ、サボらない！」

注意されたので色をぐりぐりと塗る。

文化祭まであと少し。何回言い聞かせるんだろうね？

今は油絵に集中するんだからー！。

one sided lover 7 描くと決めたから（後書き）

先輩みたいに好きな人の前じゃ素直になれない人はいますよね。
照れ隠しとか。

つつい思っていることと逆のことを言ってしまう。よくありますね。

だからこそココロのように素直で無邪気な女の子が書きたくなるんです。こんな娘がいるんですよって。

o n e s i d e d l o v e r 8

文化祭（前書き）

冬は書きたい話が沢山あります。

隼人や棗の友情も書きたいですし。

ココロと棗も増やしたい……。一応冬は大きく動きだします。

先輩が好きな人と結ばれてから数日経つてすぐに文化祭に。

私はなんとか油絵を終わらせて体育館に飾られてある自分の絵を見たと恥ずかしい。

隼人も見てくれるかな。ドキドキした中で文化祭は始まる。最初は吹奏楽部の演奏。知ってる曲から知らない曲まで。凄いなあ！私ならきつとあんなに覚えられないよ……。

吹奏楽部の部員は動きながらふくので大変だろうな。

でも、みんな喜んでるから良かった。

私が心配するのも変だけど。演奏が終わると拍手が大きい。それだけ凄かったからなあ。

吹奏楽部がいなくなると私は隼人と感想を言い合う。

「凄かったねー。隼人はどれが一番良かった？」

「一番最初の曲かな。やっぱり最初だから曲が賑やかで良かったと思うよ」

隼人の感想を聞くと後ろにいる真琴にも感想を聞く。文化祭の時も出席番号順に座るので隼人と真琴は近い。だから話せるので嬉しいな。

「あ、1組の始まったよ！」

舞台の方を見ると確かにライトがあたっていたので口を閉じる。台詞は聞こえないところもあるけれどだいたい場面が変わるのと同じ時に展開が分かっていく。

「私は……あなたを、……好きか分かりません……」

舞台上に立っている女の子の台詞がはつきり聞こえて耳に残る。今の私の気持ちのようで。女の子は泣きながら去って行くという場面だったけど女の子の役は涙を流していなく、顔を隠しながら裏舞台へ消えていく。中学生で役で泣くのは難しいもん。演技を上手く出来なくて当然だよな？ 演技で思ったけど大西は出来るのかな。そもそも役をやっているのかな。きつとしてないんだろうな。してたらそれはびっくりするけど……。舞台を見るとまた女の子が出てきていた。

「好きか分かりませんがあなたに逢うと嬉しくて。話すだけでも楽しくて。この気持ちは何か分からないんです。……あなたは、こんな想いを抱く私をどう思います？」

「別にどうも思いません。ただはつきりしているのは僕は君を好きなだけです。僕に振り向いてくれるまで諦めるつもりはありませんよ」

逢うと嬉しい、話すと楽しい……。

それは大西にいつも思うこと。逢うと嬉しくなるし、時々話しただけで楽しくなっちゃう。この想いは分かる気がして分からないの。これが恋なのかな、って思ったり。でも否定してる、心の中で。これが恋なら楽しいだろう。今まで以上に大西を意識するだろうな。恋と認めたら。でも認めたら自分らしくなくなるかもしれない。それがこわくて認められないよ……。

「私ね。あなたが他の女性といると心がモヤモヤしてイライラするの。あなたが他の女性を見ていても。違う女性の話を私にされても。胸が苦しいの。どうすればいいんでしょうか……」

同じ想い。大西が柴崎さんといるとイライラして。他の女の子といると苦しくなる。どうすればいいのかな……。こんな想い消えたらいいのに。そういえばイライラしたり苦しくなったり……。大西に振り回されることもないのに。

「僕が治しますよ。だから僕と一緒にいてくれませんか？」

「ふふっ。嬉しいです。そうですね。あなたといえるのも良さそうですね。」

恋が全て上手くいくななんて思わない。辛いこと、嬉しいこと、悲しいこと……。

きつと嬉しいことも多くて。悲しいことも多いのかもしれないね。でもきつと恋をしたら何かを得られるよね？ きつとなにか得られるよ。そう思ったら恋をするのもいいかもしれないな。でも今の私じゃ不安もあるから……。少し時間がかかりそうかな。

何が不安がよく分からないけど、何か変わるような気がして。

「星野さんー？ 具合悪いの？」

隣を見たら心配そうにする隼人がいた。

いろいろ考えていたせいか劇は進んでいて今は3組の終わりぐらい？

「だ、大丈夫！ 考え事があっただけで……。心配しなくていいよ？」

「そっか……。星野さんって身体弱そうに見えるから。ほっとけないんだよ」

ま、まずい……。今、きつと顔が赤い。『ほつとけない』なんて言われたら……。隼人は分かって言ってるの？

隼人の方は見れなくて心を落ち着かせる為に深呼吸を試みる。少し落ち着いたような気もして、緊張も和らいだ。

「はい。半分のクラスの発表が終わったので少し休憩にしたいと思います。後ろには美術部の絵が飾られているので見て下さいね」

先生がマイクで言うのと元々高い声がさらに高い。

隼人は席を離れて後ろに行き、美術部の作品を見ていく。約束したから見てくれるのかな。

で、でも……。じっくり見られるのも改めて恥ずかしい……。真琴を見ると後ろで作品を見てるし……。

そ、そういうえば先輩や美人さんの絵はどんなだろう。後ろに行くともみんなの絵があった。

美人さんのは先輩と男の人が一緒にいる絵。

先輩のは青い澄んだ蒼空そらに何かが浮かんでいる不思議な絵。恥ずかしいけど自分のも改めて見た。

ピンに黄色い花に花瓶に葡萄ぶどうがあるシンプルな絵。よく見ると荒削りだと思つ……。色はゴチャゴチャしてるし、物も立体的じゃない。

私の絵ってまだまだ未熟だなんてよく分かるくらいに。

「星野さんの絵、それだね。前と同じ、優しいよ」

「そうかなあ？ 未熟すぎて飾るのが恥ずかしいよ。でも、隼人は優しいね。ありがとう。もっと上手くなるように頑張るよ！」

隼人は一瞬固まると顔を片手で隠しながらどこかに行く。

あ、あれ？ どうしたんだろう？ 変なことでも言ったかな！？

「ココロー！」

後ろに抱き付かれるような感覚があり、後ろを見ると千恵が抱き付いてた。

美咲はのんびりと絵を見てる。

「ココロって隣席の男の子と仲いいね……。羨ましいな」

千恵は隼人のことになると寂しそうにするなあ。
隼人がどうかしたのかな？

千恵はそつと離れると作り笑いを浮かべて真琴と何やら盛り上がる。

この2人は仲良くなれるよね。性格が少し似てる気がするよ。

「席について下さい！」

体育館に凄く響く。マイクで喋らなくても聞こえるんじゃないかなあ。美咲と千恵は4組の列に急いで戻る。次は4組か……。大西は……どうしているんだろう……。

「ココロ。大西ね、役してるみたいだよ」

真琴が席についていたずらっぽく笑う。

いつも思うけど私って分かりやすいのかな？

それとも顔にでてるのかな。舞台を見ると背の低い男の子が立っている。少しくせのある髪に細いのに筋肉がついてる体。大西だっ
てすぐに分かった。服というか衣装というか……。私服っぽい。

でも演技は個性が出るらしいから大西らしさがよくでてる。ギクシヤクした歩き方。苦い表情。なんだか可愛らしくて目が離せない。男の子に『可愛い』なんてだめだけど……。

少ししたら大西が舞台になくなる。どうやら終わったみたい。もう少し見ていたかったな……。

「うわあゝ。4組、面白かったね」

「え？ ああ、うん。面白かった、ね？」

しっかり見ていなかったから面白いか分からない。大西が可愛かったなら頷いて「そうだね」と言えるのだけ。

「ああゝ。ココロのことだから大西しか見てないんでしょ？」

「な！？ そ、そんなことは……」

否定は出来ない……。

だって大西のこと本当に見ていたから……。

で、でも、認めるのも嫌だ。真琴に絶対にからかわれる。

いや、真琴だけじゃなく千恵や美咲にも。

だから少しの間、秘密にしておこう。この胸の熱い想いは。

「次は6組だね……。あー。緊張する……」

真琴は衣装に着替えながら裏舞台に行く。私は背景係で背景を塗るだけだったから別に緊張はしないけど、真琴は役をしてるから緊張もするもんね……。裏方は裏舞台で見るだけだから。うん。劇が始まると真琴はすぐに舞台に立つ。裏舞台でそれを座りながら見る。

「星野さん。こんなところにいたんだね」

「え。隼人？ あ。そうか。隼人はナレーターだよな？」

隼人の手にはマイクが握られている。おまけに片手には台本がある。ナレーターは台本見れるから楽、なんだよね？

「星野さん……。あのさ……」

「へ？ どうかしたの？」

暗くてよく見えないけど何か言おうとして言っていないのか迷っている様子に見える。言いにくいのかな。

「僕……星野さんがー」

「おい！ 隼人！ ナレーターの台詞だぞ！」

隼人の言葉はかき消されてよく聞こえなかったな。『僕は』までしか。小さい声だったから。大きな声でもだめかもしれないけど。

「あ……。ごめん！」

隼人は謝ると台本を見ながらマイクを顔に向けて声を出す。

それから少しして6組も終わると先生の話や後片付けをして、教室に戻って給食。

隼人と話しながら給食を食べるとなんだかドキドキした。意識しちゃった……。裏舞台の暗い時に隼人の顔を見たらすごく男らしくて。男前がさらに男前になったような。心臓に悪いです。本当に……。

o n e s i d e d l o v e r 8

文化祭（後書き）

次回は29日更新です。順番に更新していこうと思っています。
29日に更新したら次は28日に更新。一年生の時の秋は次回で終了です。

o n e s i d e d l o v e r

引退（前書き）

ココロと棗がやっと絡みます。

隼人は出ません。

美咲と千恵がたくさん出るので友情要素が盛りだくさんのような
感じです。

部活は今日、あるかな……。文化祭が終わったばかりだからないかもしれない。

先輩にも逢いたいし……。とりあえず美術室に行ってみようかな。言いたいことも沢山ある。

美人さんにも「上手かったです」と言いたい。早く、逢って言いたい。

「ココロちゃん？ どうしたの？ 部活ないよ？」

「せ、先輩！」

ふわふわの髪をいつもは結っているのに今日はおろしていた。肩につくかつかないかぐらいの髪の長さ。結っていてもう少し長いと思っていた。

「先輩は髪をおろしたんですね。似合ってます」

「あ、ありがとう！ ココロちゃん、本当に可愛い！」

ぎゅっと苦しいくらいに抱き付かれる。せき込むと腕の力を緩めてくれた。

それでも手をほどこうとしない。

先輩の様子がおかしいから不安になる。

「本当にココロちゃんが大好き……。妹が出来たみたいで……。こうしてられるのも今日までだね……」

震えている手。泣きそうなほどに弱々しい声。

先輩は……何を言ってるの……？ 今日までって最後ってこと？
どうして……そんなことを言うの……？

「私も……もうすぐ受験だから。三年生はもう引退なんだよ。
運動部の方がはやく引退するけど……。文化系も今日で引退。今まで
ありがとう。ココロちゃんも頑張って」

先輩と逢えなくなる……？ あんなに沢山喋って沢山恋愛について
教えてもらって……。話したいことがあるのに、言いたい言葉は
出ない。頭が白い絵の具に塗りつぶされたように真っ白。先まで
先輩の顔が見れたのに今は先輩の顔がよく見えない。滲んでいく……。

「もう……。そんな顔しないで。まったく逢えないわけじゃないから。
学校ですれ違いかもしれないし……。卒業したら遊びに来るから……。だから、その……」

先輩が励ましてくれているのは分かる。

でも先輩だって……泣きそうな顔、してますよ……？

先輩にお礼を言いたいのに出てこない。「ありがとう」という言葉。
葉。

でも……言わなくちゃいけない。声が震えていたって泣きそうにな
ったとしても。

先輩に感謝してますから。感謝の言葉くらい伝えなきゃ……。

「先輩……。ありがとう、ございます……。私も、先輩のこと
大好きです」

声が震えて情けない……。顔はきつと涙のあとがあるだろうし。

先輩はにつこりと笑うと耳に顔を近付ける。な、なんだろう？
何か言うのかな……？

「ココロちゃんの恋も……叶うといいね」

……え？　恋なんてしてませんよ？

先輩はうつすらと笑うと彼氏さんと一緒に帰っていった。泣いたばかりなのにまた涙があふれていく。逢えないわけじゃない。話せないわけじゃない。

けど……先輩の恋を見てから少し羨ましくなったのに。

「うつ……。先輩……」

その場にしゃがんで声を出さないように我慢する。辛い人がいないので人目を気にすることもない。

「……………何してんの？　目立ちますよー」

……気のせいだろうか。誰かさんの声が頭上から聞こえた。声は知ってる人。

まさか……アイツ？

でもこんなところにいるはずがないよね。とづくに帰っているはず。

「聞いてんの？　星野ココロ」

「な！　ふ、フルネームで！　大西　棗！」

顔を上げると大西が私をじっと見ていた。大西はなんでここにいるの！？　美術室に用事なんかはないはずなのに。迷った……とか

ないよね。うん。

「お前だってフルネームじゃねえか。……それよりこんな廊下で泣かれたら迷惑ですけど?」

「泣いてなんかない! どころが泣いてるの!？」

ムツとして言い返す。泣いてはいたけど……大西が来たからすっかり涙がなくなつたよ。

「ふうん。泣いてないならいいけど。お前はいつも笑つとけ! 笑うかどには福来たりだぞ?」

心配……してくれてるの?

大西は口は悪いし意地悪だし……。

でも、いざという時優しいんだよね……。小学生の時、アレルギーで目が赤くなつたら心配してくれた。優しいから大西は人気があるんだなあ。

「あ、ありがとう」

「それになあ。こんなんで落ち込んでたらこの先やばいぞ。引退なんて気にしたらダメだ。俺らなんて……もうとつくに先輩はいないんだから」

大西は顔を少し歪める。あ……。悲しくないわけないんだ。

私が落ち込んでいるから慰めてくれたんだね……。ごめんね、大西。元気を出さなくちゃいけない。

いつまでもうじうじしてられない!

「あー。星野。お前、隼人と……その、あのー」

「棗ー！」

階段から柴崎さんが下りて来て大西の腕をとる。

大西は言いかけていた言葉をやめると柴崎さんに顔を向けた。困っているような迷惑そうな……なんともいえない顔。

「棗ー。こんなところにいたんだー。4組にいなかったから焦ったわよ」

「しば、柴崎……。悪いけど先に行つていてくれない？ 星野と話したいんだ」

柴崎さんは私を睨み付けて大西の腕を引っ張る。え……。大西と柴崎さんの距離が近い……。

大西は柴崎さんをじつと見ているし、柴崎さんは私を睨んでいる。イライラする……。目の前でそんなことしなくてもいいのに……。

「何言ってるのよ棗！ 部活まで時間ないのよ！ 話なら私が聞いてあげる！」

大西は私を見たが目で「助けてくれ」と言っているのは気のせい？ 柴崎さんと仲がいいんだから柴崎さんに聞いてもらったらいいと思う。

わざわざ私に話す必要なんてないと思うし。

「じゃあね。星野さん」

柴崎さんに腕をとられながら大西は歩いて行つた。胸の奥が棘に

刺されたように痛い。苦くて酸っぱい、蜜柑のような想いが広がる。最近、こんな想いが多い。

柴崎さんと大西が一緒にいると蜜柑のような想いになる。気にしてもしょうがないか……。

でも、なんだか歩きたくない。美術室の前にしばらくいようか。

「ココロ。どこにいたの？」

美咲が階段から下りて私の前に立ち、ずっと手を握られた。

美咲がなぜここにいるんだろう。

千恵はいないのかな。先に帰ったとか？

「どうして……そんな顔してるの？」

美咲が小さな鏡を鞆から出して私に渡す。鏡で自分の顔を見ると泣き出しそうな顔……。悲しいことなんてないのに。

どうしてこんな顔してるの……？

「……。大西だね？　大西も女の子泣かせなんだから」

美咲……。冗談はきついです……。

大西じゃないよ。

大西のことでなんで泣かなくちゃいけないの？

「こんな時は千恵だよ。千恵になら話せる？　呼んでくるよ」

千恵……。大切な友達。

なんでも言える、なんでも話せる友達。本気で泣いて笑ってくれる親友……。

「いた！ 二人とも！ …………… え？ ココロ、どうしたの！？」

「千恵、ココロと話して。私はそのへんうろろしてるから」

美咲は鞆を背負うと離れていく。

千恵はそれを見たあとに私の隣にゆっくり座る。そつと髪を撫でてくれた。指先から千恵の優しさがあふれてる。

「………… ココロ。言いたくないなら言わなくていいけど、いつから涙が出たの？」

「お、大西が………… 柴崎さんと一緒に部活に行つて………… せつかく大西と、話せたのに………… また、話せなくなる。そしたら………… 涙が出たよ」

千恵はハンカチを差し出してくれた。涙をふきとり、落ち着かせるために深呼吸を繰り返した。

千恵に話したら楽になった。心が軽くなったのかな…………。

「悔しかったんだよ、きつと。大西を独占してるその子が羨ましかったのかな」

そう、なのかな？ 確かにもやもやしたけど…………。

どうして柴崎さんが、つて思ったけど…………。独占されたから？

大切なものを？

大西を？

「混乱してるならいいの。まだ気付かないのなら仕方ないけど、認めるのも勇気だからね」

何、を？ 気付かないのは何に気付いてないの？ 認めるって何を？

千恵がいたいことは「恋」のこと？

大西が好きかもしれないって思ったことはあるけど……。時々、胸の奥で何かが叫びそうなほどの想いがあるのは知ってるよ。だけど、それが恋なのかは分からない。それが今の気持ち。

「帰るよ。部活がないんだからはやく帰りたいんだから」

その時の千恵の顔は切なげで悲しげな顔だった。

どうしてそんな悲しげなの？

千恵の方が辛いんじゃないの？

今の私には聞く勇気すらなかった。

美咲は階段に座っていた。待つてる間、宿題をしていたらしい。

「帰るの？ もう少し時間かかると思っていたのにな」

残念そうに宿題をしまう。鞆を背負い、立ち上がる。

千恵は美咲を見てため息をつく。

どうしたんだろ？ 美咲、変なことしてないと思うけど。

「美咲……。あんたはいつものんびり屋さんよね？ テキパキしてる人を見習うといいんじゃない？」

「むうー！ のんびりかもしれないけど、これがちょうどいいんだもんー！ テキパキすぎてもダメだと思うけどなあ」

この2人のやりとりが面白くて好き。

ずっと変わらないやりとり。次はどんなやりとりをするのかな。握っている鞆をもちながら千恵に笑いかけた。

「千恵と美咲のやりとり好きだあ。いつまでも見てたいな」

千恵は少し顔が固まった。肩も小さくはねた。聞いちゃいけないことを聞いたかな……？

「そう、だね……」

千恵の様子がおかしい。今のは言っちゃだめだったかな……。聞きたいけど、聞けなかった。

美咲は千恵の変化に気付いてないらしく、呑気にしている。気にしてもどうもならないし、考えても仕方ないよね。気付いてないふりをしておこう。

「うわあ……。今日、風が冷たいよ」

美咲が「ブレザー着ればよかった」と言うが、そんなに寒いかな？ 普通だと思うけど……。

「美咲は寒がりね。ブレザーは冬に着るもの。今着たら暑いに決まってる」

「むっ！ 千恵、おかしい！ 寒くないなんて！

ねえ、ココロ、寒いよね？」

なんて言えばいいんだろ？

寒いか寒くないかと聞かれたら微

妙。冷たい風じゃなくて、微風のように。

「寒くないかな。むしろ微風？」

「え〜！？ ココロまでひどいよ〜」

美咲はぶくつと頬を膨らませて私を睨み付けるように見る。

美咲は私より身長が低いから睨み付けられても可愛い。睨んでないように見えるのだ。

「美咲はいいよねえ。身長低いし可愛いし」

「千恵が高いの〜！ ココロだって低いし可愛いよ〜！」

千恵がこつんと美咲をたたく。本当に2人のやりとりを見ると元気になれる。

ずっと、見ていたいと思うんだ。

one sided lover

引退（後書き）

今回はどうだったでしょうか？

棗の慰め、柴崎さんの行動。慰めはやってほしくない時とかあります。好きな人ならどんな言葉でも嬉しいですね。

one sided lover 10 冬の訪れ（前書き）

ついに冬です！ 冬は切なさがありますよね。冬の海は特に。イメージカラーでいうと水色っぽいです。

冬は、苦手。寒いのもあるけど、なんとなく……切ない季節だから。

千恵が帰り道の時に言った。冬が苦手とか言ったのを初めて聞いたので驚かすにはいられなかった。

千恵は雨が嫌いなら聞いたことはある。雨の時、すごく嫌そうな表情をしてるから。雨は、気分がのらないのは分かる。晴れが好きだけど、晴れすぎても暑いから、曇りがちょうどいい。

「ううー。寒いなあ……。はやく春にならないかな……」

「春かあ。春になれば中2になるね。後輩、出来るかな」

千恵は年下が好き。弟のようで可愛くみえるらしい。

私には弟や妹がないので年下と関わる機会なんてない。小学校の時は、交流会とかなんとかで、3歳年下の子と遊んだ。

でも、私と遊んだ子は元気いっぱいの子で、あちこち走り回るので、捕まえるのに時間がかかった。目をはなすといなくなるので手を繋いでいたっけ……。

あの時は、走ることに必死だったから、可愛いなんて思う余裕なんてなかった。弟がいたら、こんなことをしてたかな、と思っただけで。後輩がくるなら、女の子なのかな。美術部って男の子いないから。

「ココロ！ なに考えていたの？ 私の話も聞いてほしかったな」

「え、あ、ごめん。年下の子ってどんなのかなあって」

千恵はしばらく目を空中に彷徨わせて、ぼんやりした。年下のことなら、いつも楽しそうに話すのに。

「弟は可愛い。大きくなってきたらぜんぜん可愛くないけどね。後輩が出来たとしても、それほど小さくないから、可愛いと思わないと私は思っない」

「千恵は弟、2人いるもんね。後輩の相手とか得意そうだから、よろしくね」

そう言ったら、千恵はうつむく。

また、だ……。最近の千恵はこれからのことを話すと元気がなくなる。

まるで、自分だけがいなくなるように。元気がなくなるのは、千恵がいなくなるから？

そんなこと、考えさせない。

「千恵がぼーっとしてどうするの！　元気じゃなきゃ、笑えないよ」

私に出来る励ましなんて、こんなこと。精一杯考えても、綺麗な慰めなんて考えられないから。

千恵はうつむいていたが、にっこり笑うとまたいつものように、喋り出した。

「そうだね。笑えないね。先のことを気にしたって、どうしようもないし。今を楽しまなきゃ！」

いつもの千恵。お姉さんのように大人びていて、優しい……。たとえ、千恵がいなくなっても、繋がることは出来るから。楽しい思い出を、今だけでも……つくろう。

「じゃあ、また明日」

私の家に着くと、千恵は手を振りながら帰っていく。後ろ姿をずっと見ていたが、寒くて立っていられないので、家にそそくさと入った。家には兄がパソコンをいじりながら宿題をしていた。パソコンに夢中で私に気付いてないのだろう。

私は部屋に入って私服に着替えた。制服って動きにくい。ブレザーは着ていたら身体が重く感じる。

「ココロ。今日は早かったのね」

「ん……。お母さん？　買い物してたの？」

玄関から顔を覗かせる母。父はまだ帰ってきていない。いつも夜中に帰ってくるけど。母も夕方の6時から仕事に向かう。6時になるまで買い物やら掃除やら洗濯やら……。皿洗いは私が担当。母がここまで頑張っているのだから、せめて水仕事はやってあげたい。

「今日は部活ないからね。今日のご飯なにー？」

「ん？　今日はね、ひじきに唐揚げに野菜の炒め物に、魚の煮付けよ。栄養、バッチリね」

うわあ……。兄ちゃんが好きなものばかり。ひじきは私とお父さんが好きだけど、魚は私以外みんな好き。魚の煮付けは苦手。揚げ

物なら好きなんだけどなあ……。

「ココロは野菜も食べなさいね。身長伸びないわよ」

「……小学生に間違えられたからって。童顔だと言いたいのか？」

身長もあるだろうけど、顔が幼いと言われる。小学生に間違えられても文句は言えない、と。

よく間違えられるけど……そんなに言わなくてもいいのにな。身長が伸びないのだから親の遺伝かもしれないし。

私はお母さんを部屋から出すと椅子にもたれた。今日は……疲れた。部活もないんだけどなあ……。うとうとしてきたので目を瞑る。いい夢、見られますように……。

「……きて、早く。早く、起きなさい……」

誰がいるのか？ 耳の近くで聞こえる細い声。厳しさも含んでいる、おちやめな声は……いつも聞いている声だ。眠い……。もう少し寝たい。

「千恵ちゃん、来てるわよ。待たせるつもりなの？」

「お、母さん……？ もう朝、なの？」

くしゃくしゃの髪を撫でながら聞いたら、呆れたように見られた。時計を私に見せるようにして、目覚まし時計をたたかれた。時計を

見ると……完璧に遅刻。用意は急がなくちゃ！

「早く着替えて髪を整えなさい。時間がないし、千恵ちゃんも待つてるから、早くしなさいね」

私は洗面所へ向かい、洗顔してから歯を磨く。制服を着て、ボサボサの髪をくしで梳かして鞆を持ち上げる。朝ご飯を食べてるひま、ないよね。

千恵を待たせてるんだもん。待たせたくない。

「ココロ！ 遅いー。相変わらずなんだから」

「ごめん！ 寝坊しちゃって……。それでも急いだ方なんだよ」

千恵はくすくす笑いおえると、私の頭をみてまた微笑した。髪の毛がどうかしたのかなあ……？ 急いでやったからまだはねてるかな？

「ココロ、髪がはねてる。動かないでね、なおしてみるから」

千恵は手櫛でなおしてくれたが、髪の毛先だけはねたまま。癖毛だから諦めてはいるんだけど、もうちょっとストレートにしてみたいとは思う。みんな、さらさらしててストレートで羨ましいもん。

「ココロ、最近太った？」

「ええ！？ うわわ……。ダイエットしようかな……」

確かに最近、肉がついたかなって感じてたけど！

やっぱり太ってたんだ……。揚げ物ばかり食べてるからかな……。太った姿なんて、見せられないよ！

「冗談だよ、冗談。ココロが体重気にするなんてね。前は全然気にしなかったのに。大西を好きになってから変わったよねえ」

「違うー！ 年頃だから気になっただけで……。大西はまったく関係ありません！」

千恵のばか……。

そんなこと言ったらまた意識しちゃうじゃんか！

私の考えていることを知っていて言ってるの？ わざとなの？

「ココロ……。もう認めてもいいんじゃない？ いつまで、

認めないつもり？ みんな、辛くても頑張ってる。逃げるの？」

違う。否定したい。

でもそう出来ないのは、心のどこかで認めてるから。

私が恋を認めないのは、辛くて傷付くのがこわいだけかもしれない。こわい、辛くなるのが。変わってしまう……。変化することが私だって、美咲や千恵みたいに恋話したい。惚気話だってしてみたいんだ。

でも……。こわくて出来ない。矛盾、といえばそうなのかもしれない。

「認めるのだって勇気だからね。私は全力でココロを応援する」

「うん……。ありがと、千恵。頑張るから」

認めるね、と言いたいけど私にはまだ勇気が足りないから。時間

を下さい。頑張つてこの想いを育てるよ。

だから、それまであたためさせて。初恋は、人生で一度しかない。初めての想いを、大切に、壊さないようにしたいから。

「星野さん、おはよう」

隼人が席について挨拶をしてくれた。

隼人とは仲が良かったけど、文化祭をきっかけに距離が近くなった。女子たち……隼人ファンは私に目を光らせるけど、隼人とは友達なんだもん。何の進歩もしないし、下がるわけでもない。

第一、隼人から話しかけてくるので、私は遠慮しなくてもいいと思うんだけど……。

「おはよう。そうだ！ あかね、隼人……。文化祭の前の約束、覚えてる？」

「ああ……。僕を描いてくれるんだよね？ 今、描いてくれるの？」

いたずらっぽく笑った隼人はかわいらしい。普段、につこり笑うと爽やかな笑顔で、女子たちが騒いでいる。いたずらっぽく笑う姿は、女子の前では見せない。

私だけが見れてるんだ、と思うとなんだか嬉しいような。

「隼人がいいなら……。文化祭が終わったから、暇になっちゃった」

「そっかあ……。そうだなあ。僕も部活暇になってきたしなあ。今日、顧問の先生が出張なんで休みだから……。放課後、教室で待っててくれない？」

いいよ。

そう返事をしたら、隼人は嬉しそうに笑った。

隼人の笑顔ってなんていうか……。キユンとする？

キユンって

漫画みたい。

私も部活はない日だから、帰っても暇だし。休み時間に美咲と千恵に言っておかなくちゃ。今日は先に帰っててね、と。

五時間目が終わって、すぐに教室を出て4組に向かう。4組に行く時って、なんとなく緊張する。普段、4組行っていないからかな……。

「ココロ？ 逢いに来てくれたの？」

「あ、美咲！ ごめん、今日先に帰ってて！ 私、用事あるから！」

美咲は嫌な表情をなにひとつしなくて、きよんとした表情で、分かったよ、と頷いた。何も聞こうとしないので、よかった……。

「じゃあ、先に帰ってるけどね、用事って槇野くんでしょう？ 千恵に言ったらヤキモチやくねえ」

「ええ！？ 知ってたんだ……。千恵がヤキモチ？ まさかあゝ」

千恵のヤキモチねえ……。

隼人と関係あるのかな？

隼人の話をするとう恵は、いつも寂しそうに笑うから。知り合いには見えない……というか二人が話してるところなんて見たことない。

私は美咲に手を振りながら教室に戻り、放課後を待遠しく感じていた。

one sided lover 10 冬の訪れ（後書き）

約束までなんとか書けました。冬は運動部、辛そうだなあ……。夏も辛いと思うんですけど、運動するなら秋ですね。

one sided lover 11 最初の始まり（前書き）

やっとここまで書けました。のんびりなのか、早いのかは分かりませんが、ココロの認めないシーンは意外に苦労します。好きじゃないって否定、上手く書いてみたかったんですよ。

授業終了を知らせるチャイムがやけに大きく響いた。今日の授業は……これでお終いかあ。疲れたあ……。

「今日はここまで。次の授業までにちゃんと予習をしてくるように」

社会の先生が教科書を閉じると、クラスのみんなも同じように片付け始める。

私も片付けようと教科書や地図帳を机に押し込む。中から出てきたのは、大きめなスケッチブック。あ……。そっか。

隼人を描くつて約束したんだっけ。すっかり忘れてた。楽しみにしてたんだけど、社会の授業で眠たくて……。あくびなんてしたら絶対に怒られるから睡魔との闘いだった。授業内容は全く聞いてなかった。

「星野さん。眠いのに頑張ったね」

「ふああ……。？ 隼人？」

どうして知ってるのかな……。

私って分かりやすいのかなあ？

隼人が鋭いとか、そんなのじゃないのかな。

「星野さん、授業中に頭がゆらゆら揺れてたから……。うとうとしてたし」

「んんー。社会って苦手で……。頭に入らなくて」

少し前まで頑張つて聞いていたんだけど、そのうち分からなくなつて……。言い訳にしか聞こえないよね、これじゃあ。

「星野さん。このあと、大丈夫？」

「全然大丈夫！ 掃除して、挨拶が終わったら描くから！」

隼人を描けるということに眠気は吹っ飛ぶ。本当に楽しみで仕方ない。

私は掃除場所に向かう。廊下なので少し冷えるが、ひんやりとした空気にほんのりと心地良さを感じる。ほうきを持ってゴミを掃いていると、柴崎さんと大西が仲良さそうに話しているのが目に入った。もやもやする……。痛い、見たくない。二人を見たくない……。

二人に背を向けて気にしないように、掃除に集中した。

ぼーっとしてたらすぐに放課後になった。嬉しいはずなのに、喜べなかった。心配かけたくなくて、隼人の前ではなるべく笑つてみせた。

「どこまで描いた？」

「え、あー……。まだ顔の輪郭しか描けてない」

五分も経つのに、輪郭しか描けてないってどういうことなの、私。失礼すぎるよ、モデルになってもらってるのに……。

「体調、良くなかった？　今度にする？」

「大丈夫だよ。そんなに心配しないで」

再び描こうとした手を隼人に強く掴まれる。痛いわけじゃないけど、力が強くて振り払えるはずがない。

「嘘はだめだよ。今日は家に帰ってゆっくり休んで。また別の日に描こう。ね？」

「……………」

不満そうな表情をしても隼人は意見を変えようとはしない。渋々頷いて、教室を出ようとして隼人を見た。にっこりと笑ったかと思ったら、独り言のように呟いた。

「僕は諦めないよ。僕の想いに気付いてくれるまで、ね」

なんのことだろう？

私に向けたのか、単なる独り言なのか。体調が優れないのも本当なので軽く頭を下げると、帰り道を一人で歩いた。ズキズキと痛む胸をおさえて、目を瞑った。

「私の、ばか……………」

やっと気付いた、本当の気持ち…………。目を逸らしてた、熱い思い…………。立ち上がって、親友の家に向かった。

千恵の家って、相変わらず遠い……。肩で息をして乱れを整える。必死で走ってきたからか、髪の毛はあらゆるところがはねてぼさぼさ。

でも、髪を気にしてるひまじゃない。

千恵に言いたいことがあるんだから！ 家に足を踏み入れると家の中はがらがらだ。どうしたのかな……。

「おや、ココロちゃん。千恵に何か用かい？」

「あ、おじさん。こんにちわ。千恵……いますか？」

おじさんは「待っててね」と気さくに笑うと階段を上っていった。待ってる間、おじさんが手に持っていた茶色い箱……段ボールを見た。どくどく、と嫌な予感がさつきからずっと頭の中に流れる。勘違いだよ、千恵……？

「ココロ、どうしたの？ 珍しいね」

「千恵！ あ、ね……話したいことと、聞きたいことがあるの」

場所を変えようか、と千恵が言ったので私は千恵の後ろについていく。人目が少なく、秘密話にはもってこいなのかもかもしれない。

「んーと。話したいことから聞こうかな？」

「う、うん！ 私、やっと分かったんだ……。私ね、大西が

好き。恋なのか分からないけど、そう思っただ……」

柴崎さんと仲良くしているところで嫉妬して、話せると嬉しいのは……大西に恋してるからだと思った。今日でその思いが確信に変わったから、千恵に伝えたい。

「自分が恋だと思ったら、それはもう立派な恋なんだよ！」

につこりと笑って千恵が髪を柔らかく撫でてくれた。
そうか、これが恋なんだ……。

「で？　聞きたいことって？」

「う、うん。私の勘違いならいいんだけど……千恵、なんで家の中の家具とかないの？　ひ、引越しかじゃないよね……？」

笑って違うよ、と言って千恵。勘違いだよって……。

千恵を見ると目をぼんやりとさせて私の言ったことを聞いたのか疑うくらいに。

「あーあ。ばれちゃったか。さすがに分かるよね、私の態度とかにも出てたと思うし。引越しなんだよね」

……嘘じゃないの？　本当なの？　嘘だって言ってほしかった……。

私が「行かないで！」って言うてどうにかなる話じゃないのは分かっているけど、でも……。

「ねえ、ココロ。恋って気付いてどう思った？」

「え？　確か……。こんなに辛いのかなあって」

あれ？　本当にそう思った？　辛いだけじゃないような……。楽しいことや嬉しいこともあったはず。確かに、大西が柴崎さんと仲良くするのは嫌だと思っし、そんなことを思っってしまう私自身も嫌だった。

でも、この想いは譲れないから……。だから私は、頑張って成功させたい。

「私ね、もしかしたら……。怖かっただけかもしれない。周りのみんなのように傷付くのが怖かった。恋に臆病になっってたんだ」

「うん。それに気付いたら、もう大丈夫。ココロはココロらしく、焦らなくてもいいからね？　私も応援してるから」

ぎゅっと千恵に抱きつく。

千恵はいつも応援してくれてたんだね。

だからいつも私に、恋してるって気付かせようとしてくれたんだ。私、全然気付いてなかった……。

「ありがとう、千恵。私は頑張るよ。大西に振り向いてもらえないかもしれないけど……。後悔しないためにも、精一杯のことはしたい」

「それでこそココロ！　それに私、夏休みとかに逢いにくるし、手紙だって書く。だから悲しがることはないんだよ？」

そっか……。

そっだよ。手紙だって書けるし、逢いにだっていける。二度と逢えないってわけじゃないんだ。

「それじゃ、私は手伝いがあるから。ココロも早く帰った方がいいよ？ 制服のままだし」

あ……。無我夢中だったから家に帰らないでそのまま来ちゃったんだ……。

これは寄り道だなあ。

でも早く帰らないとすぐに空が暗くなっちゃうし。

「うん。帰るね。また明日」

「また明日！ あ、ココロ」

足をとめて顔だけ千恵に向ける。

千恵はぱたと駆け足で走ってきたら、くすくす笑いながら呟いた。

「挨拶とかしなきゃだめだよ？ 大西にも、槇野にも」

槇野？

槇野って……隼人！？

な、なんで千恵が知ってるの！？

私……隼人のこと、千恵に話したっけ？

「槇野は女子から人気があるから有名だよー。爽やか男子ってね」

ああ。

真琴も前に言ってたような……？

隼人は確かに爽やかという言葉が似合う男子だと思う。周りにき

らきらした光とか飛んでそう。

「じゃ、またね！　気をつけてねー」

千恵がぶんぶんと手を振ってくれるので、私も負けなくらいに手を振った。制服で、しかもこんな時間に何をしてるんだろうな、私。時間は六時を過ぎているし。帰ったらきつとご飯が用意されているだろう。みんなは食べてるはずだから温め直さないと。冷えたご飯は好きじゃない。苦手な方だ。ぱさぱさして、美味しいねとか言えない。食べようと思ったたら食べれるけど、普段は好んで食べない。好みがあるんだろうけど。

「ただいま」

返事は求めているわけじゃないので、早足で服を手にとると、制服をハンガーにかけて吊っておく。ブレザーにしわとか寄せたくない派なんだよなあ……。

「ココロ、ご飯食べるだろう？　今、温め直すな」

お父さんがおかずを持って電子レンジで温め直す。帰ってきたばかりなのだろう。仕事着を着ていて、顔は疲労というものが浮かんでいる。

お父さんが家族のために一生懸命なのは私にも分かる。

だけど、なぜか好きになれない。幼い頃に遊んでもらったことがないから？　家にいてもそんなに会話しないから？

私ってひどい娘だな……。

「はい。温め直したから冷えてないと思うが……。残さずに食べるんだぞ」

「分かってるよ。私も、もう中学生なんだから」

箸を取ってホウレン草の炒め物を食べる。味付けは変わってないと思う……うん。ご飯を食べ終えると、風呂に入って布団に倒れ込む。今日は……いろんなことがありすぎて、疲れた。恋を認めたり、千恵が転校することを知ったり。疲れを癒すために目を瞑った。

今日の朝はどきどきと胸が高鳴る。隣で歩いている千恵はにやにやと面白そうに笑っているし。

「あ！ あれ、大西じゃない？」

見てみると、隼人と並んで歩いている小さな影がある。
隼人と大西は友達であり、ライバルだと言っていたから仲良し。
一緒に登校するよね。

「頑張れ！ ココロ！」

強く背中を押されて、目の前にはにこやかに笑う隼人と、びっくりしたような大西の表現が目映る。

こ、ここで勇気出さなくて、この先どうするの私！

「お、おはよう……大西と隼人」

千恵が後ろで微笑んでいるのがなんとなく勘で分かる。挨拶も出

来なくて、この先の恋をどうやって頑張れるというのかな。見てい
るだけじゃ、きつといつか後悔する。見ていられるだけじゃ、満足出来
なくなる。

大西はしばらくきょとんとして、瞬きを繰り返すと爽やかとはい
えない、きらきらした笑顔で笑った。

「おはよ。星野」

その笑顔は隼人とはまた違う、綺麗な笑顔。ほんのりと頬を紅く
させて、嬉しそうな笑顔。

私が見てきた大西の中で一番好きな笑顔になった。前に好きだっ
たのは、部活の時の笑った表情だった。夕日と重なって、かっこよ
く見えた。

この笑顔をまた見たい。

これが大西と私の、最初の始まり。

ココロがついに認めました。挨拶から始まるって素敵です。後悔したくないって思ってた行動するのは良いことだと思います。

私の場合はなかなか積極的に来れないので、積極的な人が羨ましいです。

one sided lover 12 癒えない傷（前書き）

冬が終わります。中一編はだらだらしただけですね。進んでいるのかな？

冬に「蜜柑色」の意味が微妙に出てきましたが、分かった人っていますかね？

さっきの朝は最高だったなあ……。会話を挨拶でも出来るなんて顔、にやけてないかな？　口元が緩んでいるのが私でも分かった。また大西と朝逢って、挨拶出来たらいいな……。

「……さん？　星野さん？」

隼人の声で現実に戻される。朝に逢ったのは隼人も同じで、行くクラスが同じだから別々に行く理由もないから、隼人と一緒に六組へ向かっている最中。

千恵たちの四組も同じ校舎で、すぐ近くなのだけど……けんかのような言い合いを無視しておいてきた。

隼人が「棗はほっとけばいいよ。僕、星野さんと話したいし」と言うので、二人きりで階段を上っている。

大西が気になるけど、千恵が変なことをいうはずないので、黙って隼人とクラスへ行ってる。

棗は……どう思うんだろう？　付き合つてると、思うのかな。隼人と私って恋仲っていうか、恋愛感情なんて全くない。

隼人はかつこいいし、人気があるから女の子なんて選び放題じゃないのかな。ん？　選び放題？

隼人って好きな女の子、いるのかなあ……？　聞いたこともないし、聞く気も全然なかった。関係ないから、で終わっていた。一度くらい、聞いてもいいよね？

「隼人って好きな女の子、いる？」

何気なく聞いたつもりだったのに、隼人は驚いた表情を向けると、考えるようにして黙り込んだ。動揺しているのか、聞いてほしくない

かったのか……。き、聞かない方がよかった？

「そうだな……。いるといえばいるね。前から気になってしょうがないんだよね」

「へえ！　どんな女の子？」

隼人にもいたんだ！　好きな女の子ってどんな女の子なんだろう？

隼人が惚れるってくらいだから、可愛くて優しい女の子なんだろうな……。

「うーん。初めて見た時に一目ぼれってやつ？　可愛い子だなあ……」って。仲良くしてるうちにどんどん惹かれていったんだ」

「うわあ。隼人なら、きっと振り向いてもらえるよ！　応援してるね！」

隼人は「ありがとう」と言って笑ってくれた。爽やかだなあ、本当に。上手くいくといいな、隼人の想いも。

「でもね。その女の子は僕じゃなくて、他の男の子が好きみたいなんだよなあ。僕がいくらアピールしても、相手は鈍感な子だから気付いてくれないし。そこがまた燃えるけどね」

他の男の子が好き、か……。辛いな、隼人。好きで仕方ない人が、自分じゃなくて違う人を見ていたら……。自分でその人が振り向いてくれないと分かってしまったら……。

私はきつと、耐えられない。

隼人はいつもそんな想いでその人を見ているのだろうか。悲しい

想いで、その人と話すのだろうか。

私に隼人をどうやって応援出来るのかな。下手な励ましじゃ、だめだ。

「隼人は……頑張ってるんだね。私も頑張るから……隼人も頑張ってるね？」

上手く言えないけど、私にはこれしか言えないから。

隼人の想いは実ってほしい。実って、幸せな表情をして「上手くいったよ」と笑ってほしい。

「ありがとう。僕も頑張るよ。……最後まで、諦めたくないんだ。あの子は、譲りたくない」

よかった。

隼人が諦めないって言ってくれた。譲りたくないって、すごく好きなんだな。

そんなふうに強く想われるってとっても幸せなことだよな。幸せ者だな、その女の子。

「よし。教室に着いたから、この話はお終い。秘密にしようってね？　好きな人を知られるの、騒がれそうだから苦手なんだ」

「うん。隼人と私だけの秘密だね。また、時間があつたら話そうね」

上靴に履き替え、教室に入った。がやがやと騒いでる男の子のグループを避けて、自分の席に着く。鞆を置いて後ろを向く。後ろの席は真琴の席。

真琴は机に伏せて、寝ているように見える。朝早くに来てるのか

な？

真琴は私より断然早い。何時に家を出てるんだろ？

「おはよう、ココロ……」

「おはよう、真琴」

顔を上げた真琴にぎよつとした。目は赤いし、潤んでいるし……泣いていたんだってすぐに分かった。

こんな真琴、前にも見たことがある。いつだったか、マンションの前で蹲っていた。泣き顔で、理由を聞いてもかわされたっけ。

とりあえず、このまま教室にいれば真琴が泣いたってことに誰か気付くだろう。場所を移動して、話を聞こう。

「真琴。少し話を聞かせてほしいんだけど……いい？」

確認してみると、真琴は小さく頷く。顔を隠しながら、保健室に向かう。保健室の先生は、悩みをなんでも聞いてくれる。精神的に辛い人や人間関係で困っている人……そんな人の悩みを聞いてあげることによって本人の心は軽くなるんだとか。

「誰もいない。先生もいないや。中に入って、話を聞かせてね？」

ソファに真琴を座らせ、その隣に私が座って背中をさそって落ち着くように、何度も何度もささる。目が潤んだと思ったら、ぼたぼたと下に落ちて行く。

「こわ、いよ……。女子が怖いよ。私の傷が……。また出来る」

「うん、うん。ゆっくりでいいよ。少しずつでいいから」

真琴は精神的に疲れているかもしれない。女子が怖いって、どんな過去があるんだろう。想像していたよりも深く、たくさん傷ついた過去かも……。

「わ、たしね。小学校の時に……仲良かった女子が、急に私を無視して。とっても怖くて、人と……特に女子と関わるのが苦手になったの。クラスの、女子を見るとそのことを思い出しちゃって。時々、泣きそうになっちゃって」

真琴の、心の傷。癒えない深い傷はどうやったらいいのだろう。私は、何の役にも立たない……。

真琴はこんなにも辛い思いを一人で抱えていたというのに。どうして気付いてあげられなかったんだろう。

「聞いてくれてありがとう。私のことはいいから、教室に戻った方がいいよ」

時計を見ると、チャイムが鳴るまであと五分。急いで走ったら何とか間に合う。

でも、真琴を一人にしているの？ 不安定なのにほつといていいの？ いいわけがないのに……。

「あら？ お客がいたのね。あらあら！ その可愛い女の子！ どうしたの？」

保健室の先生が帰ってきたみたい。先生が手招きをして先生の目の前にある椅子に真琴を座らせる。

真琴はおとなしく椅子に座ると、顔を俯けた。先生は真琴を心配そうに見ながら、私に微笑むと「戻りなさい」と穏やかに言った。真琴を不安に思いながらも、頭を下げて教室に戻った。教室に戻って担任の先生に事情を説明すると、自分の席に座る。私には何が出来るんだろう……？

「ココロ！　　どうしてそんなに上の空なの？」

帰り道、千恵が怒った表情をして聞いてきた。

真琴のことを話してもいいのかな？　人の傷って簡単に話していいわけない。

どうしよう……。

千恵は信用してもいいんだけど……勝手に言っているの？　　本のいないところで。

「真琴でしょう？　　ココロって嘘が下手。そんなに深く考えなくてもいいよ？」

「で、でも！」

どうしてそんなこと言えるの！？　　真剣に悩んでいる真琴の力になりたいのに……軽く考えても、どうにもならないはずなのに。

「私が言いたいのは、そんなに深く考えても仕方ないってこと！　　真琴の力になりたいのなら、ココロが真琴を支えればいいんだよ。うじうじしないで、いつも通りにしてあげればいいの」

それは納得。誰だって急によそしくされたら心地良いとはいえないよね。

いつものように、何もなかったようにして。辛いなら、傍にいてあげればいい。

それでも、少しは心が楽になると信じて。

「ありがとう。千恵には助けてもらってばかりだね」

千恵、いつもありがとう。助けてもらった分、今度は私が千恵を助けられるように。

千恵に何かあったら、すぐに飛んでいく。絶対に。

「じゃあね」

千恵の後ろ姿を見送り、冷たい風が頬に触れる。

私もそろそろ帰ろう。雪とか降ってきたらどうしたらいいのか分からないし。最後に後ろを振り返って、足を進めた。

それから一週間くらい経った頃だろうか。

千恵が引越した。見送りに行ったけど、時間がないから話すことさえあまり出来なかった。手紙を書くこうにも、住所が分からない。私ってどれだけ抜けてるんだろ……。

「あ。見て見て、桜の木が蕾をつけてる」

美咲が学校の校庭にある桜の木を指差した。綺麗な桜の花。日本では歴史があるんだよね。花が咲くのは、あともう少しかな。

「まだ冬だけど花も負けずに頑張ってるんだねえ」

もうすぐ、別れと出会いの季節がやってきます。

隼人にも好きな人はいたんです。可愛いのか美人なのか……。

隼人は笑顔が可愛い子とか、優しい子が好きな気がします。

冬では稟とココロが仲良くなったかなあ？

友情も多くかけてよかったです。

ちなみに次回は中二編が始まります！ 起承転結でいうと「承」

の部分になります。

one sided love 13 名前呼び(前書き)

ついに二年生編です。一年生編の時は隼人とココロでしたが、二年生編は棗が多くなるかな、と思います。

春ってとても素敵な季節だと思う。生命の誕生でもある春は、素晴らしいんだけど……今はそう思える余裕がない。

「……嘘」

春になって学年がひとつ上がったのでクラス替えというものがある。三年間、同じクラスでもいいと思うけど、たくさんの人と関わるためでもあるし、苦手な人とも仲良くやっていかないとだめだということ。今日がクラス発表の日だったから、少し不安だったんだけど……。

「大西と、一緒のクラス。隼人は違うクラス。美咲とも同じクラス、かあ……」

美咲とは嬉しいけど、大西も一緒なんて。好きだと意識してから目を合わせるのも恥ずかしいのに。同じクラスなんて、緊張するに決まってる！

「良かったね。大西と一緒にだねえ」

美咲、絶対からかってるな……。嬉しいといえば嬉しいんだけど、照れくさい……。

せめて隼人がいてくれたら助けを求めることが出来たのに。隣席になることはないだろう。

そこだけが救いかもしれない。好きな人が隣席って……。授業どころじゃない！

でも、頑張らなきゃ。後悔はしたくないんだから。

「柴崎さんも違うクラスみたい。これなら、大西と思いつき
り話せるね」

にやにやしてる美咲に軽く「そうかもね」と返事をしておく。
柴崎さんが、大西に近付くことだって出来るんだから、油断出来
ない。

「さっきからなんだよ？　大西、大西って」

横を見ると大西が不機嫌そうに立っていた。聞いてたんだ、すっ
かり聞こえないのかと思ったよ。

「別に？　大西には関係ないもん！　女子の話なの、
女子の」

美咲はゆっくりりして言ってるからかもしれないけど、私には美咲
が大西におちよくっているように見える。

美咲がゆっくりりからかもしれないが。

「ふーん。まあ、関係ないし。とりあえず名前を嫌がらせのよ
うに大声で言うの、やめてくれよな」

声、大きかったかな？　普通だと思っただけだな……。確か
にみんなに聞こえてたら恥ずかしいよね。こそこそ話していても悪
口を言ってるように見えるから、二人だけの時に今度話そうと。
美咲は「ごめんね」と軽く謝ると再び話を掘り返す。

大西がどこかへ行ったから良かったんだけど……本人いたらどう
なっていたのだろう？

「とりあえず。これはチャンスなんだから！　いっぱいア

ピールするんだよね？」

美咲はそう言って大西に視線を向ける。ジッと見ているものだから、気になって振り返ってみる。

そこには、柴崎さんと仲良く話す大西の姿があった。

「早く大西をココロのものにしてくちゃ、他の子とくつついちゃうかもね」

前から思っていたけど……この時になって思い知らされるなんて。私からも、積極的に話しかけないといけないな。本当にこのままじゃあ、柴崎さんにとられちゃうから。

「教室に行こう。席とか確認したいし」

美咲はとことんマイペースだな……。

でも、席を見たいのは事実だし、早めに教室に行っておきたいのも、また事実。時間は余るだろうけど……その分余裕が出来るからいいか……。

「うん。行こう！ 隣席、気になる！」

階段を上り、三階に着くと私たちの教室に入る。綺麗に並べられた机に、ピカピカな黒板。教卓にはどっさりプリントがある。

「あ！ 黒板に席が書いてある紙がはられてるよ！」

美咲が覗き込むと残念そうに表情を崩す。嫌な席だったとか？ はたまた、別の理由？

私も席を確認するため、紙を覗く。見方があってるのなら、私の

席は真ん中の列の後ろから二番目。

大西は右側の廊下側の、前から三番目。距離は離れている。

美咲は廊下側の列で、後ろから二番目。班は違うものの、かなり離れてはいなく、安心した。

「大西とは離れてるね……。こうなったら、こっちから何か仕掛けるしか……」

美咲、何を考えているの？ 気のせいだったらいいのだけれど、変なことを考えてないよね？

ましてや、大西と私に何か仕掛けるつもり……？
そ、それはだめ！

「美咲！ 計画立てなくていいよ！ 私自身で頑張るし。チャンスだってあるし」

美咲が大きな目を細めて私を見た。ニヤリと笑って、悪戯をしたくてたまらない小さな子供に似ている。

どうしてそんな表情になるのか分からなくて、首を傾げた。

「計画なんて立てるわけじゃない。ココロがどんな行動とるのか気になるし、大西がどんな表情するか楽しみで仕方ないのに！」 私は無言で見守ってるに決まってる」

思いつきり、はめられた……。楽しみにしてるって、すごく目を輝かせて言っただけ、それはそれで大西に悪い気がする。

どんな表情をするのかを楽しまれているのだ。悪趣味かどうか、好奇心があるというか……。

「星野？ 教室にいたのか？」

大西の、声……。

私の焦がれている声。

その声で名前を呼ばれたら、気付かずにはいられない。

『星野』と呼ばれるだけで嬉しいのに、『ココロ』と呼ばれたら……顔が真っ赤になるんだろうなあ……。

「ああー。捜してもいなかったから、焦った。教室にいたんだな」

「捜して、た……？」

大西が私を？ 本当に捜していたの？

それはどんな意味？ 普通に受け取ってもいいの？

大西の言葉を信じていいの？ お願い、その意味を教えてー……。

「え、あの。俺何言ってるんだろ。と、とりあえず……たまたま話したくなっただっていうか……」

「ふうん。でも顔が真っ赤だよ？ 息も切れているし、走ってきたんじゃないの？」

美咲が鋭く突っ込みながらニヤニヤ笑うと、大西が美咲を睨み付けた。

美咲は怯えた様子はなく、知らん顔をしている。満足そうな表情。人をいじるのが好き、なんだな……。

私も気をつけなきゃ美咲にいじられる……。

「クラスが気になっただけだ！ ……俺の席は、ここか。ま

あ悪くないかな」

席につくと、顔を伏せる。眠いのかな？

私も自分の席について、やることがないので外の景色を眺めた。桜の花びらが満開で風が少し吹くと少しだけ花が下へと散る。

それだけでも綺麗なんだから、桜吹雪になったらどれだけ綺麗なんだろう。桜吹雪は風が強く吹いて、たくさん桜の花びらが舞う。前に見たのは五年前。授業中に窓を見ていたら、桜吹雪が起こってあまりの綺麗さに声が出せずに、しばらく見入っていた。

また見れるかな。今度見るなら……大西と見たいと思うのは私のわがままなのかな……。

「あー。ここが新しい教室かあ。心機一転、また頑張らないかね」

「好きな人と離れちゃったあー！ 彼が他の子を好きになったらどうしようかなあ！？」

声に反応して見てみると、教室には人がさつきより多い。

私が窓を見ている間に来ていたみたい。声を出していた女の子は髪が長くておとなしそうな子と、派手な茶髪の子だった。

「はい！ 席着くー！」

担任の先生であろう、髪を結った女教師が威厳のある声を響かせ、みんなは慌てて席に着く。

私は元々座ってたから慌てる必要はなかったわけだけど。

「進級おめでとう。このクラスになったからには、クラスのルールをしっかり守ってもらう。いいな？」

厳しそうな先生だなあ……。眠い、けど寝たらだめだ。頑張れ、私……。

いつの間にか話は終わっており、みんなは帰る準備をしていた。私も軽い鞆を持ち上げ、美咲の席に行こうとすると、呼び止められた。

「悪いが星野、これを大西に持っていくてくれないか？」

先生がゼツケンを持ちながらため息をついた。先生の目に映ったのがたまたま私で、だからこれを渡せと。

それだけなのに、顔が緩むのが分かった。話すチャンスが、早速訪れたのだから当たり前といえば当たり前。

「分かりました。大西に渡せばいいんですね」

「悪いな。あいつ、持って帰るのを忘れたようだ。迷惑かけるが、頼んだぞ」

受け取ったゼツケンを握り締めて、美咲と一緒に大西を捜す。

美咲は眠そうにあくびをして体育館前に立った。

ここで男バスが練習しているんだな。中へ入ると、大西がボールを転がしていた。

私に気付くとボールを手にしたまま、「どうかしたのか？」と問い掛けてくる。

「ゼツケン。忘れてたでしょう？」

ゼツケンを見せつけるために手を出すと握り締めていたためにクシャクシャしていた。怒る、かな……？

こんなにクシャクシャにしたんだもん。謝っておいた方がいい！

「大西、ごめん……。クシャクシャにしちゃったね……」

キョトンとした大西の表情に目を逸らす。恥ずかしくなって、目を合わせられない。意地悪く笑うのが見えて、背筋に冷や汗が流れた。

「気にすんなって。でも、悪いと思ってんなら……。ひとつ聞いてほしいことがあるんだけど」

「な、何？ 出来る限りのことなら」

どうしてそこまでしなさいいけないのか、疑問に思ったけど言うのはやめた。少しは反省してるけど、言うことを聞かなくてもいいのじゃないのかな。嫌われるのが怖くて、言えないけど。

「俺のこと、棗って呼べよ。これからは『大西』じゃなくて『棗』だからな」

「は、はあ？ なんで……。名前で呼ばなきゃいけないの？」

大西を名前で呼ぶ？ 好きな人の名前を？

緊張し過ぎて倒れそう……。幸いなことに体育館には大西と私しかいない。二人だけの空間は静か。

「隼人のことだって名前で呼んでるだろ……。なんか気に入らないから。俺のことと呼べよ」

単なる気まぐれか……。

でも、これで大西と近付けたと思っていいんだよね？ 友達関係になれたって少し自惚れていいんだよね？

「ほら、呼んでみろよ」

「な……なつ、棗」

自分でも分かるほどに声が小さく震えていた。名前を呼ぶって、こんなに緊張することだったかな……？

隼人の時は戸惑ったものの、こんなに緊張しなかったのに……。私はやっぱり、大西のことが……。

「小さくて聞こえない。俺に聞こえるまで呼ばせるからな」

「な、棗……。棗。棗！」

必死になって大声で叫ぶと、相手は満足したように笑った。

その表情が少し真っ赤で嬉しそうだったのは、きっと私の見間違え。

「ちゃんと、呼べるじゃん。これから俺を呼ぶ時はそうやって呼べ」

「うん。おお……。じゃなくて、棗」

顔が熱を持ちながら逃げるように走った。恥ずかしい、恥ずかしい……。

彼は、いつも私を惑わす。泣きたいほどに幸せで、苦しいほど切なくて……。

もう私にはどうすればいいのか分からないよ……。

「大西、棗」

もう一度呟いてみると、甘く響いて驚いた。大西……じゃなくて、棗の名前ってこんなに甘かったかな？

棗の声が聞きたいから、用事がなくても名前を呼んでしまいそうだよ。

「大好きだよ」

名前を呼ばずに、落ち着くために息をついた。

やっと名前呼びまでの仲になりました！

隼人だけ呼びすてなのは特別な気がしたので、棗も名前で呼べるように話を調整しておきました。今回は棗とココロですね。

いつかココロ視点ではなく、棗視点や隼人視点を書いてみたいですね。

二年生編になって、隼人と棗の会話です。話を書きながら、爽やかな人ってどんなのだろうと思いました。

私は『隼人』という人物は好きですが、中々性格を掴めないでいます。優しいのか、意地悪なのか……。

棗は分かりやすいですが。

私が美咲の元へ戻ると、待つてましたと言わんばかりに笑顔が咲く。鈍感なはずなのに、棗と私のことに關しては妙に鋭い。何かあると棗の話をして、私を動揺させるのが楽しいと言っている。

「ココロの焦った姿を見るのって楽しい」。からかうのも楽しいけどねえ」

美咲からしたら、初恋でこんなに戸惑ってる私を見るのは楽しいんだろう。何せ、ずっと冷めた思いで恋なんて出来なかったんだから。

でも、棗を好きになってひとつ分かったことがある。分かったというより、気付いたこと。恋は人を信頼しないと出来ないんだってこと。信頼してない人を好きになれるはずがない。例えば、苦手な人がいるとしてその人を今すぐ好きになれる？ 簡単に、好きになれるはずがないんだ。少なくとも私は、棗を信頼してるんだ。他の人の見方で変わるけれど。

「大西と何かあったんでしょ？ 二人きりの時間は楽しかった？」

「な、なんで二人きりって知ってるの？ 棗に聞いたの？」

うつん。

棗が言えるはずない。体育館を出てないはずだし、出たとしても私と会うはず。

なのに会ってない。二人きりなのを知ってるのは……棗と私だけのはずなのに。

「戻ってくるのが遅いからだよ」。勘で言っただけ。それより

……大西を棗って呼んでるんだ？」

美咲の質問があまりにもしつこいので、経緯を話した。話さなかったら、明日また聞かれることは想像出来たから。

美咲はこんな調子だけど、口は堅いから誰にも言わないって信じてる。学校の人も、私が棗を好きなことは知らない。知ってるのは美咲と千恵。学校の中では美咲だけのはずだけど、真琴も薄々感づいてるみたい。一年生の時に相談したことがあるからだろう。

「棗も攻めるねえ。うんうん、楽しくなってきたなあ」

美咲が楽しそうに鼻歌するので、考えることはやめておく。今は今で楽しもう。いろんなことを考えるなんて、私には合わないって分かってるから、ただ突っ走るしかないんだ。計画性がないともいえるけどね……。

「じゃあね。また明日」

「またね？」

分かれ道を曲がり、息をつく。頭から中々離れないでいる、棗と
の場面。

棗にしてみれば、そんなに考えないで言った言葉かもしれないけど、私にしたらそれは希望。彼の名前を呼ぶことが出来るんだ。

ずっと気になっていた、柴崎さんが棗と親しくすること。付き合
ってるんじゃないかって疑うほどに。

私の気のせいなんだって思えた。

今日はいつもより早めに学校へ着いた。何となく、早めに起きて早めに来ただけ。静かな通学路。同じ制服の人が全くいない。朝の風景ってこんなもののかな？

私は足を急がせて学校に向かった。不安になって、教室でみんなが来るのを見たかっただけかもしれない。教室を覗くと、誰もいない。八時前に来たんだから当たり前かもしれない。

「あれ？ 誰かの鞆が置いてある……。この席って、誰だっけ？」

「そこは俺の席ですけど？ 星野さん」

ん？ 今、『さん』付けした……？

私をそんなふうと呼ぶのは、限られている。女の子からは『ココロ』って呼ばれてて、男の子からは普通に『星野』だから。

隼人？

でも声が違う。嫌味の敬語は使わないだろうし。

「おい！ 俺だって！」

「棗！？ な、なんでこんなに早いのか？」

慌てて後ろに下がる。早い時間にいるなんて思わなかったし、鞆を置いてるからってつきり違う人なのかと……。

「朝練だって。教室来たら、誰もいないからさ……。暇だから他のクラスに遊びに行ってたんだよ」

他のクラス……。

それって、柴崎さんのところ？
さんに会ってるんじゃないの？

柴崎さんが、好きなの……？

「どうした？ そんな暗い表情して」

心配して顔を覗き込む。嘘を言ってもどうせばれてしまう。

でも、嫉妬してるからって言えないし……。

まして、柴崎さんのことを話題にする勇氣すらない。気になるものは気になるけど……聞いてもいいのかな？

「そーだ、これ貸してやるよ」

そう言って片手に持っていた本を差し出す。何の本？ シンプルなツルツルな表紙。特に絵が描いてあるわけでもなく、鳥の羽が天使とかがやってる羽。受け取ってページを捲ると、文章ばかりが書いてある。小説……なんだろうけど、表紙からして恋愛小説か何か？ タイトルからしてもそうだし。

「そんな難しい顔するなって。今、小説にはまってるんだ。それ、面白いから読んでみるよ」

「ありがとう……。棗が小説を読むなんて、想像出来ないよ」

状態で言ってみると棗がそっぽ向く。

このままからかいたいけど、せっかく借りたんだからゆっくり読もう。感想だつてちゃんと書いておきたいもの。ページを最初に戻して、目を通す。恋愛小説かと思ったら、アクションシーンやファンタジーっぽい、男の子にも読みやすい物語だ。

これは、確かに面白いなあ……。

「おはよう棗。星野さんもおはよう」

「あ、隼人！ おはよう」

読んでいた本を閉じて、廊下側に歩く。

棗に会いに来たのかな？ 去年、隼人が棗に会いに行くのはそれほど見たことがないような……。

「隼人？ 何しに来たんだよ？ 特に用なんてないだろ？」

「酷いなあ、棗は。いいじゃん。僕がこのクラスに来たって。

それより星野さん、早いね」

いきなり話を振られたので頷くことしか出来ない。今日はたまたま早く起きちゃって、なんて私がいつもギリギリまで寝てるように聞こえるし。黙っていれば、棗と隼人があれこれ話すはず。

「星野さんはこれから早く来るの？ なら僕も早く学校に来ようかなあ。朝早くに来て二人だけで話すって楽しいだろうな」

「んー。これから早くに来れたら来るよ。静かな教室って好きだから」

理由はもうひとつある。朝早くに来たら、また棗と話せるかもなんて。

隼人と話せるのも楽しいけど、それ以上に棗の方が楽しくて嬉しくて、仕方ない。

「あ、僕そろそろ教室に戻るね。誰か来てるかもしれないからさ」

「早く戻らないと、女子が探し回るんじゃないの？　爽やか男子の隼人くん」

棗の嫌味にも隼人は笑って「そんなことないけどね」と受け流した。新しいクラスでも人気者になることは予想出来る。顔が整っていて、なおかつ爽やかで優しいんだから。去年もすぐく女子に呼び出されてた気がする。

「あ、槇野くん！　ここにいたんだ！　捜したよ」

ほんわかな雰囲気の子が隼人に駆け寄り、はにかむ。同じクラスの子なんだろうなって、何となく思った。それに隼人を見る女の子の目が輝いているのは、気のせいじゃない。隼人のことが好きなんだろうな。

「ごめん。棗といろいろ話したくて。今から教室に戻ろうと思ってたんだ」

「そ、そうなんだ……。安心したよ。もしかしたら彼女がいて、彼女に会いに行ってるのかと」

安心したのか、さらに笑顔が輝く。彼女なんて隼人はいないのに。好きな女の子がいるって言うってたのに。もしかしてこの女の子なのかな？

「隼人の好きな女の子って、あの子？」

廊下を歩いていく二人を見て呟いた。爽やか笑顔を女の子に向けて隼人と、はにかんでいる女の子。中々お似合いだよなあ。

「はあ？　隼人に好きな子がいる？　どこの噂だよ」

「ほ、本当だつて！　隼人から聞いたんだもん！」

棗は疑っていたけど、何かを考えているみたいで、黙ったまま。好きな子がいるって隼人から聞いてなかったのかな？　ライバルだから黙ってた、とか関係ないだろうし……。

「部活の時に聞いておく。そんなの聞いたことないし。隼人が惚れるほどの子だ。どんなに可愛いんだろうな」

「きつと、すつごく可愛いよ！　どんな女の子かなあ？」

好きな子がいるのは教えてくれたけど、誰が好きなかは教えてくれなかった。

でも、きつと可愛い子なんだろうな。

棗にも教えてないってことは、横取りとかされたくないとか……そういうのかもしれない。

そういえば、棗には好きな子や付き合ってる子はいいの？　全く知らないし、いたとしたら？　付き合ってる子がいるのなら……どうすればいいの？

「棗は付き合ってる子とかいるの？」

「は？　付き合う？　そんな奴、いねえよ」

とりあえず付き合っではないんだ。次は好きな人がいるか聞いた

いけど、聞きにくいなあ……。

もう、流れに任せて聞いちゃおうか。

棗が好きだってこと、分かるはずないから。

「好きな子は？ いるよね？」

聞いた瞬間、棗がこれまでにないくらいに真っ赤になって、取り乱す。

こんな反応するってことは……いるんだ。

私、ばか？ 笑って「いるわけないだろ」って言ってくれるのを期待してた。好きな子は、柴崎さん？

「俺、他のクラスに行ってくる。へ、変なこと聞くなよ」

慌てて廊下に走っていく棗。隠したって態度からして分かるのに。棗はきつと、柴崎さんのことが好きなんだ。美人だし、仲が良いし……付き合っていると誤解するほど、一緒にいたし。

でも……敵わないかもしれないけど、私は後悔したくない。振られると分かっているけど、いつかは告白したいって思ってる。今はまだ告白なんて出来ない。告白する勇気すらない。

「あ……本、借りてたんだ。読んでおこうかな」

机に座って鞆を置いてからページを捲る。読んでいるのだけど、棗はこんなジャンルが好きなんだなあ、とか小説を読むんだとか棗のことばかり。

「棗……」

好きだと言えば君はどんな表情をするのかな。笑って「冗談はや

めろよ」と言うのかな。

それとも真っ赤になってくれる？ 微笑んでくれる？

私は、どんな反応を期待してなんて言っただろう。

「ばか棗」

微笑みながら「ありがとう」なんて……。いつかは言ってくれるのかな？

「俺を好きになってくれてありがとう」

言うことはないと分かっている。

君が迷惑に思っても、私の想いはとめられないんだ……。

ココロが可愛くて仕方ないです！ 一途だけいろいろな考えて前に進めなかったり、後戻りしてしまったり。彼女は『柴崎さん』という人が離れないんでしょうね。

棗といると楽しいけれど、柴崎さんが頭を駆け巡っている、といった感じでしょうか。今は出番がない柴崎さんですが、後々登場しますので

二年生編の春、最後です。次は二年生編夏に突入です。夏は少し変化があらわれる予定です。

柴崎さんと棗に異変が……？

ココロに対する気持ちの変化も？

そして隼人との友情に穴が！？

のような話を予定しています。

時間が過ぎると、クラスに人が集まってくる。席に着いて話したり、宿題したり。さっきまで棗と隼人と私で話していたのは嘘のよう。

美咲の席に目を移すと、まだ来てない。家が学校に近いからいつも遅く来るのは分かっているのだけど。暇で読んでいた棗の本はもう読み終えた。最後の展開がまさか！　と思うアクション。小説って面白いなあ……。今度、買おうか。それがきっかけで棗とまた話せるかも。

「星野さん。その本なあに？　可愛い表紙だね」

派手な女の子と一緒にいた女の子が顔を覗かせ興味深そうに、私と本を交互に見る。前に見た時は気付かなかったけど、この子は背が低い。長いスカートに長い睫毛。少しオシャレをしたらかなり可愛くなるって私でも分かる。

「は、わ……。？　これは棗から借りたもので！」

「棗？　ああ、あの……。んーと柴崎さんの人だね？」

柴崎さんの人……。？　何、それ。付き合ってるとか、そんなの？　でも棗は否定してた。有り得ないよ、付き合ってるなんて……。好きな人まだ分かるのに。ううん。この子が誤解してるだけかもしれない。

「なんだ？　それ。柴崎の人？　ばかじゃねえの」

「あわわ！？」 大西くん？ 聞いてたの？ ただの噂だから気にしないでね？」

女の子は急いで違つところへ行く。彼女を目で見ていたかと思うと、苦笑。

どうして苦笑するのか分からなくて強く本を抱き締めるしかなかった。

「誤解するな。柴崎とはただの友達。付き合つてるとかないから」

「ご、誤解された方が嬉しいんじゃないの？ 柴崎さんって美人だし。あんな人が彼女なら自慢できる……だろうし」

棗は「はあ？」と不機嫌っぽい声を出して首をポキポキ鳴らしていたが、何を思い付いたのかニヤリと意地悪な表情をする。

この表情の時つていつもドキドキする。緊張して、上手く息が出不来ない。見られてると思うと変に身体に力が入る。

「柴崎じゃあ好みじゃないんだよな。俺にだって好みがあるの。美人だから彼女にするとか、無理があるって」

お腹を抱えて大袈裟に笑う棗に呆れながらも、ホツとした自分がいた。胸の奥に棗の彼女というのが気になって仕方なかった。

柴崎さんじゃないのが救い。幸い棗は柴崎さんが好みじゃないんだし……。

なら、棗の好みって？

「じゃあ棗の好みは？ 可愛い子？ 優しい子？」

「そこ聞いちゃう？　んー……。背とか関係なくて、一緒にいたら楽しいやつかな。もっと言うなら髪が短い子がいいかなあ……。ま、長くても好きな子ならなんでもいいけどね」

それは分かる。

私だって棗が好きだから、背が低いのだってバスケットに打ち込んでいる姿だっかっていいと思うの。かっこよさでは隼人の方が何倍もいい。

でも、私には……。誰よりも棗がかっこよく見えるの。

「星野は？　好きな奴とか」

「秘密。でも、かっこよくないかもしれないけど、私にしたら世界で一番かっこいいと思わせる人」

それくらいに惚れているんだよ。気付いてるの、棗？
君への想いはこんなに強いのに。誰にも負けないのに。
どうして見てくれないのだろうー……。――。

「ふーん。べた惚れかよ。惚気は面倒だからパスね」

「惚気なんてしない！　あ、小説読んだから返すね。面白かった」

抱き締めていた本をゆっくり緩めて返す。わがままになっていたんだ、私。話せるだけで十分だったはずなのに……。

棗が誰と付き合おうと私には関係ないもの。応援する必要もないし、邪魔する必要もない。好きな人と付き合えたら……。どんなに幸せなんだろう……。

「おう！　これで小説に興味が湧いてきたら嬉しいな……なんつって！」

「あ、うん。小説って面白いね！　何か買おうかなあって」

それは正直な感想。次の休みにでも、ファンタジー小説や恋愛小説、ホラー小説を探しに行こうかな。話題の映画小説とかでもいいかも。

そう考えると次の休みが楽しみで仕方ない。ああ……わくわくする！

「おはよう。ココロ」

「わあ！？　み、美咲！？　驚かさないでよ」

美咲、本当に心臓に悪いんだから。驚かされるのは慣れないものなんだから、少し優しくしてほしいものだ。

「何話したの？　朝から仲良いねえ」

「秘密だよ。棗と私の秘密の話」

だって、棗と私を繋ぐものがひとつもないんだもん。

だからせめて、これくらいの秘密くらい、いいよね？　例え棗

が私以外の人に教えたって、それでいいから。少しの間だけ……！

短い一日が終わり、カレンダーに目をやった。明日は三連休だ……。長いなあ、三日間も棗に逢えないなんて……。

そういえば棗は隼人に聞いたのかな？　好きな人のこと。

隼人が教えるのは想像つかない。

もしかしたら、勝負をして教えるか教えないかを決めるのかも。

「……………」

頭に流れるのは、ただ君の無邪気な笑顔。

目が覚めたのは午前十時。遅く起きたなあ。八時とかに起きるんだけど。

とりあえず顔を洗わなきゃ。タオルを持って洗面所に向かう。顔を洗って歯磨きをして。服を着替えようかなあー、と服に手をかけた瞬間に家のインターホンが鳴った。誰だろう？　遊ぶ約束なんてしてないし、彼氏なんてもってのほか。訪ねてくる人はいないけど……。

「はい！　どちら様ですか？」

「千恵です。ココロいますか？」

お母さんが振り返り、目で何か言っている。言いたいことは分かるよ。早く着替えて用意しなさい、だろう。少しは待ってほしい。服に着替えようとしてたんだから。

でも、千恵って言ったよね？ 本当に千恵？ 三連休を利用してこつちに帰ってきたの？

そう思うと早く逢いたい、という思いに駆られて財布を持つ手や動く足が妙に震えた。玄関に立って、深呼吸をしてからドアを開けた。目の前には髪を切って、天然パーマになっている髪型に大きめの服。ズボンにスニーカーというシンプルな服装。私を見て微笑んでいる千恵がいる。

「千恵！ 久しぶり！ たくさん話したいことがあるの。聞いてくれる？」

「ココロ久しぶり！ 勿論！ 私からも聞きたいことはあるんだから」

自転車に乗りながら買い物しようと思えると、前からよく行っていた店に向かう。向かっている間、いろいろな話をした。新しい学校や部活のこと、友達のことや楽しいこと。

私からは二年になってからどうなっているのか、部活の後輩のことと美咲のこと。

それから棗のこと。

あんなに相談して、後押しまでしてもらった。好きな人のことを話しているとこんなにも楽しくなって、とまらなくなる。いつの間にこんなに好きになっていたのかな……。

「ねえ。ココロに聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「ん？ 話せることならなんでも話すよ」

話し忘れたことはないはず。変なことを聞かれても、教えなきゃいいんだし。

千恵のことだから変なことは聞かないとは思っけど。

「槇野について聞きたいんだけど……。その、槇野から何か言われてない？ 『付き合ってくれ』とか」

「言われてないよ。隼人が私にそんなこと言うはずないよ」

だって隼人には好きな人がちゃんといるんだから。好きでもない人に「付き合って」なんて言う軽い人じゃないもん。
それになんで私？ 名前で呼んでるのは呼んでるけど、そこまですぐ仲良くないしなあ。

「鈍感だな。隼人も苦労するね、これじゃあ」

「何言ってるの？ 苦労するって……部活はそんなに忙しくないはずだよ」

額に手をあてて、呆れた表情の千恵。退屈ならそれでいいけど、顔に出すことないのに！ 久しぶりに逢えて、遊べて私は嬉しいのに。

とりあえず小説を買いたい。

千恵にも言っておいたから賛成してくれると思う。多分。

「小説買いたいから、見に行っている？」

「そうだったね。本屋に行こうか。小説好きなんだよね」

すっかり上機嫌な千恵を横目に、どんな本を買おうか本当に迷う。
アクション？ 感動？ はたまたホラー？ ホラーって面白いんだけど、一人で読んだり見たり出来ない。夜の風呂とか怖くて

後ろを見ながら髪を洗うし。中々寝付けないし。明るい話にしようかな。

なんて考えていたら本屋はすぐそこ。遠いわけではないので、すぐに着く。周りを見ると人が自転車で道を行き来している。

私たちも自転車だけだね。

「ああ。これもいいなあ！　これは映画の小説版だし。どれも欲しいやあ」

千恵は輝かせて小説コーナーを見るけど、私にはさっぱり。分厚いものや小さいもの、上下巻があるもの。

どんな話なのかも知らないのにどれを選べばいいんだろう。

棗が興味のある小説にしたい。戦闘ものかな、やっぱり。

このすごい数の中からひとつだけを選ぶ……。骨が折れる作業。

しんどいかもしれないけど、棗との会話になるのなら苦痛だとは思わない。

千恵だっているんだし、手伝ってもらおう。小説に詳しいみたいだし。

「ねえ。小説選びたいんだけど、千恵も選んでくれない？」

「いいよ。どんなのにする？」

棗との会話になりそうな、そして読みやすくて続編などないもの。詳しく説明すると上下巻がないもの。大きさはあまり大き過ぎないものがいい。

千恵は難しい表情を少しすると、手前にあつた本を手に取り、押し付けてくる。

「これがいいよ」

「て、適当じゃないの？　これ」

押し付けられた本を見ると英語が並んでいて、表紙はツルツルしていて水色の光が描かれている。疑問に思いながら千恵を見ると「大丈夫だから」とピースサイン。

千恵のことだから何か考えてこれにしたのかもしれないし。覚悟を決めて、本を買った。

本を買って学校に行くのは久しぶり。教室には誰もいないので、前に買った本を取り出して目に通す。読みやすいな。読んでいると話に引き込まれていく感じ。

「お？　星野もこれ好きなんだ。俺も好きなんだよな」

いつの間にか棗が来てた。本の話……。良かった。

棗も読んでた。好きだと、言ってくれた。

それから棗との本の貸し借りが始まった。廊下とかを歩いていると「星野！」と呼んで息を切らしながら「これ読んでみるよ」と笑って言うてくれるんだ。

「ありがとう。棗」

もうすぐ君との夏がきます。

one sided love 15 共通（後書き）

どうでしたか？ 今回の話は、好きな人と共通な話を出来るのも楽しいですね。日常にありそうな、ごく普通の会話かもしれません。

ですが人生に一度しかない中学生の青春を感じていただけたら、と思います。

柴崎さんがやっと登場します。美咲は出ていませんが、その分に柴崎さんとココロがたくさん話しています。書いていて楽しかったお話でした。

では、お楽しみ下さいませ！

夏は君への想いが増す季節。焦がれて焦がれて、手にしようとしたら儚く消える。大切だから急いではいけないのに。大切だから時間をかけていかないとだめなのに。気付いた時には手遅れ。

私の選ぶ選択肢には、間違いばかり……。――。

夢から目を覚まして、夏服に手を通す。真夏だから太陽が眩しくて、日焼けする肌。健康的かもしれないけど、白い肌には憧れたりしている。漫画とかでよくある……。

「じゃあ、行つてきます」

マンションを飛び出して学校へ早足へ向かう。朝早く学校に行つて、みんなに内緒で棗と隼人と話す。ささいなことでも、私にしたらとても楽しいし嬉しい。二人と話せるのは、特別だから。

教室に着いたけど、誰もいない。棗もいない。朝早くに来て、二人には朝練があるから話せない時だつてある。しょうがないことだし、部活で頑張つてほしいことも事実。でも、寂しいと思う自分がある……。何考えているの！ 私つたら！

「あれ？ 星野さんだけ？」

声に凍り付く。どうしてここにいるんだろう。校舎は同じだけど、クラスは違うしあの人は私たちのクラスより一階上にいる。私が三

階にいたとしたらあの人は四階なのに。

でも、あの人はここにいます。きっと彼に会いに来たんだ。そうじゃないか、来る理由なんてないもの。

「ねえ。棗知らない？ 捜してるんだけど」

「知らない。朝練じゃないの？」

あの人——柴崎さんに目を向けた。相変わらず美人。何カ月ぶりに見るだろう。二年になってから全く見なかったし、会わなかった。このクラスに来ることもなかった。

なのに、なんでこんな時間に……？

「そう。棗が遅いつていたら朝練しかないものね。ああ。そうだ。棗が来たと言っておいてくれない？ 柴崎が会いに来てつて言ってたってね」

「別にいいけど。柴崎さんに聞きたいことがあるの」

私は決心して聞いてみる。柴崎さんは私を振り返りながら無表情になった。こつちを睨んでいるようにも見えろ。そんなことを無視して、気になっていたことを聞く。

「柴崎さん。棗とどんな関係なの？ 付き合っているわけじゃないんだよね？」

核心を突いてみた。棗からは聞いたけど……信じているけど確認しておきたい。付き合っていないのに、付き合っているような素振り。そんなの、卑怯だ。動揺させるためにこんなことをしてるなら、柴崎さんに何か文句でも言っておきたい。

「なんか変わったよね。一年の時は人見知りとかで、言いたいことをひとつも言えなかったくせに。棗がいるから強気になったの？　ふざけないでよ」

「確かに前の私は、言いたいことも言えずにひたすら我慢してた。柴崎さんに棗を取られても、仕方ないんだって。二人は似合ってるから」

柴崎さんは美人で、肩につくかつかないくらいの髪の長さで前髪を分けていて、白い肌にまいていて短いスカート。鍛えられた筋肉のついた足。強気な目元。いつも何かを企んでいるような口元。柴崎さんに敵うなんて、無理だけど。私は特別可愛いわけじゃないし、美人なわけでもない。

でもね、好きな人が出来たら誰でも可愛くなりたいんだ。似合うように頑張りたいんだ。棗に似合うためには、凛々しくて優しい子にならないとだめなんだって思っで。可愛い子じゃないとだめなんだろうって。私は、棗のために変わりたい。

「そうよ。私と棗は似合ってる。棗を必ず私のものにするんだから」

「でも！　私だって棗が好き！　譲れないし、譲りたくない！　棗は……棗に似合うかは本人が決めるから、私は最後まで諦めない」

柴崎さんには負けたくない。棗をもの扱いしてる人に。まるでゲームの中のキャラを何日で自分を好きにさせられるか、そんなふうに棗を見ているんだろう。

だからって私には邪魔をする資格はない。なら、私は私なりに出

来ることをするだけ。棗が柴崎さんを選んでも、彼は彼にしか分らないことがあるはずだから。

「あっそう。棗のことが好きなのは前から知ってた。あんな態度をするんだから、丸分かり。私も棗を諦める気は全くない。確かに、棗とは付き合っていないし、友達関係。私にこんなことを言うのは納得いかないかもしれないけど、棗はあんたを選ばない」

「な、なんで……。なんでそんなことを柴崎さんに言われなきゃいけないの!? なんでも分かったような言い方、やめてよ!」

私を選ばない? 柴崎さんがなんで分かるの? 棗の思いま
で分かっているような言い方……。何を知ってると言うの? 棗
が誰を選ぶのか分かるの?

そんなの、冗談にもほどがある!

「今のは勘。棗は星野さんを選ばないと思っただけ。私がなんでも知ってるわけじゃない。じゃあね」

冷めた目で私を見たあと、柴崎さんは廊下を歩いて行く。誰もいないせいか、柴崎さんの歩く音が響く。私はまだ聞きたいことがあるので柴崎さんの腕を引っ張った。驚いて振り返る柴崎さんを見無視して、一番気になっていることを口にした。

「柴崎さんは……棗が好きなの?」

聞いた途端、柴崎さんの口元が怪しく笑ったのを見逃せなかった。本当は、棗のことが好きじゃないんでしょう? 私から棗を奪って悔しい姿を見たいがためなんですよ?

「さあね。私が棗をどう思っているかが私の勝手。星野さんには関係ないわ」

「……………」

確かにそうだ。柴崎さんの気持ちは私がなにか言って変わることはないし、変わる必要もない。気持ちは自由だから、誰かが勝手に操っているものじゃない。また、邪魔をすることも人の勝手だから。

「手、離してよ。星野さんと仲良くなっていんだから」

「そう、だけど！　お願いだから約束して。棗を傷付けないで……………」

柴崎さんが棗をどう思っているにしても、私がどうにか出来るはずがなく。私はばかだから、棗のことを傷付けてほしくないって思うだけで精一杯で。お願いなんて、そんな綺麗なものじゃない。私の勝手な思いを押し付けてるだけ……………」

「棗を傷付ける？　そんなことしないわよ。棗とは付き合っていないんだから。それに棗が私を好きにならないとだめじゃない」

「分かってる。でも棗は柴崎さんを気にしてるから……………」

だっていつも一緒にいる。前に見ないふりをしてたけど、一緒に下校しているのを見たことがある。二人ともバス部だからたまたまだって、見た時は無理矢理そう思っていたけど、時間が経つにつれて分かったんだ。あれはどちらかが待っていたのだと。信じたくないけど、棗が柴崎さんを待ってたんだ。あの日は男バスの方が早く終わっていたから。柴崎さんは遅かったのに。もう、棗の気持ち

は柴崎さんに傾いているんだって、私でも分かるよ？

「星野さんはそういうふうに見えるだけ。強気はどうしたの？
諦めないんでしょ？」

私の反応を楽しんでいる柴崎さん。強気なんじゃなくて、あれは勢いで言ってしまっただけというか……。本当には思ってたんだけど。あんなに強気に言えたのは初めてかもしれない。いつもは流されているから。

「柴崎さん。ありがとう。私、棗にアプローチしてみるよ」

「応援もしないけどね。棗が来たら伝えといて。柴崎が待ってた、って」

柴崎さんは優雅に微笑むと階段を軽く上って行った。後ろ姿を見ながらなんともいえない気持ちになり棗の机に触れた。授業中はいつも伏せて寝ている君。寝てる時に思い浮かべているのは、誰？

君の笑顔も君の全ても……。全部、私が独り占め出来たらいいのに……。

「棗は、誰が好きですか」

机に座って君と同じように伏せてみる。誰も来てないからいいと思う。少しだけなら……。

そんなことを思いながら、机に問い掛けてる自分がおかしくなつて、自分の席に戻った。手を机の中に突っ込むと人が描いてある紙を見つけた。柔らかな笑顔で、優しい雰囲気を漂わせている男の子。去年の冬に描いた、隼人。輪郭しか描けてない中途半端な絵は、何か月も放置されたまま。

「私、何忘れていたんだろう……。描くって言ったのに」

廊下を走って階段を素早く上る。隼人に会って話して……。それからのことは全く考えていない。ただ、会いたくて仕方なかった。柔らかい口調で私を呼んでくれる、あの男の子に今すぐ会いたい。

「……………隼人！」

教室を覗いたけど誰もいなかった。朝練？ それにしては遅い気がする。長引いているだけなのかな？

教室に戻ろうと、階段を下りていたら大好きな声が聞こえた。

「隼人ー、俺疲れたから来るならお前から来いよな」

「朝練で？ 今日はまだ軽い方だったじゃん。それに僕は言われなくても、棗のクラスには行くよ。会いたい人がいるんだから」

棗と隼人だ……。そっか、朝練だったんだ。あんなに不安になってた自分はなんだったんだろう……。

それにしても、隼人の『会いたい人がいるんだから』って……隼人の好きな人って私のクラスにいるってこと！？ そうしたら、隼人がその人に会いに来てたってこと……なんだ。

「あれ？ おはよう。星野さん」

「わあ！ お、おはよう。隼人」

急に声をかけられたので、隼人に変な声を出しちゃった……。いつもと同じ笑顔を浮かべているから、それほど気にしてないみたい。

隣に棗はいないから……教室に戻ったんだろうなあ。

「隼人！　これ！」

「ん？　あー、絵？　嬉しいなあ、ありがとう」

はにかまれて恥ずかしくなって、顔を真っ赤にしながら教室に戻る。机に座りながら寛いでいる棗が、いた。

「おはよ。棗」

「おう。おはよ星野」

笑顔を浮かべられて何も言えずにしていると、棗が何か思い出したのか「あ。そういえばさあ」と声をかけてきた。

「隼人の好きな奴、教えてもらえなかった。でも、大体予想はついた」

「え！？　隼人の好きな人、分かったの！？」

大声で言ってしまい、慌てて口を手で隠す。興奮して、つい……。でもやっぱり隼人は教えてないんだ。知られたくないから言わないんだよね？　なら、私も黙っていた方がいい。

「あ。柴崎さんが棗を呼んでたよ」

「は？　柴崎が？　一体なんだろう」

本を机に置くと、慌ただしく走っていく。私はその後ろ姿を、引

き止めることなんて出来なくて、ただただ黙って見つめていた。

一年生編の夏とは少し違う心情を感じていただけたら嬉しいです。
棗と一緒にいて気付くこと、傷付くこと。成長していくココロをあ
たたかく見守ってくれたらありがたいです！

棗が少しずつ、ココロとの距離が近くなっています。

それは隼人も同じで、ココロも二人の間で揺れています。 棗が好

きだけど、隼人にもドキドキさせられちゃいます。

でも、恋愛っぽくもっと甘くしてみたいです。

棗が柴崎さんのところに行つて、何分経つのかな……。軽く十分は過ぎてる。なにを話しているの？ 棗は柴崎さんの想いに気付いているのだろうか。

あの時はごまかしていた柴崎さんだけど、私からしたら柴崎さんは棗が好きなんだと思う。だから、棗に振り向いてもらおうと頑張るんだ……。

「柴崎さん、綺麗だから鼻の下を伸ばしているのかも」

「そう？ 棗はそんな軽い奴じゃないよ。多分ね」

横を見ると、隼人が笑顔で机に座りながら顔を手に乗せていた。いつの間に、とか思つても私が気付いてない間に来たのだろうと思えば、それほど不思議じゃない。

隼人はあくびをしながら棗の席の教科書を捲る。細くて白い手から目が離せない。隼人は手まで綺麗。全てが綺麗な人……。

「星野さんも気になるの？ 棗の教科書」

私を見ては、微笑む彼。どうやら勘違いしてるらしい。私が見ていたのは棗の教科書じゃなくて、隼人の手なのに。

隼人の隣まで行くと、私も席についた。隼人と隣席。去年も隼人と隣だったな。いろんなこと、話して先生に注意されたこともあった。その度に隼人ファンの女の子から痛い目線を受けていた。

今は、隼人の隣は私じゃないけれど。

「星野さんと隣席なのは久しぶりだなあ。よく先生に怒られた

よね」

「うん。授業なんて耳に入らなかった。……隼人」

名を呼んで、教科書を持っている指に手を伸ばす。少し冷たい指と手。静かに隼人の手を握った。

隼人は困った笑顔をしていたけど、意地悪な笑顔になって強く握り返してくれた。

「星野さんの手、小さいね。女の子の手はこんなに小さかったかな？」

「隼人が大きいんだよ！ バスケしてたら手も大きくなるの？」

私よりも大きい手は、男の子の手。こんなに簡単に握ってしまったけど、隼人が嫌がらなかったから嬉しい気持ちと安心する気持ちが私の心を揺さぶった。

負けないようにと私もさっきより力を込めて、強く強く隼人の手を握り締めた。

どれだけそうしていたのか、分からない。棗が声をかけてきたから隼人と繋いでいた手を離れた。さっきまでお互い強く握り合っていたのに、驚くほど簡単に隼人の手は離れていった。

目の前で怒った表情の棗に隼人は気付いてない素振りで「おかえり」なんて言っている。私は棗に目をやりながらも、隼人と繋いでいた手が熱を持っていることに気付いて、その手を片方の手で握った。

「なんで、隼人が俺の席に？ なんで星野が隣に座ってるんだよ？」

「怒らないでよ。いろいろあつてさ。内緒だよ。星野さん？」

いきなり私に聞かなくても……いいのに。内緒、と云えばいいのかな。隼人は手を握っていたこと、言うつもりはないみたいだし……。私も出来れば恥ずかしくて、言いたくないし。話を合わせていた方がいいよね。うん。

「な、内緒だよ」

「ほら。星野さんと僕の秘密だからね。これ以上、触れて欲しくないなあ。怒られても困るかな」

ひ、秘密……？　そこまで大袈裟なものじゃないんだけど。

それより、怒るってどうして？　柴崎さんとなにかあったの？
喧嘩でも……したのかな？

「隼人、教室に戻れ。今は話したくない」

不機嫌な棗が隼人を睨んで、今にも喧嘩しそうな勢い。なんだか恐くなつて、二人から少し距離をとった。特に棗が……とても怖い。逆に隼人は肩を竦めて息を吐くと、廊下に出て小さく私に微笑んだ。ドキリ、として隼人がいなくなるまで見ていたら、乱暴に教科書を机にしまう棗と目が合う。

「……………」

「……………」

長い沈黙。目を合わせていても、棗はなにも言わない。私もなに

も言えない。隼人のことがあったから余計に棗とは気まずい。

棗が怒りのオーラ全開で、話しかけることすら怖い。

棗の目線が怖くて、私は隼人を追いかけた。

足音に気付いた隼人が振り返る。私を見てから駆け寄ってくると、背中を優しく叩いて「大丈夫？」と聞いてくれる。多分、私が息を少し切らしていたから。早く隼人の傍にいたい、そう思った思いが私をここまで走らせた。

おかしいかな、私……。私は棗が好きなはずなのに。
隼人と一緒にいたいと思うなんて……。

「棗が怖かったよね。大丈夫だよ。みんなが来るまで僕と話せばいいから。僕のクラスに来て、僕の隣席に座ればいい」

手を触られたあとに、強くまた握られて手を引かれる。反抗も出なくて、おとなしく歩いていたら隼人のクラスに着いた。

中に入って隼人が肩に手を置いて座らせてくれた。

「みんなが来るまでここにいていいよ。棗にも困るよね。あんなことくらいで怒るんだから」

「あんなこと……？」

首を傾げて隼人に向き合う。隼人はなにも言わずにただ私に笑顔を向けるだけ。きつと、言うつもりはないんだ。態度だけでそれが分かる。直接棗に聞けってことか……。

「ま、槇野くん！　話があるの！」

隣のクラスの女の子がドアに立って、顔を真っ赤にさせながら俯いている。

きっと、隼人に告白するつもりなんだろうな……。

「行ってくるよ。星野さん、退屈かもしれないけどすぐに戻るから」

私のことは、気にしないで。すぐに戻らなくていいから、ちゃんとその子と話してあげて。返事を考えてしてあげてね。

心の中でそう呟きながら黙って二人を見送った。

少し時間が経ったので、隼人のクラスから出て自分のクラスに戻る。

この時間なら、誰か来ていると思う。棗と二人きりになることもない。棗のことは、どうしてあんなに怒ったのか分からない。でも、柴崎さんとなにかあったから……。柴崎さんは、棗の態度まで関係するほどに特別な人なのかな……。

「あ！　おはよう〜ココロ〜」

美咲が教室から飛び出してきて、肩がぶつかった。痛いけど、美咲に悪気はないんだから、笑顔で美咲に話しかける。

「そつえばねえ〜、大西がおかしいんだよ〜。怒ってるっていつか、考えてるっていつか〜」

まだ、機嫌が悪いんだ。顔を合わせても睨まれそうな気がする……

…。隼人とは少し仲が悪くなつてたし。

しばらくは、棗と隼人は会わない方がいいんじゃない？……。でも、どうすればいいの？ 私から隼人に話しかけるにしても、女の子の目が気になる。彼女、なんて誤解されたら大変！

「ああ。ごめんね星野さん。話が長くなつて。また話しに行くよ」

「ま、待つて！ 話しに来たらいろいろ大変だから！ 来なくても大丈夫だよ」

あれ？ 私、今なんて……？ 言葉の意味は、来ないで言つてるようなもので……。隼人の様子を伺つてみると、見たことがない悲しい笑顔。

「そっか。ごめんね。周りに誤解されて迷惑だよ。分かったよ。もう、行かないよ」

私はなにをしてるの……。隼人を突き放すなんて、出来ないくせに。好きな人は棗でも、隼人にもドキドキしてる私がいるから。

「わ、私が隼人に会いに行く。朝しか……。会いに行けないかもだけど」

隼人はみるみる明るい表情になつて、頭に手をのせて撫でてくれる。優しく、この人に思われてる人はどれだけ幸せなんだろう……。隼人の彼女になれば、毎日が幸せで楽しくて。羨ましいなつて少し思った。

「嬉しいよ。星野さんから会いに来るなんて。待つてるからね」

……あ、もしかして棗のこと気にしてる？ 部活でも会っから
そんなに気にしないでね」

あ……。部活でも会った。それならなんにも変わらないか
も……。

でも、二人はライバルだしすぐに仲なんて戻るよね。さっきの棗
は嫌なことが会っただけなんだし。

「気をつかわせてごめんね。僕がなんとかしてみせるよ。あんな
空気、苦手だし」

「私にも手伝えることがあつたら言ってね。喧嘩とか……しな
いでね？」

手を振って隼人がいなくなるまで見送る。一部始終を見ていた美
咲は口を大きく開けて固まっていると、目を細めてニヤリと笑った。

「あの槇野と恋仲なのかなあ。女子を敵にまわすんだね。
私は興味ないけどね」

「へ、変なこと言わない！ 恋仲じゃなくて、友達だからね
！」

美咲を軽く叩いて教室に戻る。棗を盗み見ると、静かに本を読ん
でいる。

棗から怒りオーラが見えるのは……私の目がおかしいのかな？

「おい。星野。話がある」

棗と目が合ったうえに呼ばれ、肩を震わせながら棗に近付く。

黙ったまま廊下に出て棗の目が私を映す。君が怒ってるのは……
私が原因？ 失礼なことでもしちゃった？

「星野！ お前は簡単に触り過ぎなんだよ！ 男に気安く
触れたらだめだ！ 隼人にも！」

「はあ？」

何を言うのかと思ったら、手を握っていたこと？ 男に気安く
触れるなっでどういうこと？ 女の子に気安く触れたらだめなの
は教えられたけどねえ……。

「どうしてだめなの？ 棗にも、触れているのに」

棗の手を静かに触った。温かくて、私と変わらないくらいに小さな
手は、隼人とは反対で。

触られていたことに気付いた棗は、顔を俯けて手を離そうとしな
い。私の心臓の激しい鼓動が、棗にも聞こえるんじゃないかって思
った。手に触れているだけで……私が熱をもつことをしらない君。
君に、私の想いは伝わっていますか……？

「温かいな。星野の手は……他の奴には触られたくないって
思ったただけだ。隼人と手を握ってたのも、イライラしたっていうか
……」

「な、つめ？ どうしたの？ そんなこと言って……。じ
よ、冗談はやめてよね！」

手を離して肩を思い切り叩いて、早足に教室に戻った。
棗の言葉……棗は分からないかもしれないけど、あれは私にとっ

て最高に嬉しい言葉です。嫉妬じゃないはずだけど……嫉妬に聞こえるんだよ？

「手、熱い……」

棗と繋いだ手が熱い。汗もかいていて、微かに震えている。

棗は私と手を繋いでも、平気なのかな……。私だけこんなに緊張して、身体が熱くて……。

でも、これから隼人に触れない方がいいのかな？ 他の男の子にも？ それは難しいな……。

プリントを配る時とかに手がたまに触れることだってあるもん。

「棗はばかだけど……私はもつとばかだなあ」

だって、あんなにドキドキさせられる人に恋をしたんだから。例えば、君が違う人を選んだとしても……私は、君に何かしてあげられるように、頑張るからー！。

one sided lover 17

初めて見た感情（後書き）

隼人がメインのような今回でした！ 次回は棗と隼人がどうなったのか、隼人に会いに行くココロを見てどう思うのか、を予定しています。

今回も隼人メインです。二人しか出ていませんが、恋愛らしく甘くなつた話ではないかと思ひます。

私にしたらこれで甘過ぎたと思つほどですが、他の方の小説を見ているとこれで甘過ぎというわけではありませんね。調整が難しい恋愛小説です……。

棗が嫉妬に似た感情を私に見せてから、数日経った。相変わらず隼人とは仲が良くないみたいで、みんながいない時間……つまり朝に隼人に会いに行っている。隼人には触れてないけれど、時々触れそうになる。その度に棗を思い出して慌てて引っ込めるんだけど……。

「どうかしたの？ 考え事でもしてた？」

隼人が私の顔を覗き込んできて、肩をビクリとさせながら後ろに下がる。

隼人はクスクス笑いながら宿題をしている。もう！ 本当に心臓に悪いんだから！

「あまりにも静かだからさ。いつもならよく話すのになあ、って思ったただだよ」

「棗とはどうなったのかなって。仲直りしないの？」

指をいじりながら顔を下に向いて聞いた。隼人のことだから怒らないとは思っけど、念の為に。棗に聞いても無視されるし、機嫌が悪くなる。だから隼人に聞いた方がいいし、どちらが謝った方がいいんじゃないかな。棗は、絶対に謝らないと思うけどね。

「特に変わりはないな。見たら分かると思うけど？ どうなったもこうなったもないよ。仲直りっていうか、棗には棗で時間が必要だと思うから。頭を冷やしてもらえるまで待つよ」

すごい……。気の長い人ってこんな人のことを言うのかな？
相手のことを考えて待つ人、かあ……。隼人はやっぱり優しい人だなあ。

「それとも、棗が気になる？　いつもの棗に戻ってほしい？」

「え！？　そんなことは……」

棗が気になっているんじゃないくて、ただこのまま気まずい空気が流れるのかと思うと……。神経がもつのかなあって……。はやく仲直りして、前見た走り対決とかしてほしい。ライバルなら、いつも対決してるんだよね？　二人は……。今もライバルなんだよね？

「ねえ隼人。二人は今もライバルだよね？」

隼人は「うーん」とあくびをしながら伸びをすると、顎に手をつけて黙った。考えているんだろうけど、この緊張した空気……。気まずい。

「そうだなあ。ライバルかもね。意味は星野さんとは違つかも」

「え？　一緒にやないの？　私が考えているのは宿敵の意味のライバルだよ」

なにが違うんだろう？　ライバルって他にどんな意味があった？　友情とは違う意味のライバルなのかな？

答えに困っている私に隼人が笑うと、「やっぱりね」と言う。

「とりあえず^{ライバル}恋敵は恋敵ってことだよ」

「ええ？ 教えてよ！」

抱き付く勢いで隼人に近寄ると隼人は爽やか笑顔で頭を撫でてくれた。それで自分がなにをしようとしたのか分かって、隼人と一分距離をおく。それでもしないと、抱きつくかもしれないし。それにまた隼人に触れてしまうかもしれない。

隼人に触ったことなんか女の子ファンに知られたら私、どうなるのかな……。ましてや、見られたら大変……。

隼人と話せるだけで羨ましがられるのに、隼人は自分の魅力に氣付いてない。かつこよくて、優しく紳士で。彼氏にしたら自慢はできるし友達と取り合いになるかも。私には有り得ない話。

「教えてほしいんじゃないの？ そんなに離れようとしなくて、もっと近寄ってほしいな」

動けない。隼人に近寄ったら、棗をまた怒らせる気がして……。

第一、隼人に触れそうだから距離をおいてるのに、本人は全く氣付かないんだもん。これじゃあ、私だけばかだよ。隼人はきつと私を女の子として見てないんだ。だから簡単に近付けるんだ。妹的存在なの、私って？

「これ以上近付くのは無理だよ！ 教えてほしいけどこれ以上近付いたら……」

隼人に触ってしまいます。

なんて言えるわけがないので、最後の部分だけ濁す。触る触らないを気にしないと思うけど、軽く触れちゃだめなんだって棗に言われたから。

だから触ってしまう前に引いているのに、隼人から近寄ってきたら……何の意味もないじゃんか！

「なんて？　これ以上近付けないって？　なら僕から寄ればいいんだね」

「そ、そうじゃなくって！　隼人に触ってしまうかもしれないから距離が必要なの！」

ああ……言っちゃった。勢いに任せ過ぎだよね私。

隼人はどう思ったのだろうか？　「星野さんから触ってきたのに？」と思う？

顔を上げると、目の前に隼人が微笑しながら立っている。こんなに近くに来たら……きっと隼人に無意識に触ってしまうかも……。足を後ろにして、また一歩下がろうとしたら、私の腕を隼人が握った。

「へえ。僕に触るかもしれないんだ。僕にしたらそれは嬉しいことだけど、どうして拒むの？」

「……男の子に簡単に触れたらいけないって。隼人にも触るなって言われて……」

触りたくないって言ったら嘘になる。手だって繋ぎたいし、スキンシップだと思ってやっていること。

棗にはそうは見えなくて、不快感を与えてしまうなら……棗以外の人に触れないように我慢するから。

隼人は目を大きく見開いたけど、すぐに細めて「ふーん」とか「なるほどねえ」と呟いている。

「あいつも中々だよな。ねえ、星野さんから触ったらだめなんだよね。なら、僕から触ったらいいの？」

「よく分からない……。私からは触れたらだめとは言われたけど、異性からとは聞いてないかも」

男の子には触れるなつて。よくよく考えると、異性から触られそうになった時とか聞いてないよ。こんな時、なんて言えばいい？
どんな反応をすればいいの？

「なら良いよね。僕、結構我慢してた方だから思い切りするから」

「隼人……？　我慢つてどうしたの？」

手を伸ばして、隼人の頬に髪に触れようとして、また引つ込めるのに、引つ込めようとした時に柔らかい頬に手が触れた。

男の子にしては白い肌に赤みのある頬。二重の大きい目に細い身体。運動してるからだろう、足にちょうどいい筋肉がついて綺麗な足でシュツと細い。だからあんなにも、女の子が隼人に惚れたり憧れたり、ファンクラブをつくってしまうほど、人気があるんだ。私は贅沢なのかも。隼人に触れてはだめだと思っただけでも、心が頭よりも早く反射的に隼人に触ろうと手を伸ばしている。

指は熱をもつて、心臓が忙しくて激しい音を奏でる。鼓動の音が聞こえるんじゃないかって不安になって、胸をおさえて隼人を見ずに俯けた。

「意地悪し過ぎちゃった。星野さんは僕に触らなくていいよ。その代わり、僕が星野さんに触れるから」

驚いて顔を上げた。身を固まらせて自分の身を守れと、簡単に触らせるなと頭が働く。でも、私は隼人に触れてほしいと思っている

し、棗にも同じ思いを抱いている。隼人は好きじゃないよ。ただ……スキンシップだから。

棗、ごめんね……。少しだけでいいから、私のわがままも聞いて下さい。

「隼人がそれでいいなら……。隼人の思うように行動してほしい」

手招きをされて拒むはずもなく距離を縮める。近寄ってぶつかりそうになりながら目の前で立ち止まると、隼人の細い指が私の髪に絡まる。何度も何度も髪を絡めては撫でられる。

「大丈夫。棗とは少し喧嘩してるけど、星野さんが心配するほど深いことじゃないよ。仲直りは難しいかもしれないけどね」

髪を撫でてくれた指がとまって目を合わせた。

隼人は、私が近寄ってきたのは棗のことが知りたいからと思っているの？ 棗のことでこんなに私が触られても、って？ 私は棗と隼人がどうなったのか気になって話題にしたけど、嫌がつてるわけじゃないよ。むしろ隼人に触れられて嬉しいよ。隼人に触れたいと思っているのに。

背を向けて立つ隼人が離れていく気がして、気がついたら隼人の背中に頬を寄せて手を隼人の身体に縛っていた。

抱きつかれるなんて思っていなかったらしく、隼人の身体は大きく跳ねて固まったまま。私がどう思っているのか知ってほしくてしたわけだけど……恥ずかしい！ でもここまで積極的になれたんだから、度胸だよ度胸！

手に力を込めて、今だけは離れないという意思表示。

「私、隼人に触れられて嬉しい。自分の意思で決めたから、嫌

がってないんだよ？」

隼人がこっちを向いて俯いた。だから嘘だと思われないうちに、ずっと力を込めて抱きついていた。

すると背中の手がまわってきて、隼人の顔が私の頭のすぐそこにあった。いわば、抱き合っているんだ私たち。冷静になって離れようとしたけど、隼人の力に勝てるはずもなく、すっぱり腕の中。

「ありがとう。こんなふうに抱きしめられるなんて思えなかった。幸せ者だね。僕は」

隼人は爽やか笑顔を浮かべると腕を緩めて少し距離が出来る。寂しいと思いながら、自分がなんであんな行動に出たのか分からない。隼人が離れていく気がしたら、ほっとけなかった。

大胆すぎる……。私は一体なんてことを……。隼人ファンの全ての女の子を敵にまわしたようなもの。見られてないから、大丈夫だよね？ うんうん。

「嬉しいなあ。星野さんから抱きついてくるなんて。これじゃあ我慢出来そうにないかも」

幸せそうに微笑んでいる隼人になにも言えず、ただ俯いていると隼人は私の頭を撫でて安心を与えてくれた。

もう時間だから教室に戻った方がいいと、そういう意味の声にも言葉にもあらわしていない仕草の優しさ。

「じゃあ……戻るね」

夏は爽やかな恋の季節。爽やかで冷ややかな風を受け止めながら、惑わされる。

夏で気温が上がるのと同時に、身体もあの人を考えて熱をもつ。太陽の暑さと共に熱く、爽やかな恋の訪れ。だから惑わされてるだけー。

「星野さん。僕は待っているからね。例え、都合のいい男でもいいから、傍にいたいと思う」

待つのは……なにを？ 誰を？ 彼女を？ ……好きな人を？

どうしてそんなに優しい言葉を私に言うの。私じゃなくて、本当に伝えなければならぬ人がいるでしょう。でも、隼人に言うことが出来なくてそのまま教室に戻った。

「気付かない……つもりなのかな」

私って本当にばか。好きな人は隼人だけだと思っているのに、隼人にも揺れている。隼人への思いは恋というには幼過ぎる。ただ、甘えられる場所。都合のいいところ。隼人を好きになってしまいで、少しこわい。

「大丈夫……。私にはあの人しかいないから。隼人は友達だから」

この時は、ずっとこの穏やかな関係でいられると思っていたんだ。

次回は秋です。秋になったら、書きたいと思っていた話があるので、それを書けるのが楽しみです

秋から冬にかけては甘酸っぱい、淡い恋愛になるかと思います。今回のような甘い話は少なくなります。

でも、どこからが甘くてどこからが淡いのか分かりません……。例えると「君と繋がる」や「あなただけに」みたいな感じにしたいんですが、上手くいかない……。とりあえず短編が書きたいのかもしれない。

one sided lover 19

不器用な優しさ（前書き）

ココロと棗です。書きたいなあ、と思っていたお話なんですが、
なんだか中途半端なでになっています。

秋は戸惑う季節。熱い想いをしたのなら、今度は心を揺さぶられて。優しい君と元気な君に戸惑って、心が揺れてー……。

秋は体育祭シーズン。去年は散々だったけど、六組が一位になって……記念写真を撮った。今年はどうなるんだろう……。

「はい！ それでは各種目に出る人を決めていきます。全員出て下さいね」

種目は何種類があるけど、二年は全部出ないといけない。例えば、障害物リレーでネット潜りをやる人と三輪車に乗る人……必ず全員が出ることになっている。去年なら、自分が出る種目の時とかに、出ない人がクラス席に座って応援とかしてたのに。全員が出るから、応援はないかもなあ。

「なに出ようかな……」

種目は、障害物リレーに全員リレー、百メートルや八百メートルなどの変形するリレーに百足リレー、玉転がし。まあ……出るのは強制だけど、障害物リレーの何の障害物をクリアするのは自由に決められる。誰かとかぶったらジャンケンか譲るかどっちかだ。

「星野さんは何やる？ 私、玉転がしがいいなあ」

「んー。何しようかな。体力ないから負担の少ないものかな」

私は運動が得意じゃないので、出来ればこういうものは運動部の人に任せたい。実際に、運動が好きな人にとつたら体育祭なんて気合い入りまくりだろうし。

「そうかあ。じゃあ百メートルか二百メートルだね」

変形リレーのことか。二百メートルはグラウンド一周で百メートルは半周なんだよね。楽にしたいなら百メートルだろう。

でも、百メートルは喘息の人や本当に走るのが苦手な人にした方がいいだろうから。

周りを見たら、みんな話し合っている。リレーが多いから八百メートルは運動部しかないよな……そんなことさえ思ってきた。運動部が多いこのクラスでも、八百メートルは嫌らしく、運動部なのに「俺は二百メートルにしとく」なんて声も。

「やだ！　運動部が八百メートルやらなくてどうするんだろう。誰か推薦しないと……」

清楚な女の子が困ったのか、オロオロと周囲を見渡して、ギャルの女の子となにやら目で会話している。ちよっぴり手話を交えていたけど、ギャルの女の子がグーサインを清楚な女の子に向けて、清楚な女の子は安心したのか息を軽く吐いた。

「はいはい！　意見があるんですけどー」

ギャルの女の子が手を上げて、声を体育委員に聞こえるように大きく発した。体育委員の子はギャルの女の子に視線を移す。ギャル

の女の子はチラツと清楚な女の子を見てから高い声で言った。

「八百メートルとかは運動部がやるべきだと思っんですよねえー！
普段走ってるわけだしー。そこで、大西くんを推薦しますー！」

「はあ！？」

ギャルの女の子の発言でみんなの目は棗に向けられる。当の棗は不満な表情を隠さず「はあ？」ともう一回言った。

いきなりのことなので言った本人のギャルの女の子と清楚な女の子以外のみんなは頭の中に疑問マークを浮かべていると思う。私だって、どうして棗が選ばれたのか分からない。

「なんで俺なんだよ？ 運動部の奴なんてたくさんいるだろ」

「噂に聞いているからかなあー！ 槇野 隼人のライバルで、しかも男バスの次期エースなんじゃないかってえー。槇野 隼人とエースの座を取り合っているんでしょー？ なら大西くんかなあつてえー」

ギャルの女の子が髪の毛をいじりながら言う。毛先を指に絡めてほどく。そんなことを繰り返してから、教室を見ていき運動部の人を見つけては「あんたもね！」なんて言ってる。

「運動部の人なら体力があるから大丈夫ですよーね？ 文化系クラブや帰宅部の人に百メートルや二百メートルを譲ってくれませんか？」

黙っていた清楚な女の子が静かに言った。運動部も最初は明らか

に嫌な表情をしてたけど、諦めて八百メートルを走ることになった。ちなみに私は百メートルになった。二百メートルに入るよう、言われたのだけど他の子が入ったので百メートルになった。

そのあとも二人が仕切つて、あつという間に終わった。暇だから前の席の子と喋ったりして。

「ねえ。そういえば、星野さんって彼氏とかいるの?」

キラキラ輝く目で見られる。彼氏? いるわけないよー。中学に入った途端に付き合う人とか増えたけど、私には縁がない話なのにな。

「いないよ。彼氏なんて出来ないよー」

「え!? 嘘だあ! 星野さんは槇野くんと付き合ってるんじゃないの!?!」

どこからそんな噂が……。大体、どうして隼人なんだろ? 話すこともあるし、会うこともあるけど……。それなら他の女の子にもしてるはず。私より可愛い女の子との噂の方が全然いいよね。否定しよう、この噂。

「違うよ。隼人は友達で、付き合つてるとかないよ。……でも、どうして隼人?」

「そうなんだ。んーとね、槇野くんが女の子に話しかけることなんて滅多にないんだよ。まして、会いにきてくれるなんて……! 羨まし過ぎだよー!」

そうだったんだ? 隼人が話しかけることがない……。それって

苦手ってこと？ でも、私とは話してくれてるし。理由は分からないけど、隼人は隼人でなにかあるんだろう。

「私が隼人と釣り合うはずないし。好きになってくれることすらないよ」

「冗談はだめだよ！ 星野さんは可愛いから、すぐに彼氏なんて出来ちゃうよ」

お世辞だあ……。私は全く可愛くないもん。美咲の方が可愛いし、性格だつてのんびりしていて天然で守りたいって感じがするし。

私は苦笑しながら美咲を見た。変わりもなくボーツとしている。なにしてるのかな？ 考え事でもしてるのかな？ 悩みなんてなさそうなのに。

「ではこの時間は終了とする。体育委員はのこれよ。打ち合わせがあるからな」

「はい。一カ月もないですからね。体育祭まで。忙しくなるのも仕方ないです」

先生と体育委員が話し合っているのを横目で見ながら、みんなと同じように帰る用意をする。今日は部活もないので、割と早く帰れるな……。

チャイムが鳴って、同時に教室を出て行くみんな。教室にいるのは、先生と私と棗……。あれ？ 美咲は！？

「……二人とも、暇か？」

先生がそんなことを言うのはなにかさせる時。雑用係の時だ……。

いや、帰ったあとは暇だから今も暇だけど。美咲め……鞆だけ置いてどこに行った!?

「まあ。今から部活ですから暇……ではないですね」

「それならなおさらだ。部活に行くついでにこれを運んどいてくれないか」

棚から小さい箱と大きな箱を引っ張り出す。小さい箱は軽そうだけど、大きい箱は結構重そう。

先生は「頼んだぞ」と言うと、早足で教室を出て行った。教室が重い空気を漂わせる。とりあえずこれを運ばないといけないのに。

「なあ。これってどこに運べばいいんだ?」

「あ! 聞き忘れた……。なに入ってるの? この箱」

小さい箱を開けてみると、中に入っていたのはなにやらカラフルなペン。その他にも大きく白い、丸まった紙。一体なにに使うと言うのだろう。

大きな箱も開けてみると、釘やら木材やら……重いものばかり。

「体育祭の飾りかなんか? なら文化委員に届けられいいんじゃないの?」

「でも箱に書いてあるよ。グラウンド……に持っていって」

先生、最初からこき使わせる気満々でしたね。

大西は早速箱を持つと早々に歩く。私もあとを追いかけてようとして箱を持ち上げて……気付く。私が持っているのは重い箱。つまり

は大きい箱を持っている。たいして棗は軽い方の箱を持っているのだと。普通、男の子が重い方を持つんじゃないの！？

重いし、箱が大きいから前が見えなくて進めないし……階段とかどうやって進めと？

「重い……。棗はもうグラウンドに運んだのかな……」

重いから、時々おろしてため息をつきながら休憩を挟む。時々ジロジロ見られているのは気のせいじゃない。早く運んで帰ろう。美咲を見つけ出して！

「う、わ……！？」

階段で段を外し、落ちる……！　はずだったけど、腕を掴まれてなんとか助かったみたい……。

私は助けてくれた人の方を向いて、頭を下げた。

「遅いんだよ！　俺が重い方運ぶから、お前は軽い方を運べ」

前を隠していた箱が助けてくれた人の手に軽々とおさまり、代わりに私の手には棗が持つて行ったはずの、小さな箱が……。

前を見ると助けてくれた人であろう棗が背中を向けて階段を下りていた。重いのに、その重さを感じさせない足取り。やはり男の子だし、部活もやっているから力がつくのだろうか？

「待っててくれたの……？」

こんなに軽い箱なら、すぐにグラウンドに行けただろう。なのに私と同じ場所にいたのは……心配してくれたとか、待っててくれたとか私なりの分解をしてもいいのかな？

「本当に私はばかだ……」

不器用ながらの棗の優しさは私にとっては何により薬で、あんなに隼人のことも考えていたのに、すぐに頭の中は棗の色に変わる。隼人のことはやっぱり、友達として好きなんだ。隼人の優しさに甘えていただけだよ……私は。

目頭が熱くなるのを感じながら、グラウンドへ走り出した。棗に「ありがとう」と伝えたい。また顔を見たい。もう、重症なほどに棗が好きで。引き返せないくらい、棗に溺れている私。

「先生！　運んできました」

グラウンドに着いて箱をおろす。棗はいない。部活に行ったのかな。今すぐ会いたいのに。

先生が箱をチェックしてから教室に戻った。鞆を教室に置いていたし、美咲がいるかもしれないと思って。

「ココロ〜！　遅かったねえ〜！　どうしたのかずつと気になっていたんだから〜」

美咲はニヤニヤしながら言う。なにをしてたか知ってるような言い方をするから……棗のことをいついつい話した。美咲は曖昧に相槌を打つと、目をキラキラと輝かせた。

「棗はさっきどこかに行ったよ〜！　多分上の階に行ってると思うけど〜」

上？　隼人になにかあったのかな？　でも二人は喧嘩してるから……会いに行くのは確率低い。まさかとは思うけど、柴崎さん

？ 女バスだからバスケットの話も出来るし、途中まで一緒に行くことも出来る。最近、棗が柴崎さんと一緒にいるの、増えたと思う。……見間違いないんだけど。

「いいよ。やっぱり明日言う。部活の邪魔したら嫌だし」

本当は二人でいるのを見たくないだけ。だけど認めたくなくて、自分の中にこんな感情があるなんて知りたくなくて、綺麗に言った。邪魔になるのは本当。でも、会いたいのに。

上の階を見たあとに、苦笑がもれたのは……気のせいなのか、分からなかった。

不器用な人ってどんな人なんだろう？ と思いました。

恋愛に関しては不器用、というのは奥手なんだ！ なんて考えながら今回の話をまとめてみました。この話に登場する人って、奥手な人が多いよなあ、といまさらながら気付きました。

one sided lover 20 付き合うこと（前書き）

今回は、少し長めになっています。後輩ネタが浮かんでしまつて、予定より長くなりました。

恋愛ではない話かもしれませんが。話し合いみたいな、軽い話です。

体育祭が明日になって、部活も慌ただしい。一年生でも騒いでいて部活はいつもより賑やか。

部活の中で対抗リレーというものがあって、三年の先輩……と二年の全員が出ることになった。三年は強制でだけど、人数が少ないから二年も出て一年は出なくてもいいから、かなり嬉しいと言っていた。

「星野さんー。これあげる」

部活の後輩の男の子がざら用紙を渡してきた。最近よく、話しかけてくる男の子。

ざら用紙を見ると、大仏の絵が描かれていた。しかも、かなり上手い。残念なのは大仏が上手いんだけど……あらゆるところに落書きがかかっているところ。

「返す！　ちゃんと部活に集中しなさい！」

「嫌だー！　それ、あげるって言ったじゃん！」

これもいつものこと。可愛いんだけど、私のことを先輩に見えないと言って、さん付けしている。

背が低くて華奢な男の子で、まるで弟みたいでつつい甘やかせてしまう。

「そういえば、星野さんは知ってる？　あいつの好きな人」

後輩がいきなり後ろを振り返って、ぶつかりそうになる。この子

は背が低いから、ぶつかるとしても私のお腹くらいなんだけど。
それより、あいつの好きな人って？ あいつって誰？

「ほら！ いつも星野さんにちょっかいかけてる、山田だよ！」

山田くん……。部活の後輩。よく話しかけてくれるから、私からも話しかけたりしてる。目が合うと、笑かしてくれたり。
なんで山田くん？ 今、座って友達と話しているけど。

「山田くんの好きな人なんて知ってるわけないじゃん。もしかしてこの部活の中にいるとか？」

「当たり前！ 山田はな、好きな人がこの部活内にいんの！
誰だと思う？」

んー……。山田くんの好み、分からないしな。山田くんからそんな話、聞いたことなかったし。

美咲とか有り得そうだね。可愛いし、よく話してるみたいだし。

「美咲でしょ。山田くんって美咲が好きだったんだ」

「いや違うし！ 山田は星野さんが好きらしいから！」

……。は？ 今なんて？ いや。聞こえてはいたけどもしかしたら私の聞き間違いかもしれない。

山田くんは、星の原が好きなんだ！ そんなと知らないけど、公園とかでありそうだし。

「なあ！ 山田は星野さんが好きなんだよなー！」

「はあ！？　ち、違うし！　星とかは好きだけど！」

山田くんがいつの間にかやってきていて、必死に否定。当たり前だよ。私のことが好きな人なんて聞いたことないし。二年になつてから。私のことを好きになつてくれたら、まず「目大丈夫？」とか聞いちゃうしね……。

「気にしないで下さい！　　星野先輩もこいつを叱って下さいよ！」

「なんでだよ！　　本当のことを言っただけだろ！　　照れてんのかよ、山田くん？」

ああ言えばこう言う……永遠に喧嘩が続くだけじゃん。
私は二人をほつといて、グラウンドを見た。バスケしてる、棗を見るのは久しぶりだ。運動部は秋だよなあ、やっぱり。

「先輩、本当に気にしないで下さい！　　お、おれは好きな人とかいないんで！」

「本気にしてないよー。あの子にも困ったものだよね。あとでちゃんと言っておくから」

山田くんもいい迷惑だな。

ずっとグラウンドを見ていたからか、山田くんはそれ以上にも言わずに去っていった。その行動には感謝。棗のことが好きとか知られたくない。そのことを知ったら、棗はどんな表情をするのだろう……。どんな反応をしてどんな言葉を言うのだろう。

今さら、なんて思うだろうか。

「星野さん！　これ、教えてほしいんですけど」

「あ、うん。これはね……こんな感じで描いたらいいから」

後輩に絵の見本を見せた。それを見た後輩は「ああ、なるほど」と納得したようで、スケッチブックを抱えたまま、本をひたすらに見ていた。

さすがにいつまでもグラウンドを見るわけにはいかないので、私も鉛筆を握り直して人物デッサンを描いた。

「……俺さ、この前聞いたんだけど。あいつって付き合ってるらしいぜ」

「それ本当かよ？　釣り合わねえって」

一年で付き合う人とかいたんだ。早いよなあ、付き合うとか。釣り合うのは、周りから見た目。付き合っている本人たちは気にしてないのかな？　本当に好きなら、周りなど見えない。周りなんて関係ない。

「お前は好きな子のタイプってなに？」

「えー？　そりゃあ可愛くて、自慢できる彼女だろ」

可愛い子が好きとかいうのはみんな同じなんだ……。可愛いから付き合う、そんな人を見たことがある。

好きじゃないけど、顔が好みだから付き合っているんだ、そう言ってた。好きでもないのに付き合えるのかな、普通。

「はあ？　俺は好きな子がタイプだし！　まあ美人とかいたら付き合ってもいいかもな」

美人だから付き合う？　人それぞれだよな……。

棗は美人が好みじゃないって言ってたから、可愛らしい感じの子？　ほんわかしてる、優しげに微笑む子。

私は後輩が盛り上がっているのに悪いと思いながら、美咲に話しかけた。

「そういえば、付き合うとかあるけど……どこからが付き合ってるの？」

発言したら、すぐにその場が静まり返る。なにか変なこと言っている……と思う。付き合ってるのかの話だから。

後輩たちはびっくり顔で「知らないの！？」と言う目を向ける。

「そりゃあ、告白とかしていい返事をもらったら付き合うだろうまあ……両思いなら付き合ってるんじゃない？」

「じゃあ、例えばだけど……。付き合っていないのに、一緒に帰ったり会いに行ったりしたら、どう思う？」

後輩が考え込んでから、おちゃらけた笑いで「付き合うのも時間の問題じゃない？」と言った。

そうかもしれない……。でも、少しでも可能性があるのなら……棗に告白してみようかな。柴崎さんが告白するのは予想が全くつかない。

付き合うのも、時間の問題か……。

「なんでそんなこと聞くの？　あ、星野さんって付き合っ

る？」

「ば、ばか！ 付き合ってるわけない！」

なんで付き合ってるのかと思うの！？ 私、付き合えるわけないし！
そもそもそんな相手いないし！

「星野さん可愛いのにー！ 俺と付き合ってみる？」

「ばかだ。でも、付き合わないの？ 同級生とかと」

部活の後輩たち、みんな誰も付き合ってないらしく、よく「彼女ほしいなー」なんて言っている。

なら、付き合えばいいのに。ノリで付き合ったりすることもあるだろうし。全く告白されないわけでもないと思う。明るい性格だし、よく暴れ回っているから、少しは告白されるだろう。

「誰でもいいってわけじゃないけどなー。好きな子じゃないと、本気で付き合えないからさ」

「そっか。告白とかされたり、したりするでしょ？」

後輩くんはケラケラ笑うと、隣にいる山田くんを見た。山田くんは気まずそうに目を逸す。

後輩は笑い終わるとお腹が痛いといっているのか、お腹を抱えている。

「告白なんてしたことないし！ されたのは小学五年か、小学四年の時」

「つい最近だねー。どんな告白された？　呼び出しとかされた？」

するとまた、後輩はケラケラ笑う。面白くて仕方ないみたい。山田くんも知っているのか、少し口元を手で隠して、密かに笑っていた。

「あ、あれはうけた！　机に手紙が入って……友達に聞いたらラブレター、とか！」

「そこならまだいいけどなあ！　差出人があいつだからな、面白かった！」

山田くんも声が震えているから、笑いをこらえているんだろうな。ラブレターをもらったという、後輩も大笑いしてるし。どんだけ笑ってるの。

差出人の女の子だって、こんなに面白がられたら嫌なんじゃないの？　勇気を出して机の中に入れたのに。私がその女の子だったら、きつと傷付く。告白したのに、笑われるなんて。

「そんなに笑ったら失礼だよ！　女の子だって、恥ずかしく思いながら書いたかもしれないのに！」

後輩と山田くんを叱ると、固まっていたけどすぐにまた笑い出した。怒りそうになるのをおさえ、出来るだけ笑顔を作りながら問い掛けた。

「なんでそんなに笑うの？　なにがそんなに面白いの？」

聞いても、ずっと笑ったまま。なんで笑えるのか、不思議。必死

で、自分に想いを伝えてくれたのに。自分を好きになってくれた人なのに。感謝とか、しないのかな。

この様子だと、間違なく、女の子を振ったと思う。たとえ振られたとしても、泣きたいくらい辛くても、好きな人に「ありがとう」と言われたら、この人を好きになつて良かったと思うんじゃないか。本当に、大好きだと……思えるんじゃないか、勝手にそう思える。

「俺に告つたのは、あいつだよ！」

後輩が指をさした。え……部活内にいたの！？　で、でも……そんな素振りなかったはずだけど！？

指の方向には、一年の女の子。長い艶のある髪に、きつちりと着た制服。まいてないスカートに、いつも笑顔を浮かべている顔。確か、障害があるって聞いている。ノートに好きなアニメの絵をずっと描いてる、女の子。可愛いのかは……微妙です。

「あいつに告られたから、すぐに振ったし！　顔からしてアウトだから！」

顔が好みじゃないから？　確かにあの子は、可愛いとはいえないけど、この後輩が好きなのは薄々気付いてた。いつも傍に行こうと近寄つて、この後輩が来ない時は「あいつ、来ないのか？」なんて呟いている。後輩はその気持ちすら、否定してる。ただ、好きでその想いを必死に伝えようとしてるだけなのに。「私は今も、好きなんだ」、そう伝えたいだけなのに。

「いいじゃん、付き合えば。似合ってるよ」

「悪い冗談やめてくれよ！　絶対嫌だから！　それに、俺は星野さんがいいかなー。ね、本気で俺と付き合わない？」

「からかうのはやめてね！　それと先輩だから。さん付けやめてよー」

なんで私に付き合つとか言えるのだろう。やっぱり誰でもいいんだなあ、きつと。

後輩はニンマリと笑つと、低い声で、私の名を呼んだ。

「ココロ先輩。これから先輩って言ったら、付き合つてくれますか？」

「は、あ？　なに言ってるか分かんない！　からかう暇があるなら、絵も描いたら！」

いきなり、名前を呼ぶから。不意にも、少し恥ずかしくなった。後輩であろうと、男の子。男の子に名前を呼ばれるなんて、久しぶりだから……。

でも、彼はチャラチャラした人だから。こんなふうに女の子を口説くんだらう。好きな人には、特に。

「星野さん！　じゃあ、どんな人が好み？」

「えつとね、かつこよくて優しくて背が高くて頭良くて運動出来る人！」

はい？　今、誰が言ったの？

後ろを振り返ると、同級生の子がニコニコしながらうつとりと語る。

後輩は突っ込んでいるから、その隙に離れた。あのまま、からかわれていたら、なんて言ったらやめてくれるか分からないから。同

級生には、感謝です。

「お疲れ様〜！ 後輩くんも頑張るよねえ〜」

「なにが？」

美咲の元に戻ると、満面の笑みで言われた。美咲は「あらあら〜」と大袈裟に驚いてみせると、こっそり耳打ちしてくれた。

「後輩くんね、ココロが元気ないから元気づけようとしてたんだよ〜！ だから、からかったように言ってたけど、あれが後輩くんナリの優しさだからね〜」

元気が、なかった？ そんなこと、ないはず。いつも通りに笑って、いつも以上に楽しんでる姿を見せていた、のに。柴崎さんのことを考えて、表情に出ていたのかな……。

心配してくれる、そんな人がいる……。またあとで、お礼を言う。今は、このままでいたいから……。……。

次回は体育祭の様子を書けたらなあ、と思います。体育祭といったら団結力！ クラスが熱くなる話を書きたいですが、鉢巻きもいいなあー、色どししようかな、なんて関係ないところで悩んでいます。

one sided love 21 交換（前書き）

体育祭のことを書けました！ ですが、今回はふたつの恋物語を書いていきます。これでもしかしたら、話は予想出来るのではないでしょうが。

ついに、今日が体育祭。朝からずつとお祭騒ぎ。楽しいとは思っけど、その……緊張とかしないのかな……。たくさんの人に見られると思うと震えがとまらないよ……。

「ココロは緊張し過ぎだよ！　ほら、みんなを石だと思えば大丈夫だよ！」

肩を押してくれたのは……真琴。二年になってからそんなに話したりしなくなつた。お互い、違うクラスなのもあつたけど、真琴は私がいなくても、大丈夫だから。

新しい友達や、信頼出来る人がすぐに出来ると思えたから。その証拠に、真琴はすぐ変わった。見た目とかじゃなくて……性格が明るくなった。雰囲気も前よりはずっと良い。新しいクラスで上手くやってるんだろう。真琴は自分でちゃんと、変わってる。私も変わりたいけれど……。

「い、石！？　無理だよ！　動いてる石なんかないし……」

「問題そこ！？」

久しぶりに、真琴と話して一緒に笑えた。本当に変わった……。

私は……真琴の役に立てたかなあ……？

真琴は優しく笑うと「ココロは変わったよね」と言った。

私……変わってないよ……？

「なんていうか、明るくなったよ、ココロ。今が楽しくて仕方ないって表情してる」

「真琴も……変わったね。生き生きしてるよ。本当に……良かった……」

私は変わってないけど、真琴が生き返った表情をするから……安心したよ。前と同じく、一人で悩んで、一人で泣くことはないよね？ もう、苦しむことはないよね？ 真琴は……作り笑いをしなくてすむよね？

「今は大丈夫だよ。まだ女の子は怖いけど……今のクラスはい人ばかりだから。精神的にも助かっているよ」

嘘を言ってるようにも見えなくて、私は真琴にただ、なにも出来なかった。それでも、一緒に笑ってあげたりしたら、真琴は救われるんじゃないかって思うよ。そんな必要、ないかもしれないけど、一緒に笑ってあげたいんだ。

「うん。そろそろ、クラス席に座った方がいいよ。友達、待ってると思うし」

「ありがとう。今は体育祭だから、ライバルだよ。負けないよ、私」

今はライバルだけど、体育祭が終わったら、みんなは普通に友達に戻る。ライバル関係になるのは、この時くらいだ。美咲とは仲間だから、ライバル意識する必要はないんだけど、隼人や真琴、柴崎さんはライバルなんだ……。棗とは、同じ仲間。それだけで嬉しいと思うのは、好きだから？ 一緒にいたいと思っっているから？

中途半端な気持ちはどこに向かうんだろう？

「こつちだつて、負けないからね？」

真琴は頷いたあとにクラス席に向かつて行つた。

間も無く先生がやってきて、手には鉢巻きが握られている。赤色の、情熱的な鉢巻き。他のクラスも、緑色や白色の鉢巻き、水色などもあつた。

鉢巻きが配られてつけようとしたら、裏になにかが書いてある。

自分の……出席番号。それと、イニシャル……。

緊張もあるけど、それ以上に、嬉しい。私はこのクラスの一員なんだつて、改めて思えた。みんなに迷惑をかけないように、頑張らなくちゃ！

「みんな！ 本気出してよ！ 絶対に優勝するから！」

「当たり前だ！ 優勝出来るつて、必ず」

目指すは、優勝ー！。

それからすぐにプログラムの順番で、三年のなにかリレー。そのあとに二年の騎馬戦だから、入場門に集合する。チラチラ見えるけど、六色の鉢巻きつて綺麗。赤色でもいいと思ったのは本当だけど……白色とかでも可愛いな……。

「星野さん！ 気合い入ってるね！」

いきなり声をかけられて、ビクリと肩が跳ねた。誰か分かるけど……不意打ちだよ。私を驚かせるために、背後から声をかけるなんて。

「隼人！ 驚くから、驚かせないで。あ……隼人は、白色の鉢巻きなんだ」

「ごめん、そんなにびっくりするとは思わなかったから。鉢巻き、似合う？」

ひよっこりと私より高い隼人が隣に並んだ。それだけで……緊張するのは、体育祭のこともあるからだよね……。

緊張してるのを知られたくなくて、目を合わさずに鉢巻きの話題を出した。似合うに……決まってる。前をみる、横顔だけでこんなにかっこいいのに。周りの女の子、隼人を見てるのに。気付いているのかな？

「似合うよ。隼人はなんでも似合うから、羨ましいな」

「ありがとう。星野さんも赤い鉢巻き、似合ってるよ。可愛い、可愛い」

隼人は、お世辞が得意。女の子を喜ばせることばかり言う。

私は笑顔を作って、隼人に笑いかけた。そうでもしなくちゃ、隼人にドキドキする自分がいるから。

「隼人はお世辞が上手いよね。本当に紳士だなあ」

なんとなく、空気にたえられなくなっただけ。それなのに、隼人は足をとめて、私のことを真顔で見る。見つめられただけでも苦しいのに……そんな真剣な表情で見ないで。隼人のこと、好きになるー……。……。

「お世辞なんかじゃないよ。本当に、星野さんは可愛い。星野さんに惚れそうだからね、僕」

最後の方はニコリと笑ったから冗談なんだろうけど、真剣な表情で「可愛い」なんて言われて、嬉しくない女の子なんていないよ。隼人は、いつも心を揺さぶる。友達なのに、それ以外の想いがある。それさほどに……。

「そ、その……私、行くね！　友達が先に行つてて、遅れたらいろいろ言われるから」

「そつかあ。残念だけど、しょうがないことだもんね。お互い、頑張ろうね」

今は隼人から逃れなくて……逃げた。怖いんだ、私。棗以外に、誰かを好きになること。それが隼人だなんて、考えたくない。隼人には好きな人がいて、棗も言わなかったけど、好きな人がいる。二人のうち、どっちかを好きになるんだったら、私はどっちも選べない。どっちを好きになっても、辛い恋だつて分かつてるから……。私に振り向いてくれないのなんて……目に見えてる。

隼人はもてるから、今だって女の子に話しかけられているみたいだし。隼人のことを好きになる前に、棗をもっと好きにならなくちゃいけないのに。どうして……揺れてしまつんだらう……。

「ココロ！　もうすぐ騎馬戦だけど大丈夫？　ぼんやりし過ぎ」

美咲と合流したあと、すぐに言われた。三年のなんとかリレーも終盤だから、私たちの出番も近付く。だからかな、みんな気合い入ってる。棗も、なんだか熱血男子化してる。

私は深呼吸をして、笑顔で美咲に言った。「大丈夫だよ」って。

騎馬戦が終わって、出番はまだだから、水を飲みに行った。喉がかわいて、上手く話せない。時間だつて、まだまだあるから。

「かつこよかったじゃん、棗！　さすがバスケのエースだよね！」

「それいうなら、柴崎も凜々しかったぜ？　女バスのエースだもんな、お前は」

近くで声がして足をとめた。聞き間違いだよね？　二人が、いるわけない……。クラス席にいるはずだもん。でも……棗は座ってた？　分からないよ、棗……。

「それに、柴崎に見とれてる奴もいたよ。お前って、おとなしくしとけば美人だけどさ」

「なによ？　おとなしくって！　棗こそ、そんなこと言つてさあ、私に見とれたりしたんじゃないの？」

間違ない……二人だ。二人だけで、しかもこんな人がいないところ……なんているのかな。なんで会つてるの？　いけないと分かっている、二人の会話が気になって、その場で耳をすませた。

「どうだろ？　見とれてたかな？　分かんないや」

「な、棗……。お願いが、あるんだけど」

柴崎さんの顔は見えないけど、きつと俯いているんだろうな。声が、ひどく照れた声だった。私に向ける声とは違う、好きな人に向ける声だ。

それだけで耳を塞ぎたいのに、塞がないのは、二人が気になるからだ。こんな会話を聞いて、傷付くことくらい、分かっているのに。

「なんだよ、そんなに改まって？　変なことはきかないからな」

「棗の……鉢巻き、欲しい……。私のと、交換しよう……？」

鉢巻きの交換？　それは特別な意味があるんじゃないかな？　柴崎さんはそれを知って、積極的になる。棗は……なんて言うの？　知っているの？　鉢巻きの交換の意味……。お願い、断って……。

「鉢巻き？　全然いいよ、そんなの。今は体育祭だから渡せないけど、体育祭が終わったらやるよ」

「ありがとう！　棗のこと、本当に……。あ、私の鉢巻きもあげるけど、大事にしてよ？」

もう、聞いていらなかった。ばかだ……。私……。聞かなきゃ、よかった……。水なんて、飲みに行かなくてよかった……。どうして、私はいつもこんな想いをするのかなあ……？

クラス席に戻って、話しかけられたりしても、曖昧に笑って受け流すことしか出来なかった。棗が少し距離をおいて柴崎さんと、別々に戻ってきた時は、辛かった。みんなに気付かれないように、柴崎さんとさつきみたいに会って。私が入る隙なんてないよ……。

「ココロ！　次、出るんでしょ？　一緒に行こう？」

「あ、うん……。忘れてたよ！」

無理して笑う。棗がこんなに私の中に入っていたなんて……信じられない。

柴崎さんが前に言った言葉、今なら分かるかも。棗は、きっと私を選ばない。柴崎さんの方にいくんだろう。そして、付き合ったりする。私はそれを、喜べるかな……？

あつという間に体育祭は終わって、閉会式が終わり、帰る途中のこと。

隼人に、呼ばれた。しかも、裏門。わざわざ人のいないところに呼ばれるなんて。なにかした？

「体育祭、お疲れ様。んとね、単刀直入に言うよ？　僕、星野さんの鉢巻き、欲しいんだよね」

「は、い……？」

鉢巻きが欲しい？　それはいいけど、その意味は……。ち、違う！　隼人が私のことをそんなふうに思うはずないし！

「あ、迷惑だったらいいよ。僕が一方的に欲しただけだから」

「迷惑なんかじゃない。隼人になら……あげてもいいから」

鞆から赤色の鉢巻きを取り出して渡した。受け取ってくれた隼人は幸せそうに笑って、手に持っていた白い鉢巻きを私にくれた。

「星野さんのと交換。嬉しいなあ。去年したかったけど、クラス同じだったし、同じ色の鉢巻きだったからさ」

柴崎さんも……棗と同じことをした。二人も今頃、鉢巻きを交換してるのかな？ 涙が……あふれる。

「ほ、星野さん！？ どうしたの？ なにか嫌なこと言っ
た！？」

返事も出来ずに、ただ俯いて涙を流した。呆れたかな、思っ
たら抱き締められていて……私は隼人の腕の中で優しさに甘えて、
ずっと泣いていた。

これで今年の更新は最後になります。来年からも、蜜柑色を頑張
って完結出来るように努力致しますので、これからどうなるのかを
楽しんでいただけたら幸いです。

one sided love 22 過去の人(前書き)

遅れましたが、明けましておめでとございます 年が明け
てから初更新になります。

冬は風邪がひきやすい季節です。皆さんも気をつけて下さいね。

体育祭が終わって、すぐに冬が来た。隼人の腕の中で泣いた時は分からなかったけど、隼人は泣きやむまで傍にいてくれた。友達と一緒に帰る約束をしたのに、友達の約束を断って、わざわざ家までおくってくれた。

もう、私は大丈夫。棗のことは大好きだよ。でも、悲観的にみないようにする。まだ、誰のものでもない棗。だから私、諦めない。棗が誰かのものになるまで、ずっと……。

「寒いよね！ ああ……手袋してくればよかった」

「ほんとだね。いいじゃん、彼氏に貸してもらえば」

通学路で、騒ぎ合っている女の子を素通りしながら、学校へ向かう。寒いもある。でも、学校に早く着いてておきたい。それは前から変わってない。

学校の中は外と比べてまだ温もりがある。暖房がついているのもあるだろう。

「おはよ。星野」

「おはよう棗。最近、寒くなったね」

何気ない会話をかわしておく。棗と気まづくなるのは嫌。目が合っただけで嬉しい私に、話なんて出来なら……夢心地。

浮かれながら鞆をなおして、ウキウキと上の階へ行く。棗がいるということ、今日は朝練がないんだ。それなら隼人もいるはず。

上について隼人の教室に行って、中を見渡す。後ろの方の席でな

にかをしている男の子がいる。背が高い細身な人。
教室に入ってその人に話しかけた。

「おはよう隼人！ なにしてるの？」

「あ、おはよう星野さん。これはね、バスケノートだよ」

隼人が書くのをやめてきちんと挨拶してくれて笑いかけた。
このノートはバスケノート？ 聞いたことがない名前。棗でもそんな話とかは出さなかったのにな。
バスケノートって……なに？

「バスケノートってなに？」

「部活で使ってるノートなんだけど、試合とかで先輩たちのプレーをメモしたり、感想を書いたり、今日はなんの練習をしたとか、そんなことを書くノートだよ」

すごい……。バスケ部ってそんなノートあるんだ。棗が書いてるの、見たことないよ。家とかで書いているのかな？ 隼人は学校で書いてるみたいだけど。

バスケノートというものを覗いてみた。ノートにはびっしり文字が詰まっていた。隼人の規則正しい文字があって、隼人が書いたのはすぐに分かる。でも、量がすごい。作文みたいに文字が並んであって、どんだけ試合を真剣に見ているんだとか、ちゃんと思ったことを書いているんだとか……ノートにあらわれている。見えないところで、努力してる人。隼人が棗と同じく、バスケ部のエースと呼ばれるのは……ちゃんと努力してるからなんだね。

「隼人は、頑張り屋さんだね。だからバスケが上手いんだ」

「こんなの、頑張ってるうちに入らないよ。プロの選手は、比べられないくらい、努力してる。僕はもっと上手く、ならなくちゃ」

思い詰めた様子で、言う隼人。なにかあったのかな。こんなにこだわる隼人は初めて。そんなにバスケが好きなのかな？ 選手と比べるのは、夢だから？ 隼人に、誰かと比べてほしくないよ。

「隼人は頑張ってるよ！ いつも、みんなの知らない時に努力してる。隼人……誰かと比べないで……。自分らしく、隼人らしく、頑張っていけばいいと思うの」

隼人が見たことない、真剣な表情で私を見た。決意した目。色付いた頬。

色つばい隼人と目が合わせられなくて、そつぽ向いた。今、その表情は反則だよ……。頑張ってる隼人を見たあとに、真面目な表情をしないで。ドキドキする……。

「ありがとう。星野さんは本当に優しいよ。僕のこと、そんなふうに言ってくれる人、今までいなかったよ」

ポツリと最後に呟いた言葉は今にも消えそうなほど、儚くて。隼人にもいろいろあったんだ。

今までのことで、なにかあったのかな。隼人を認めてくれる人……いなかったの？ どうして……そんな悲しい表情をするの。やめて、いつもと同じ笑顔を見せて……。

「星野さん、そんなに泣きそうな表情しないで。僕はそんな表情をしてほしいわけじゃないよ」

「は、隼人……。辛いことでも、あるの？ 私より、隼人の方が泣きそうだよ！」

隼人の方が私より辛そうで、泣きそうで……。こんなに儂い隼人を見たのは初めてだよ。だから心配なんだよ。一人でなにか背負ってるんじゃないかなって。

私よりも、優しい人。ずっと笑いかけてくれる人。だから私が……隼人に優しくして、笑いかけてあげられたら。

「いいよ。君だけになら教えてあげる。女の子に話したのは、星野さんが初めてだからね」

そう言って笑う隼人はいつもより寂しい表情。心細くて、隼人に安心感を与えたくて、ただ隼人の手に触れた。前に、手を繋いだ時にただ優しく包んでくれた人。私が今度は、繋いで、包むよー！。

「僕ね、気になってた女の子がずっと前にいたんだ。その子といると、楽しくて、毎日輝いてた。その子も、僕に好意を寄せてくれてね、僕たちは付き合うことになった」

幸せな表情を浮かべながら話す隼人。二人は両思いだったわけか。付き合うまでいったら、幸せなんだろうな。私は付き合ったこともないし。好きな人と付き合えて、嬉しくて仕方ないのかな。

「でもね、その子は、自慢したかったみたい。みんなに羨ましがられただけで、特別僕のことを想ってなかった。僕と別れたあと、すぐに付き合ってたよ。他校のモデル風イケメンとね」

その子は……隼人が好きじゃないのに、付き合ってたの？ 隼人の気持ちを知ってて？ 利用して？

隼人はかつこいいし、優しいから、自慢出来るよ。ただ……自慢したいがために？ そんなの、あんまりだ。

「まあ、しょうがないんだけど。僕が一方的に好きなだけだったから。その子に言われたよ。隼人よりも、いい人が出来たから、別れたって。隼人は努力が足りないってね」

ひどいよ……。隼人は好きでいたのに、その気持ちを利用するなんて。隼人の努力、知ってたの？ どうして、隼人の頑張りを否定するの？ 結局は顔だったの？

隼人は優しいから、受け入れたんだ。責めたり、冷たくしない。こんなに優しい人に想われていたのに。

「だから、学んだよ。自分の思いだけを押しつけちゃ、だめだよね。その子は転校したけど、今も変わらずにいることを願ってるよ。僕が好きになったのは、ありのままの自由な姿だから」

「隼人は優しくすぎるよ……。隼人には幸せになってもらいたい……それに、隼人はすごく努力してる！ 私は、否定しない！」

隼人に元気をあげられるなら、なんでも出来るよ。そんな、作り笑いしないで。私は、隼人の努力、認めるよ。否定しない。

隼人はクスクス笑うと、手を強く繋いだ。それだけで、安心するのは、どうしてかな？

「今は幸せだよ。新たに好きな人もいるしね。今の好きな人は……本当に好き。いつも支えられてるよ。これまでにないくらい、僕は本気。本気の恋ってこういうものなのかな」

好きな人か……。隼人を幸せに、過去なんて忘れられるくらい、

傍にいてくれたら。隼人のことを見てくれる人、たくさんいるけど、それは顔目当て？　みんなに羨ましがりたいから？　隼人にそんなふうに想って、好きだなんて言うのは……やめてほしい。今度こそ、隼人は好きな人と幸せになってほしいよ。

「隼人のこと、ちゃんと見てくれる人？　幸せにしてくれる人？」

「うん。すごい見てくれる人だよ。傍にいてくれるだけで、話してくれるだけで、幸せだよ」

隼人にそこまで想われてる女の子が羨ましいな。私はそんなふうには、想われたことないよ。告白されたことだつてあるけど、それは全部、数ヶ月したら終わる。すぐに私のことを好きじゃなくなる。すぐに他の人を好きになる。だから、男の子と付き合えずにいたのに。

「そつか。きつと隼人なら、大丈夫だよ。上手くいくよ」

「うーん、そこまで上手くいってないよ。その女の子は、違う人を想っているからね」

そういえば、前にも同じことを言つてた。隼人……大丈夫。隼人が告白したら、すぐにいい返事がもらえるよ。でも、隼人はそれが欲しいわけじゃなくて、女の子の心が欲しいんだね。

私は立ち上がって、隼人を廊下まで引つ張る。隼人はポカンとしたまま、されるがままだ。

「隼人、見てよ！　みんなね、隼人が好きなんだよ！　だから隼人は隼人らしく、そのままがいいと思う。じゃなきゃ、隼人

の靴箱に恋文ラブレターなんておかないよ」

廊下にある、隼人の靴箱には、六、七枚くらいの恋文があった。朝早くに来て、隼人に想いを寄せる女の子の誰かが、おいていったものだろう。

隼人はその恋文を見て、驚くと、恋文を一枚一枚目を通していく。時々、優しく困ったように笑いながら見ていた。

「ありがとう。僕、頑張るよ。必死に想いを伝えている人もたくさんいるし、僕も負けてられないね」

隼人が元通りになったのでホッとしつつ、教室に戻った。教室にはまだ棗しかいない様子。棗は静かに本を読んでいる。バスケノートとか、しなくていいのかな。隼人はあんなに頑張っているのに……。

「星野は隼人が好きなのわけ？」

本を閉じて、いきなりそんなことを言う。なんでそんなこと？ 私が好きなのは……棗なのに。

棗はなにも言わない私に痺れを切らしたみたいで、顎で上の階を指した。

「いつも隼人に会いに行ってるもんね。そんなに好きなら付き合えば？ 隼人もいい返事くれるだろ。特定の彼女、いないみたいだし」

嘘……。なんで友達のこと、そんなふうに言えるの？ ライバルだって、あんなに楽しそうに笑っていたのに？

私は棗を睨み付けて、一言言った。

「隼人はそんなに軽くない！」

そのまま教室を飛び出した。棗が分からない……分からないよ。なんでそんなふうに思えるの？ どうして二人の関係は変わってしまったのかな……。私はただ、二人が前みたいに無邪気に笑ってほしくて……。

棗を変えたのは誰？ 私？ 隼人？ 柴崎さん……？

ごめんね、棗……。私……。君が分からない。君が私を想う確率なんて、無理に近いんじゃないかって。君は、誰が好きですか……？

もう、手を伸ばしても届かないのかなあ……。？ 君が私から離れていく気がするよ。誰かのものになる……。気がするよー！。

雑談ですが、学園ものを書いていたら、先輩と後輩の話が書きたくなりました！ 淡くて、切ない感じの……。ほのぼのさは「あなただけに」のような似た話かなあ、なんて勝手に想像しています。公開するのも、何年かあとになりそうです。

棗の出番、少ないです。ヒーローなのに、空気扱いになってます。今回の話でやっと蜜柑色が出てきます。蜜柑色ってこんな色だったよなあ……なんて考えながら書きました。

気まづくなつて教室に戻れなかった。棗がなんであんなことを言つたのか分からなくて……どうやって話せばいいんだろう。

頭が冷えていくのを感じて、いったん教室に戻った。棗はただ本を見てて私のことなんて無視してる。それはそれでいいんだけどね！

「棗ー！　　おはよう！　　会いたかった！」

「柴崎！？　　やめろつて！　　抱きつくなよ！」

柴崎さんが来たかと思つたら、堂々と教室に入ってきて、棗のお腹に手を回している。棗は嫌がる素振りを見せてるけど、顔を真っ赤にして、すごく喜んで照れているじゃん！　　なに、私たちはこんな関係なんです、アピールですか？　　やめてよ、人前でイチャイチャするの！

「お取り込み中悪いんだけど、教室でイチャイチャするの、やめてくれないかな？　　しかも人前で。イチャイチャしたいなら外でして下さいー」

私の言葉に柴崎さんはニヤリと満足顔で思いつきり棗の腕の中に飛び込んだ。棗の背中に手を添えて、棗のブレザーに頬を寄せる。棗も棗で柴崎さんの背中を優しく擦っている。だから……イチャイチャするんだつたら、外でしろつて言つたのに。

「なんで？　　星野さんだつて随分イチャイチャしてるじゃない。いつも朝早くに来て、隼人とラブラブなの、見たんだから！」

隼人？　ラブラブってなにが？　特別なことはしてないよ？
そりゃあ、手を繋ぐときとかはあるけど、ただ普通に話してる
だけなのに。

柴崎さんは棗の腕の中から顔を覗かせて笑った。

「とぼけないでよ。星野さんから隼人に抱きついて、そのあと、
隼人も星野さんに手を回して。抱き合ってたわよね。ああ、体育祭
のときも鉢巻き交換してたし。おまけに隼人の腕の中で泣いてたじ
ゃん。よっぽど嬉しかったんでしょ？」

「し、柴崎さん！？　な……なんでそれを？」

嘘……。見られてたの！？　その話は、棗の前でしないで！
誤解しないで、棗！　私は隼人とどうにもなっていないよ！
抱き合つたのはいろいろあったからで……。棗以外に好きな人なん
て……いないよ！

「良かったよな、星野。隼人に告白して、付き合えば？　そ
んなんじゃ、隼人ファンがイライラするだろうし、早くくっつけよ」

「おめでとう、星野さん。羨ましい、隼人と付き合えるなんて
手は出さないから安心してよ？　あんなに想いあつてるカップル
初めて」

なんで……そんなこと言うの！？　柴崎さんは私の気持ち、知
ってるのに！　隼人とはそんな関係じゃないの、知ってるくせに
！　棗も棗だよ！　なんでそんなに隼人とくっつけようとする
の！？　私の想い……全く届いてなかった？　私の態度がはっ
きりしてないから？　言葉に出してないから？

「こんなふうに、隼人と抱き合っていたよね？　ねえー、棗」

「……ん、柴崎」

棗がいったん柴崎さんの手を解いて向かい合わせになる。顔の距離が近い……。やめて、そんなに近寄らないでよ……。棗も、柴崎さんを拒んでよ！

棗はゆっくり柴崎さんを抱き寄せ、柴崎さんの肩に顔を埋めた。柴崎さんも嫌がる気配なんてなくて、目を閉じて全身全霊で棗の存在を確かめてる。

目の前でこんなこと……しないで！

「やめて！　もうやめてよ！　私に言いたいことあるなら言えればいいじゃん！　なに、こんなことして？　敗北感でも与えたいの！？　私がどんな表情するのか見たいの！？」

すると柴崎さんは元々きつめの目をさらに険しくして、棗から離れると、キツと私を睨んで今にも頬をはたかれるんじゃないかなって思った。

棗は気を使ったのか、静かに教室を出て行く。棗が教室から出て扉がしまると柴崎さんは棗には見せない、怒りに狂った表情をした。

「こんなことってなに？　ただ、抱き合っただけよ。それに、星野さんには隼人がいるからいいよね？」

顔は笑っているのに目は笑ってない。……ううん、顔も笑ってない。笑顔を作っているもん。口調は怒ってるのに感じなかったけど、声がとても低い。それだけで怒っているのか分かる。

でも、なんで柴崎さんが怒るの？　私の方が怒りでおかしくなるよ！

「なんで柴崎さんが怒るの!? 柴崎さんは怒る理由がないじゃない!」

「そう? 怒ってないけど。ただ、星野さんのことは好きになれないなっと思ってただけ。だって、フラフラしてて、棗と隼人で迷って……挙句の果てにみんなを傷付ける。なら、私が棗を幸せにしてあげた方がよっぽどいいわよね」

なに、言つて……。みんなを傷付ける? 棗を幸せにする? 柴崎さんはなにを知ってるの? なんでそんな自信満々な目で見えるの? やめて、棗は私が幸せにするんだから……! 私は棗以外で幸せになんかなれないし、なるつもりもない。だから、棗は私と――。

「あ、ついでにいいこと教えてあげる。星野さんがフラフラしてるから、棗に告白しようと思ってる。まあ、決めるのは棗だけど、星野さんにも知ってもらいたくて」

告白……? 柴崎さんが棗に? そんな……待つて! 告白しないで! 棗が柴崎さんに告白されたら……! 私はなにも出来ないままだよ。

柴崎さんは私の動揺を面白がってさらに追い討ちをかける。

「決心が鈍らないうちに、伝えようと思ってるんだよね。今すぐにも言いたい。計画してて、明日には伝えるけどね」

柴崎さんはなにがしたいの? わざわざ、そんな報告いらないよ……。どうせなら、私が知らない間に、告白してほしい。

柴崎さんが自分の腕を静かに撫でる。愛しく思っている目だ。

「たとえば、振られてもいい。また、友達関係に戻ってもいい。棗に抱きしめられた温もりを覚えておければ、それでいいの。願わくばね、友達でも、振られても、棗の傍にいられたらって」

柴崎さんは本当に棗が好きなのかな？ 私より、何倍も綺麗で美人でスタイル良くて……本当にお似合い。もし、棗が柴崎さんの想いを受け止めたら……二人でいる時間も長くなるのかな？ 校内で一緒にいるのを見たりする？ ……朝、棗と話せる唯一のこの時間、もう……なくなるの？

「私ね、棗のことは諦めないから。最初は遊びだったけど、今は違う。本気で棗が好きなの。もう、棗以外考えられない」

「……うん。ごめんね、私、自分のことばかり考えてた。もう少しで、棗の気持ちなんて考えずに私の想いを押し付けるところだったよ」

あのまま、私は棗に伝えていたら……押し付けていたに違いない。ばかすぎて……たえられないよ。柴崎さんの方が棗を幸せに出来るよね。

棗が柴崎さんを選ばなかったら……その時は、私の想いを棗に伝える。棗が柴崎さんを選んだら……分からない。今は全く考えられないよ。

「なに？ 感謝でもしてくれてるの？ 私はこれから棗に告白するのに。棗はあんたを選ばないかもしれないのに？」

「そう、だけど……。正直、嫉妬はしてるよ。不安だってある。私も棗が好きなのにつて。でもね、今はまだ棗は誰のものでもない

から、なにも考えずにいられる。だから、あんまり悲觀的にしてないよ」

棗が柴崎さんと付き合ったら、少しは気持ちが変わるかもしれないけど。私は付き合うつてことがどんなことか分からないから……安心出来るのかも。

柴崎さんは怪しくニヤリと口元を上げて私をジロジロと見るとなにが面白いのか、声を上げて笑った。なんでいきなり笑ってるんだろ……。しかも、この人の笑い方って独特で癖があるから、耳が痛いんだよね……。

「本当に、面白い！　これは惹かれるのもなんとなく分かる気がするわあ」

「……？」

なにが面白いの？　ひかれるってなにが？　柴崎さんの言葉はなんだか分からないことばかり。

白い目で見ていた私の視線に気付いた柴崎さんは、笑いを必死にこらえながら口を震わせながら開いた。

「隼人の気持ちがやっと分かった。良かったね、星野さん。棗に振られたら隼人がいるし」

「なんで隼人なの？　友達だよ、友達」

私が言った言葉に相当驚いた柴崎さんはしばらくボーンとしていたけど、意識をはっきりさせるやいなや、私に突っ掛かってきた。なんでこんなに言われなさいいけないの、私。

「なに言ってるの！？ 隼人は星野さんが好きだからじゃない！」

「それは、なに。隼人は私じゃなくて、好きな人がいるんだよ。可愛い、一目ぼれするほどの子が」

柴崎さんは呆れた表情を私に向けて、最大のため息をついた。なんでそんな表情をされなきゃいけないんだろう。

私は柴崎さんの様子を無視して廊下に目をやった。棗はいないみたいで、人影ひとつもなかった。

「隼人も大変ね……。鈍感な人に惚れると」

柴崎さんの、小さな小さな呟きを、聞こえないふりをした。

学校から帰って、すぐにこたつに入った。ああ……。温まるなあ！ 鞆を部屋に置いて机の上に置いてある、青紫の素麺でもいれられるであろう皿に目を向けた。中には輝きを放つ、たくさんの蜜柑が入っている。夕日の色によく似たそれは、見ただけでも美味しそう。こんな色を蜜柑色と言うのかな。蜜柑の色で蜜柑色、なんてそのままだ。

「うわ……。甘い」

皮を剥いて食べると、甘い。匂いもほのかにするし、これは高くないのか、とかどうでもいいことが気になった。

その甘さが気に入って、口に運ぶスピードも気付かぬうちに上がっていた。甘すぎる、と思うほど甘いんだもん。甘いのが苦手な人はこの蜜柑、食べられないんじゃないの？

「ん……酸っぱい？」

甘いはずなのに、いつの間にか甘さよりも酸っぱさの方が勝っていて。口に運ぼうとした残りの蜜柑をギリギリのところだとめる。なに、この酸っぱさ！ 甘いのはどこにいった！
甘みは酸っぱい中で微かにしてて、酸っぱさと甘みがたたかっている。

「……あいつに似てる」

蜜柑の味はあいつを思い出させた。甘いのに、酸っぱい。酸っぱいけど、なんだかまだまだ甘くなりそうで。あの人も、そんな人。甘いはずなのに、距離がある。距離があるのに、甘くて優しい。手に届く人なのに……届かない。

「棗は蜜柑色……？」

夕日色の部分は甘さ、喜び、期待。茶色が混ざった色は、苦しみ、悲しみ、痛み……。私の想いの全ては、蜜柑色でした。

君を想えば想うほど、色は濃いものになっていく。君は蜜柑色です。……蜜柑色の君。

二年生冬編、次回で終わりです。三年生編も考えているんですが、どうしても甘くならない話ばかり。片思いがすごくキーワードになる予定です。そして、いろんな人の想いが交わります。隼人だったり千恵だったり、棗だったり、三年生編になってから動き出す予定です。

one sided love 24 考える時間（前書き）

今回で二年生冬編が終わりです。サブタイトルはなににしようか迷いましたが、ココロにとっても楽にしても、考える時間なのかな、と思い、サブタイトルはそれにしました。三年生編はボチボチ考え中です。

朝、学校に来たら、棗がなにか考え込んでいた。顔を下にして、黙ったままで。挨拶しても全く気付いてない。なにがあったの？

「棗、おはよう！ どうしたの？ ボーッとし過ぎだよ」

「……あ、おう。別になんでもねえよ」

嘘つき。ほんとに棗は嘘が下手。考え込んでいたのに、なにもないふりをするの。

棗が必死に隠そうとしてるから、なにも気付いてないふりを私もするね？ 棗から無理矢理聞き出したくない……。

「そういえば、隼人どこに行かなくていいのか？ あいつのことだからきつと待ってるぞ」

隼人のとこ。最近、棗は朝私が教室にいらすとすぐにそう言う。追いつ出したいのかな？ 柴崎さんと二人きりになりたい……とか。私に邪魔する権利なんてないけど、二人きりにしたくないのが本音。私のわがままで二人の邪魔をしてはいけないのにね。

「もうすぐ行くよ。棗も隼人と早く仲を戻せばいいのに」

軽く言った。二人はまだ仲が悪いから、早くもとに戻ってほしいという意味もこめて。

棗は黙り込んでなにも言わない。それで棗の返事は決まってるのかな。

諦めた私は教室を出ようと、棗の隣を通り過ぎた。

「隼人とは、今はまだ無理だけど……いつかは謝るつもりだ」

棗は聞こえないと思って言ったんだろうけど、しっかりと私の耳に届いた。

二人とも……本当に仲が良い。同じことを言ってるんだもん。仲直りしたくて、でも素直になれなくて。私がお節介をやくわけにもいかないから、二人が自然にそうなるまで……待とう。

棗に出来るだけ微笑んで教室を出た。

階段を上がっていたら、柴崎さんとすれ違った。振り返ってみるといつもより、おしゃれをしていた。髪の毛はいつもと違って、ストレートじゃなく、緩いパーマがかかっている。

「あ、柴崎さん！」

柴崎さんに声をかけてみた。柴崎さんは私を見て、淡く笑う。なんだか……柴崎さん、緊張してる？　いつもの余裕がないよ……。おかしいな、なんか今日は棗も柴崎さんも変。今日ってなんかあったかな？

「星野さん……隼人のところに行くの？」

「うん。棗に言われちゃって……。柴崎さんも棗のところ？」

柴崎さんは黙って頷いた。だからそんなに気合いが入っているの

かなあ？

私は「じゃあ」と言って上の階に行こうとした。だけど、行けないのは、柴崎さんが私の腕を掴んでいるから。

「星野さん。なんでそんなに平気なの？ 私、今から…… 棗に告白するんだよ？」

いきなり核心をついてきた柴崎さん。告白するからそんなに気合が入ってるんだ。

柴崎さんは黙って私を見るだけ。どんな反応するのか、なんて言うのか、試しているのかな。

正直、嫉妬してないっていったら嘘になる。モヤモヤしてないっていったら強がりになる。でもね、私は思ったんだ。好きな人を想うのは、みんな一緒じゃないかって。

「私も柴崎さんも、棗が好きなのは変わらないね。なら、私は諦めないから……それに、棗の隣にいるのは、棗が決めること。幸せなのは……あの人が決めることだから、私にはどうにも出来ないから」

強がっているの、分かるかな。棗の隣にはずっといたい。友達でもいいから。でも、それは棗が望んでない。棗の隣にいる資格は、棗が決める。選ばれないかぎり、私は棗の傍にいけない。

柴崎さんは私の頬を思いつきり抓る。痛いけど……柴崎さんが泣き顔に見えて……思わず柴崎さんをギュって抱きしめた。

「な、に……？ なにするの、星野さん……？」

「柴崎さん！ 私は柴崎さんがすごい綺麗だと思うよ。棗とも……似合ってるし、サバサバしてるし……柴崎さん以上に綺麗な

人、学校にいないと思う」

柴崎さんは私より背が高いから、私が抱きついてるふうに見えるだろうな。違っではないんだけど。

柴崎さんの背中をポンポン叩いてあやしていると、柴崎さんがいきなり私の頬を叩いた。

「そんなこと……言わないで。私は綺麗じゃない。だって……星野さんに棗をとられるのが怖くて……意地悪ばかりしてた。ごめんね……でも、星野さんも泣きそうじゃん……」

「私は大丈夫！　　棗のところに行って、早く告白してきてね！」

逃げる私は卑怯……。嫉妬してるのを知られたくなくて、棗に告白する柴崎さんが羨ましくて……。もう話せなかった。あれ以上話したら、全部知られてしまう気がして……。

隼人と話していても、作り笑いしか出来なかった。本当に、心から笑えなかった。隼人は気付いていなくて、安心した。隼人は鋭いから、全てを見透かされた気がするから。棗のことが好きっていうのも、いつか隼人に知られる日がくるのかな。その時は……なんて言ってくれる？　応援とか、してくれるのかな。

今、棗はどうしているの？　　下にいるのに……会おうと思えば、会える距離なのに。とてつもなく、棗が遠く感じる。寂しいとかそういうのじゃなくて、なんか……離れていく……？　　ゴチャゴチャな感情。

隼人はすぐに手を伸ばせば触れられる。なのに、棗とはもう……触れられない気がして。おかしいかな、こんなに棗に触れられなくて不安になるの。

「星野さん。チャイム鳴ったよ?」

隼人が心配してくれた。でも……ごめんね。私、隼人を見てなかったよ。棗を想像して隼人と会話していたよ。隼人の話、聞いてなかったよ。私はどれだけだめなの……?　どうして棗を好きになつたの?　今の気持ちを捨てられたら楽なのに。でも、捨てたくないって願う自分もいるんだ。

「星野さん。どうしたの、元気ないね?」

「べつ、に……なにもないよ!　苦手な教科が一时间目からあるなあって思ってた……」

隼人に心配をかけたくない。ひどい私も、隼人は優しく包んでくれるから。私は隼人の優しさに甘えてしまふ。都合のいい、人になるだけ。そんなのは嫌。隼人からたくさん優しくされた分、私はその優しい気持ちをかえしたいよ。でも……今の私に優しい気持ちなんてもの、ないから。せめて……隼人に心配されたくないよ……。

「そう?　それなら……お互い頑張ろうね?」

「うん!　眠らないよう、頑張るよ!」

元気いっぱい手を振った。結構上手く演じたかな?　隼人はいろんなことに鋭いから、騙せるとは思えないけど、きっと私が必死なのを分かってくれて、知らないふりをしてくれたんだ。ほんと……優しい。

「だ、だから……!　付き合ってほしいの!」

「なに言っただよ？　柴崎は美人だから彼氏いるだろ？
だいたい、俺を好きになるはずがないじゃん」

教室から声がして、ドアノブに触れた手を引つ込める。告白、だよね……。うっかりして入らなくて良かった。邪魔、したくないもん。

でもどうしよう……。このまま聞いていいわけないし……。でも隠れる場所だってないし。なにより、もうすぐみんな来る。私はブラ廊下をふらついていようか。

足を進めた時、焦った様子の柴崎の声が聞こえた。

「ほんとなの！　私は本気で棗に惚れてるの。棗が私を利用してもいい。お願い、付き合って……」

「……………。考えさせてくれ」

棗の返事に希望が見えた柴崎さんは、うつすらと涙を浮かべながら棗に「ありがとう」と何度も呟いていた。棗に告白したのは……本気の相手は棗しかないからだよね。柴崎さんは綺麗だから……男の子から寄ってくると思う。柴崎さん……きつと、今まで好きになることがなかったんじゃないかな。言い寄られて好きじゃないのに付き合って……上手いかわいとか、理想と違ってたとか……その他もろもろ。

「私……振られてもいい。棗に、知ってもらいたかったただだからね。ごめん、迷惑だったらごめんね」

「……………迷惑じゃねえって。ありがとうな、俺のこと、好きになっしてくれてさ。その気持ちを無駄にしないために、時間をかけて考える。待たせるけど、ごめんな」

ここにいたらだめ。盗み聞きしたらだめだよ。立ち去らなくちゃ。足を動かして、廊下の突き当たりに移動しなきゃ。

私は教室に反対方向に行つて美咲や真琴が来るのを待った。見てはいけない……聞いてはいけない。二人の間になにがあつても、私にはどうすることも出来ないから。聞いたらまた変に嫉妬しちゃうだろうし……あんなに汚い、醜い感情が嫉妬なんて……知りたくなかった。恋は綺麗なだけじゃない。相手を好きになればなるほど、気持ちは強くなって、嫉妬することも増えていく。不安になつたり、涙脆くなつたりいつもより気合いをいれたりして……。人が誰かを好きになる、恋は……みんなを変えてしまう。良い方向にも、悪い方向にも。恋は綺麗なだけじゃなくて、汚くて人を変えちゃうけど……それでも誰かを求めずにはいられない。愛しい人ほど、求めてしまう。……嫉妬で私は自分が嫌になる。こわくて、これ以上醜い感情で棗のことを思ってしまうの？ いや……だけど、どうしても棗を求めてしまうよー！。

「星野さん？ 暗い表情してる。隼人になにか言われたりした？」

会話が終わったのか、柴崎さんがすぐ目の前にいた。機嫌が良いみたいで、棗と上手くいったんだろうな。考えると云つてた棗も、本当は決まっているんだと思うよ。だから、きつと、柴崎さんは棗の特別になれる。笑顔で「良かったね！」って言えたら最高なんだけどな……。

「星野さん？ どうかしたの？ なにか、変なこと……あつたりした？」

不安げな表情でそんなことを聞くのは、棗との会話を聞かれてい

るかもしれないって思っているからだろうか。大丈夫、大丈夫。私は「なんでもないよ」ってなにもないふりしないと！

「ううん、特に。友達がいつもより遅いから、心配しちゃって」

「そう……。じゃ、私は戻るけど……。あとは棗とゆっくり話したりしたら？　みんな、いないから問題ないでしょ」

柴崎さんはなんで平気で恋敵を応援するチャンスをくれるのだろう。棗と話したいのは柴崎さんでしょう？　棗も柴崎さんと話したいはずだよ。私にいま、棗と話す自信ない。上の空だと思っから……。一人きりにするのが一番だよ。

「遠慮しておくね。棗は私のおかげ、冷たいんだから」

後ろを向いて微笑んだ。上手く笑えたって思えないから。

柴崎さんはため息をついた、みたいで、ハアッて音がした。

「棗に告白した。でも、返事はもらえなかったから……。三年生になる、始業式までに考えてって約束したの。……。これを聞いてどうするかは、星野さん次第だから！」

柴崎さんは階段を早足で上っていった。私……。どうしろと？　出来ることなら……。言ってしまいたい。全ての想い、棗への想い。春までに、棗は返事をする。私はその時……。ただ黙って知らないふりをするしかないよ……。

三年生になったらどんなことをするのか、どんな行事があるのかなあ、なんて考えてます。中学三年生っていつたら、「受験」ですね。勉強とか、進路、恋に悩んで、でもちゃんと自分なりに全てをきちんと終わらせる、みたいな感じにしていきたいです。

やっとここまで進むことが出来ました。三年生は甘い話がそんなになくて、みんなの抱えている想いが交わっていきます。隼人や千恵は季節のここにいれよう、とか決めたんですが、棗は最後の最後までどんな気持ちだったのか、誰を想っていたのかなど明かしません。ココロは主人公なのでつねに明かしますね。清純な子っていいですね。

始業式はいつもドキドキする。新しいクラス、いつもと違う光景。これから発表されるクラスが……中学生最後の一年間を過ごすクラス。やっぱり、雰囲気が良いところがいい。馴染みやすいところがいいなあ。

「うわあ……。私たち、同じクラスになれるかな……」

真琴が元気をなくす。真琴はまだ女の子が苦手なんだろうな。高校も、男子校に行きたいと言っていた。行けないけど、真琴が本気でそれを望んでいる。三年生は進路。今はまだ、行きたい高校とかないから目標もないまま。美咲は小学校の頃からの夢があつて、夢を叶えるために、専門学校に行こうと考えているらしい。

千恵は……。どうなんだろう。もう、しばらく会ってない。会いたいの、距離が遠い。長い休みがないと会えないのが……。辛い。高校も一緒に通えないし、もしかしたら、もっと離れちゃうかもしれない。それが、怖い。

「ココロ〜！ 真琴〜！ 見てよクラス表〜！」

美咲が遠いところから手をブンブン振ってる。クラス表……。美咲はもう見たんだ。表情はよく分からないけど、落ち込んでいる様子もない。美咲にとって最高のクラスになれたのかなあ……。

「あ！ ココロ、見てよ！ 私たち、同じクラスだよ！」

「ほ、ほんと！？ どこ？ どこ？」

興奮してる私に、真琴はクスクス笑って五組の方を指差した。目で表に書かれている名前を読んでいく。

……美咲！？　み、美咲の名前、ある！　美咲……五組！？
わ、私の名前は……。もうちょっと下、かな？　星野……だもん。最後の方が。

「あ……！　あつた！　美咲も私も真琴も、三人一緒！
やったあ！」

奇跡……！　三年生で三人一緒なんて！　神様、ありがとう！
今年……うつん、中学生の最後まで、最高の思い出を作ります！　悔やまない、またこのクラスがいいなって思える最高のクラスを……思い出を！

「しかも、また大西と同じクラスだね。柴崎さんは違うみたいだし、二人は運命かもね！」

棗も、一緒？　柴崎さんは違う？　それは……嬉しいけど、少し複雑かな。近くにいられるけど……いつも棗を見れるけど、その分、棗が誰といるとか、誰を見てるとか……分かってしまう。好きなのに、切なくなる。好きな人が他の人を見てるのってすごく辛いんだよ……。？　応援したいって言っても、結局応援出来ずにいるんだよ。近くで見れるのは嬉しいのと同時に、切ない。だから、棗と同じクラスになったのは、嬉しいのと複雑なのがまざってゴチャゴチャ。

そういえば棗は見掛けないけど……どこにいるの？　まだ来てないのかな……。

キョロキョロしていると真琴も一緒になって棗を捜してくれる。真琴は背が低いから……よく見えないと思うんだけど……捜してくれて、ありがとう、真琴。

「あ、あそこに大西いる！　ココロ、話しにいきなよ！」

真琴が指差している方向を見ると友達と楽しく話している棗の姿。春休みの間に身長、伸びた？　髪の毛、切った？　……すごくいい表情をしてるよ、棗。吹っ切れた表情、してる。なにか良いことでもあったのかな。

戸惑う私に、真琴は腕をグイグイおして、行ってこい、の合図をする。うう……三年生だもんね。棗といられるのは、あと一年。短いんだ。だから、行動するしかないんだ。

「棗。おはよう！　また同じクラスだね」

「お？　星野か。おはよー！　また同じクラスかよ。まあ、またよろしくな」

友達と離れた隙に棗に話しかけた。私とは思っていなかった棗が、固まった笑顔から、緩い笑顔に変わっていく。私の好きな、棗の笑顔。照れたようなはにかんだ表情に、赤い頬。大好き、棗……。好きだよ、好き……。言いたいよ。でも言えないよ。まだまだ臆病な私。いつか、棗に好きと言える日が来るのかな……。

「棗ー。ここにいたんだ？」

「うわ！　柴崎！？　抱きつくなんて！」

棗の背中から柴崎さんが現われて棗に抱きつく。ギュツと力一杯ではないけど、緩すぎるってわけでもなくて。棗も棗で、なんだか拒んでないって感じ。前より仲がいいっていうか……恋仲っていうか……。春休みに会って、内緒で付き合うことになり、晴れて恋人

同士になりました！ とか？ 抱きつくのも、それとか……。

「誤解するなよ！ まだ付き合っていないからな！」

「棗ってば！ 決めてるんでしょ？ 返事！」

返事……それは柴崎さんへの告白の返事だろう。ちょうど今日までが返事を考える時間。まだもらえてないってこと？ それとも、棗は今日決めるのかな。

私は春休みという長い、短い休みを利用して棗のことをずっと考えてた。時間があってもなくても、棗だけで。私は心がいつぱいになるんだよ。

「あ、ああ……。返事は一応、決まってる」

曖昧な棗の返事。決まってるとは言ってるけど、まだ迷っている。返事は私にはなんの関係もないから、深入り出来るはずもなく。私は、笑顔を棗に見せてなにも言わずに真琴の元へと戻った。これくらいの強がり、したい。いつも私だけ、棗に負けてる。君に、溺れてる。

「ココロ！ なんで棗にアピールしないの！？ あと一年、頑張つて棗を振り向かせようよ！」

「ありがとう、真琴。棗のこと、欲しいよ。でも……棗の気持ちを無視してまで、手に入れたくないよ」

たとえ、棗を無理矢理手に入れたとしても、すぐに棗は私から離れていってしまう。好きでもない女の子と一緒にいたいなんて思えないよね。手とか繋げないね。

私はそこまで出来ない。そんなことしたら、棗はきっと私を嫌いになるでしょう？　まして、離れていく棗をつなぎ止める方法なんてない。私はどっちにしろ、傷付くことしか出来ないの。なら、最後くらい、笑って、この人を好きになって良かった、って思いたいよ。だからね、私はしばらくの時間が必要です。棗のこと、振り向かせたい。振られてもいいから、想いを伝えたい。いつか……だけれど。

「もう！　可愛いよ、ココロ！　いつそのこと、嫁にこい！」

「ま、真琴！　嬉しい！　真琴も可愛い！」

会話を聞いていた人たちはなんと思ったのか、変な目付きで私と真琴を見る。友達のことを褒めまくる、上辺だけの友情だと笑うだろうか。周りにどう思われてもいいけど……少なくとも私は、真琴と上辺だけの友達だとは思わない。真琴は私の大切な友達。

「こら！　その二人、早く教室に行きなさい！　遅刻するわよ」

「す、すいません！」

先生に怒られて浮かれていた私たちはすぐに走って教室に行った。さすがに遅刻ギリギリだったから最後が私たち。みんなの目が、痛い。

クラスにはられた席の順番をみて、また、去年と一緒の席。隣は誰だろうな、なんて思いながら席についた。顔を見て「よろしく」とか言える自信ない。目が合ったりしたらなんて言えばいいのか分からなくなる。だから隣の人を見ずにいた。

「隣、よろしくね。星野さん」

柔らかな、聞いていて落ち着く声。なんとなく、この声で囁かれ
たら女の子は恋するんじゃないかな。「好きだ」とか言われたりし
たら断る子、いる？ 安心させて、優しさを含む声はずっと聞い
ていたいと思う。心が弱っている人なら、この声で甘い言葉を紡が
れたら、甘えてしまうだろう。私もこの声好きだな。誰かに似てる
声。誰だっけ……？

「挨拶くらいしようよ。せつかく隣席なんだからさ」

「星野です、よろしく……え？」

パッチリ目が合ったのは……優しくて紳士的な、隼人。あれ？
隼人って同じクラスだったの？ よく見てなかったから。仲良
い人、集合したなあ。

隼人の隣席……やっぱり少し嬉しい。なんでか分からないけど、
安心する。

「みんな、席着いてるか？ 担任になるー」

先生の登場です。男の先生だ……まだ若い先生だな。

長い話が嫌いな先生は、すぐに話を喋って時間を早くしてくれた。
生徒とかに人気がありそう。今だって、囲まれてるし。

「今日はゆっくり休めよ！ 明日から授業があるんだから、

居眠りとかは絶対にするなよ」

「せんせー、先生は結婚とかしてるの？」

「うわ、先生困ってるよ。女子生徒の相手は面倒なのかな。私はあんなに甘い声出せないし、可愛い仕草も出来ない。……気にしちゃだめ。私は私なんだもん。他の人と比べたらへこんじゃうだけ。気にするな、私。」

「ココロ、帰るよー！ 早くー」

「あ、待って！ すぐ行く」

駆け足で美咲に寄った。先生が言っていた通り、家に帰って休みたい。春でポカポカしてるせいか、すごく眠たい。授業中、寝ないかな……。

「ふああ。眠いな」

美咲が眠い眠い、と呟く。これから部活のある人は眠くないのかな。バスケットかサッカーとか。私なら眠くて何度もあくびをしちゃう。それに、最悪、寝ちやうかもしない。

美咲と話しながら帰っていると柴崎さんが門の前でニヤニヤしながら誰かを待っていた。

「柴崎さん？」

「な、棗！」

声をかけたらすぐに振り返って私を見た。棗じゃないことが分かったと、少しガツカリしているのが分かる。棗を待っているんだな……。返事をもらうため、なのか。

「嬉しいことでもあったの？　すごい幸せオーラ出てるよ」

「え……んーと、そう？　とくにないけどね」

嘘、かな。なんで隠そうとするの？　私には知られたくないこと？　それって……。嫌な予感がグルグルと頭の中でまわる。考えたくないことだけど、有り得る話。

「棗と……付き合うこと、になった……？」

声が震えた。動揺してるの丸分かりだよ。柴崎さんもなんとなく様子が変わった。言いにくそうに目を逸す。考えなくなかった……。でも、柴崎さんの態度が答えなんじゃないか。私の勘はあたらないけど、今はあたってる気がする。

「柴崎さん！　私、本当のことがしりたい！　嘘言われたら、倍傷つくから……」

「え……そ、その……？　なにを言ってるー」

柴崎さんは言いかけた言葉をとめた。私の後ろをジッと見つめていたら、笑顔になったり申し訳なさそうな表情をしたり。いったい、どうしたの……？

「柴崎！」

愛しい人の、声。聞きたくてたまらなくて、いつもその声に耳を傾けてた。名前を呼ばれる度に嬉しくて、彼の特別になりたいなんて欲を抱いた。

それが今、別の人の名を呼んでいる……。

「棗……。遅かった、ね？」

「まあな。んで、なんで星野とかいる？　まさか呼んだりしてないよな？」

なんだろう……。君を見てると苦しいよ。辛くて辛くてどうしようもないよ。君のこと、好きだよ。好きで、好きで……。もう惚れすぎて。いつも、見てるだけで良かった。話すだけで嬉しかったのに……。私はいつからこんなに弱く、醜い女の子になったの？　こんな私、見られたくないよ……。

「棗……。あの、場所、変えようか？　ここじゃ……。ね？」

「ん？　いいよ、ここで。いつか広まるだろうし、隠す必要ないじゃん」

笑った。笑うのは好きなのに……。棗の笑顔は私がいつも見てた。でも……。棗のこと、好きな女の子はいる。私だけじゃない「誰か」も、棗を狙っていた。それが今なんて……。

「柴崎、俺……。お前に似合わない男だよ。かつこいいわけじゃないし、優しいわけでもない。けど……。頑張って努力するんで……。俺の傍にいてほしい、です……。」

周りの音が、消えた。棗……。棗……。柴崎さんと、付き合うの？　誰かのものになったの？　いや、嫌……。！　棗だけは、本当に好きなのに……。想いを伝えられないまま、棗は誰かと幸せになるの？　「好きな人が幸せなら、私も幸せ」という言葉があるけど……。幸せになれないのは、私の心が狭いから？　涙が出るよ

……棗。

「あ！ ココロ、待ってよう！」

もうなにも見たくない。なにも聞きたくない。ただ、涙をかわかして、棗のことをすぐに忘れたい。棗への恋心を……今、すぐに。

棗の選んだ返事、どうですか？ 告白された時を思い出しながら書いてみました。私は誰かに告白したことはありません。だから告白出来ることはすごいと思います。

辛いこともたくさんありますが、諦めたら終わりです。最後まで決して諦めないで下さい。人を好きになることは悪くありませんから。見たくないこともあります。でも、それを受け入れて、前に進んでいくしかないのです。一緒だから、少しずつ、自分のペースで進んでいきましょう。

ココロが棗のことを諦めたいと思うとき、多いなあ、と思いながら書きました。多分、彼女が彼を諦めようとするのはこれが最後です。泣くことはあっても、無理に忘れようとはしない。自分の気持ちを大切にするのは大事なことです。

棗のこと忘れたいよ……好きになるなら、もっと楽しい恋をしてみたい。辛だけの恋は……私にはたえられないのです。神様が本当にいるなら、私は棗を忘れたいと願います。だから、お願い……棗への恋心を消して下さい……。

「ココロ！ 走るの速いよ！ 追いつくのに時間かかったよ」

美咲がすぐ傍で乱れた息を整える。走るって……、そうだ、私、棗と柴崎さんが付き合うことになって、それ以上見たくなくて……走ってここまで来たんだ。学校から八分くらいで着ける、小さなマシヨン。なんでここに来たのかは私にも、よく分からない。落ちて着けるから好きなのは好き……。

「でも、まさか目の前で返事するなんてね。普通、人目を気にして、裏門とかで返事するでしょ。こんなに可愛くて一途に大西のことを想ってる女の子がいるのにな」

美咲も少し怒った口調で言う。棗が柴崎さんに似合うために頑張るって……それはつまり、柴崎さんの彼氏だということ。似合う彼氏になるから、付き合ってくれってことだね……。私、しばらく二人の顔、見たくないよ……。

「よしよし。大丈夫だよ、大西のことは忘れて。全く、大西もばかだよ。大西が選んだのなら仕方ないけど、あの時の大西は明らかに迷った表情してたよ。だから、ね？」

美咲の優しい気遣いが嬉しくて。嬉しい涙と苦しい涙がまた出て

くるんだ。

しばらく美咲の中で泣いたけど、美咲はなにも言わず、頭を撫でてくれたり、背中を擦ってくれた。

美咲は私が泣きやんだのを見て、静かに離れた。不安な私の目を確認してから、言った。

「ココロ、私がこんなこと言うのはおかしいけど……大西のことは諦めたらだめだよ」

「なん、で？」

棗のことを諦めたいのに？ 今なら、まだ諦められると思うの。棗には彼女が出来た。私が入る隙なんてないし、棗を忘れた方が私にとつて、とても助かること。辛い想いを抱えたまま、顔を見る勇氣はないよ。

「あのね、人を好きになることは大切なこと。忘れたいって思つて、簡単に忘れられないよ。すぐに忘れるのなら、その程度。ココロは、大西への想いはその程度だったの？」

「違う……。棗のこと、本気で好き……。忘れたく、ないよ……！」

忘れたくない、棗との思い出。よく考えれば、辛いことばかりじゃない。楽しいことだって、嬉しいことだってあった。私が、忘れてただけ……。

本当は、棗に会いたい。棗と話したい。棗の顔が見たい。……棗を諦めたくない。

「じゃあ、ココロはどうしなきゃいけないのか分かるね」。大

西が付き合ってるからとか関係ないから、それによく言うよ。失恋した女の子はきれいになるって」

私がしなきゃいけないのは……素に想いを伝えること。でも、私、まだ告白する勇気がないんだ。それに、素は付き合ったばかりだから、告白しても振られるのは分かるの。どうせなら……進路がちゃんと決まったときとかに告白したいよ。今の私はまだだから……君に伝えるくらいは、似合う女の子になりたい。せめて振られるなら……素の私を、見てもらいたいから。

「うん。分かったよ。私が素に似合わないけど……告白のときくらいは、可愛くうつりたい」

「その調子だと、まだ告白しないんだねえ。でも、安心してね。私もココロのために協力するから。計画立てる？」

計画……！？　そこまでしようとは思わないよ！　よくやる、「かけひき」ってやつ？　おしてもだめならひけつていう……積極的だったり、急に冷たくなったり。それで気を引くつもりは全くないから。

「遠慮しておきますよ！　私は素のままで好きになってもらいたいもん」

「ココロはそういう子だね。まあ、私も計画なんて立てないけど。でも、前よりは応援するよ！　出来る限り、二人きりの時間とかもつくるし」

うーん……それは喜んでいいのかな？　二人きりの時間なんて

……柴崎さんに悪い気がする。一応、カレカノだもん。ほら……ド
ラマとかでよくある、「浮気したわね!？」とか「なんで二人でい
るのよ!」のありがちなパターン。女の子とたまたま二人で話して
ただけで、それを付き合ってる彼女に見られる、っていうやつ。そ
れで誤解をとこうとして話し合っただけで、彼女は聞く耳もたずで
結局別れちゃう……。そんなの、やだ!

「だめ! 私のでいで二人が別れるとかいやだ! せつか
く付き合っているのに……」

「私、二人が別れるとか言っていないよ? ただ、大西とコ
コロが話せるって考えてただけで」

なんだあ……。そういうことが。って待って! 棗と話してい
いの!? 柴崎さん、嫉妬するんじゃないの!? 私が棗のこ
と、好きなのを知ってるから警戒すると思う。絶対に話すことなん
て出来ないよ。

「例えばね、大西が忘れ物をしてそれを届けるとか。同じ
班になって係が一緒とか! 同じクラスなのはココロなんだか
ら、出来ることはいっぱいあるんだよ」

そうかもしれない……。でも、いいのかな? それって人の彼氏
を奪うのと同じじゃないの? 棗にも「なんだこいつ」とか
思われてるのがこわいよ……。棗に嫌われるのがこわくてたまらな
い……。

「ココロが嫌っていうなら、私はなにもしないし、応援だつて
しない。むしろ邪魔する。大西のことを忘れてもらうために、他の
男の子を紹介するし、大西とは絶対に話せないようにする。目だつ

て合わないように。それでもいいの？」

「そ、れは！　　よくない！　　そこまでしなくても……」

美咲が真剣だから。本当にしそうな気がして。私はそこまでされたら、嫌でも美咲を遠ざけようとするかもしれない。

美咲が私のことを考えてしてくれてることなんだろうけど……私には無理だよ……。

「じゃあ、遠慮しない。彼女がいるとか、そんなことは考えずに。自然体で、いつもと同じで。不自然な態度をとったら、気をつかってるの分かるでしょ。気をひこうと思われるかもしれないけど、他人に気をつかうことはないよ。ちゃんと、自分の想いに正直になるべきだよ」

私が、正直になっても……いいのかな？　　棗が好きだという、心に素直になっっているの？　　みんなに迷惑かけるかもしれないよ？　　傷付けるかもしれないよ？　　それでも……いいの？

「名前、ココロでしょ！　　名前の通りに、心に素直になりなよ」

「美咲……。うん、うん……。正直になりたいけど……。柴崎さんに誤解されないかなあ……。？　　棗が責められたりしないかなあ……。？」

美咲はまたため息をついて、私を呆れた目で見る。なんでそんな目で見られるのか分からなくて、俯いた。

「そんなに考えなくていいの！　　ココロは大西が好きなんで

しょ！　片思いしてるんでしょ。なら、前と同じようにさ……大西を振り向かせようとか思えばいい。彼女がいるとか関係なくて、最終的に決めるのは大西だよ。だから……そんなに自分を責めなくていいから！」

棗が決める……。振り向かせる？　棗が私に笑ってくれるの？
私は……柴崎さんと一緒にいる棗を……応援出来るの？　出来ないので……強がってどうするの……。

「そう、だね……。私は今まで、強がっていただけだよ……」

「分かったなら大丈夫！　明日からいつも通りにしないとだめだからね？」

美咲がほんのり笑った。それは、安心した時の笑顔だっけと知ってるよ？　いつも隣で励ましてくれたりしたから。何年、一緒にいると思ってるの。時々、喧嘩もするけど……やっぱり友達。

「美咲、ありがと……。最後まで頑張る……。もう、棗を諦めるとか言わない。好きだから……。いつか忘れるかもしれないけど、好きなときは……無理に忘れない。自然に誰かを好きになっっていくものだから」

美咲はニツコリ笑って応援してくれた。そのとき、改めて思ったの。

たとえ、棗を想って辛いことや悲しいことがあっても……最後まで諦めないって。乗り越えられる、強い心をもつから。

今は棗の顔が見えるからいいけど……高校とか、大人になったとき、棗のことは見えないだろう。いつまでも、棗と笑い合えることはない。そのときに、「初恋の人って誰？」って聞かれたときに「

彼女がいた人だよ」って笑って、初恋のことを懐かしむように、いつか話せたら。「彼女がいて、辛かったけど、後悔はないんだ。あの人を好きになって良かった」って言えるように。私は君に、後悔しないようにしたい。あのとき、こうすればよかった、あんなこと言わなきゃよかったなんて思いたくないから。好きな人を振り向かせようと思って、すぐに行動してたよって。胸をはれるように。私は、君になにか出来る？ 出来るなら……私はしましよう。君のために、なんでもしましよう。棗、棗……。好きな気持ちは変わらないよ……。大好きだから……。

「私、棗が好きだ……。棗を想うだけで、あたたかくて切なくなる。やっぱり、恋って分らないね」

「そうかもね」。ココロ、恋話とか好きじゃなかったし、恋すら興味ないって感じだったもんね。恋に冷めてた女の子が恋するなんて、本当にびっくり」

そう思えば、私は中学に入るまで恋なんて興味なかったな……。小学校のときとかに、友達同士で何人が集まって恋話したり、修学旅行のときに寝たふりをして、夜遅くまで語り合ってたよね。私も参加させられて、適当に相槌をうってたけど、そうすると「ココロは誰が好きなの？」と聞かれたものだ。もちろん、否定するのだけだ。否定しても「隠さなくてもいいじゃん！」ってお決まりパターンだった。しつこいときは上手くごまかしたのは今でもすっかり覚えてる。そんな私がまさか……恋できるなんてね。全く予想出来なかったよ。

「初恋は一生に一回しかないからね。大切にしまよ」

「そうするつもりです」

二人、顔を見合わせて笑い合った。傷ついたとき、友達の大切さに改めて気付く。支えられてるのはいつも私で、私は少しも恩返しを出来てないけど……いつか、いつか支えられる側じゃなくて、支える側になるから。美咲がなにかに傷ついたり、悩んだりしたときはすぐに飛んでいくから。だから、もっと強くなるよ。いつか君を笑顔にさせるために。励ませるように。私ばかり頼って甘えるのは悪いから。崩れそうなときは頼って甘えてね。必ず、力になるから。

蜜柑色の君も、物語の半分が終わりました。最後の展開は決まっているんですが、本当にいいのかな……と迷っています。変更したら話が合わなくなるので、突き通しますが……若干、変わるところもきつとあります。

もうすぐ、一月が終わりますね。二月に完結はまだ出来ないと思っています。完結は、だいたい三月かな、なんて思います。遅くても、四月の最初。それなのに、ノロノロな展開ですいません！なかなか自分の思った通りに進まなく、想像以上に悩みますが、それでも楽しいので、小説が書けてよかったと思います。

美咲が応援してくれるから……私が棗を忘れたくないから、もう自分に嘘はつかない。それに、三年生だもん。棗と楽しく話せるのも、棗の笑顔を見れるのも……最後。来年の今ごろ、みんな離れ離れ。いつまでも悲観的に思っていたらだめなのを、美咲が教えてくれた。最後なんだから、後悔しないためにも行動した方がいい。そして、棗に想いを伝えられたらいい。それ以上、望んだら欲張りだよな……。

「棗ー！ ごめん、英語の教科書貸して！」

休み時間、柴崎さんが窓から顔を出した。棗と付き合うことになってから、このクラスに来るのも前より増えた。朝、学校に着くともいつも二人で寄り添っているから、教室に中々入れなくて、隼人に会いにいつて時間が経つのを待ってる。部活だって一緒に行ってるのも知ってるし、一緒に帰ってるのも知ってる。棗が柴崎さんと付き合っている、やっぱり見ちゃう。苦しくなるのを分かっている……棗を捜してしまう。

二人の様子を見て、周りからは「付き合ってる」という噂が流れているみたい。噂じゃなくて、本当に付き合っているのに、なんで周りに言わないのかなって時々不思議に思う。ただ、柴崎さんのことを密かに想っていた男の子が嘆き悲しんでいるのを見たのは秘密だ。

「はい、少し汚いけど、落書きとかねえから」

「あつたらおかしいって！ 受験生って自覚がないじゃん！でも、棗が分かんないところがあつたら、教えるからね！」

クラスのみんなは、二人に釘付け。私も棗を見たけど、顔を窓に向けて、こっちに背を向けているのでどんな表情をしているのか分からない。彼女だから、柴崎さんにしか見せない表情とかあるんだろうなあ……。羨ましいや。

二人はしばらく、休み時間のギリギリまで話していたけれど、チャイムがなる一分前くらいに柴崎さんは戻っていった。それをチャンスに、近くにいた女の子が棗に近付く。

「大西……あんたって、ほんとに柴崎と付き合ってるの？」

いきなりの質問にクラスが静かになる。棗がなんて言うのか、興味津々といった様子。私はもう……分かっているから。棗が柴崎さんと付き合ってるの。だから棗が言うことは予想出来た。聞いてないふりをして、耳を傾けた。

「ああ、柴崎とは付き合ってるよ。それがどうかしたのか？」

少し……痛みを感じた。それを悟られなくて、顔を下にして隠した。棗が言うこと、分かっていたのにな……。棗から聞くと現実で、彼は柴崎さんのものなんだなって自覚した。今までの、きつと私の強がり。

棗がはつきりと宣言したから、みんなは騒ぎ立てる。男の子は嘆いていたけど……棗は気にとめてない。女の子は、仲が良いグループで騒ぎながら棗に質問攻めをしている。他のクラスにもすぐに広まるだろう。こういう、恋愛話とかは情報はやいから……。

「堂々と言ったね。それがなんだって話だけどさあ、なんでこんな受験生のときに付き合おうとか思えるわけ？」

隣に座っていた美咲がシャーペンを弄りながら呟いた。美咲は私が傷付くと思つて言ってくれたんだと思う。美咲、いつもは意地悪なんだけど……根は優しいから、元気がなかったりすると、慰めよりも、おもしろいことを言つて、笑わせようとしてくれる。だから……美咲も大好きだよ。

「やっぱり、まだ春だから自覚ないのかなあ。それとも、今のうちに告つて、好きな人と同じ高校行こうとか？」 あ、一か八かつてのもあるよね」

美咲は……高校決めたのかな。好きな人と、同じにするのかな。彼氏とかいるはずだけどなあ……美咲つて。性格はのんびり屋で漫画が好きで……見た目は可愛い。美咲と私はよく雰囲気とか、外見が似てるって言われるけど、私は似てないと思う。私、美咲みたいな可愛くないもん。美咲は可愛いから、彼氏いるよね。はあ……いいな。

「私、好きな人とかいないんだよね。彼氏いる人、羨ましい」

「い……！？ う、嘘だあ！ 美咲、彼氏いるでしょ！
好きな人いるんじゃないの！？」

つい興奮して、大声を出してしまった。みんなの、周りの目が痛い……。私は恥ずかしくて、笑顔も自然と引きつっているのもなんとなく分かった。でも……でも！ 美咲は彼氏いないって言つし、好きな人もいないって言つんだもん！ 驚くのも仕方ないよ。

「本当にいないから。好きな人は、諦めたの。もう、満足だし。彼氏は元々いないよ」

諦めた……？ 私にいつも「諦めたらだめ」だと……言っていたのに？　なんで……諦めたの？　そんな悲しいこと、言わないで……。私も頑張るから……。美咲も一緒に頑張ろうよ……？

「人の気持ちは誰かに決められるものじゃないから。ココロが諦めるなって言っても、私は全く好きじゃなくなった。だから、意味ないよ？」

人の気持ちは変わる……。それは仕方のないことなのは分かるけど……。寂しいよ。私がないを言ってもだめだし、関わるのもだめだと思う。でも……。美咲が私を励ましてくれたのは、自分と重ねていたからなんじゃないのかな？　言い聞かせていたのかな？　変だよね……。私が悲しむなんて。私に、関係ないのに。

「そんな表情しないで。ココロが悲しいと……。私も悲しくなるから！」

ギュツと美咲は抱きつく。私より、背がちよっぴり高くなった美咲。前は、私の方が高かったのになあ……。成長、していく……。そう考えると少し寂しくなった。みんな、成長して、こんなに集まりあうこともないんだ……。いつか、こんな日々も懐かしくなってしまう。大人になって、再会したときに「変わった」とか言うのかな。今より、顔つきも大人っぽくなって、こんなに騒いだりしなくなる。やっぱり、寂しいな……。

私も、美咲を抱きしめた。今、このときをしつかりと覚えておきたい……。たくて……。

美咲は私から離れて机に座り直した。はにかんだ笑みと、照れた笑み。本当に、可愛い……。

「ココロが可愛すぎるんだよー！ あー、もう！ 渡したくない」

「わ、渡すつてなに！？ そんなつもりないんだけど！？」

渡すつてなにを！？ それに、美咲の方が可愛いじゃん！

睨んでも、可愛いものは可愛いよねえ……。でも、そんなに睨まないでほしいかなあ。また抱きつきたくなるよー。

「ココロにも、彼氏は出来るからー！ その前に、ココロのことが好きな男の子、いるからー」

なにを根拠に？ 私に好意を寄せる男の子なんていないよ。私、おとなしいし、地味だし、男の子とそんなに話さないし。なんでそんな自信満々に言えるのか、分かんない。

「まあ、いいか。今は忘れていいよ。いずれ分かるから。それより、千恵から連絡とかくる？」

はぐらかされた……。気にする必要はないけど、ほんの少し気になった。美咲の様子だと、教えてくれることはないだろうな。千恵の連絡……。どうだろ……。最近、きてない気がする。

「きてないよ。忙しいんだと思う。千恵も向こうで受験生なんだし、勉強苦手だしね」

「ああー！ そうかもねえ。会えるのは夏休みかなあ、それなら。夏休み……。楽しみだねー」

夏休みか……。多分、宿題多いだろうな。お母さん、勉強について

いろいろ言っし。遊びたいけど……夏休みに勉強やらないと、危ない気もする。どうしようかな……うー、迷う……。美咲に教えてもらっ……。でも、教えるのは苦手だって言ってたなあ。ドリルとか買おうかな。うーん……。今年は遊べないな。

「ねえ、ココロ。夏休み……部活、あるといいよね！」
出来れば、バスケット」

「な、なんで？ 夏休みは部活、あると思うけど……毎年あるし。大掃除させられるもん」

そっだ……。私たち、三年生だから夏休みの部活は最後なんだ。後輩のみんなとも一緒にいれるのはあと数ヶ月なんだなあ。……。ううん、私だけに浸ってるの！ 楽しく過ごさなきゃいけないよ！ 悟られて、気をつかわせたくない。だから、部活は休みたくない。みんなと少しでも一緒にいたい。楽しく過ごしていたいよ。

「あ。これから部活だよ。勉強と部活、難しいねえ」

時計を見る。まだ……。五時間目の休み時間ですよ？ 六時間目あるし、掃除……。まだ時間はたっぷりあるよ？ 部活のこと……考えて時間を分かっていなかったのかな。

「あ。はやく、後輩たちに会いたいよ」

「なあに？ 後輩くんの中に、好きな男の子でもいるの？」

ただ、なんとなく思い付いただけで。本当はそんなこと、思わなかった。からかうだけで終わると思っていたのに。

美咲は……。顔を若干にやつかせた。え……。まさか好きですパタ

ーン！？　わ、私地雷踏んだー！？

「なんでそうなるのかなあ？　ただ、気に入ってるだけだよ。どうして結びつけようとするの？」

「え、え……その……美咲、にやけてるよ！　好きなんでしょ！？　隠さなくても分かるよ！」

後輩くんが好きだなんて知らなかったよ！　確かに、美咲は後輩くに話しかけてるけど……私が後輩くんと話したら、まじつてくるけど！　それは嫉妬だったんだあ……。私、美咲を応援するのに！

「ココロ！　変に妄想しないでよ！　私は本当に好きじゃないから！」

「隠さなくてもいいよ！　応援するから！　あ、なんなら告白する？」

「冗談で言ってみると美咲はプイツと横を向く。あ……拗ねちゃった。からかい過ぎると美咲はこうなるんだよな。それが可愛いのは、気付いてないのがまたいいんだよね。」

「ごめんね美咲。美咲がつい、可愛くて……」

「可愛くないよ！　私が可愛いんならココロはもっと可愛いよ！　よく似てるって言われるし！　私は似てるって言われて嬉しいけどね。ココロ、クラスの男の子の話に出てたよ。去年、冬くらいにね、クラスで一番可愛い女の子の話してて、星野ココロだって言ってたもん。クラスの中でアイドル歌手つくるな

ら、センターは星野で、その他の女の子はココロの後ろで踊るのが仕事だつて」

そんなこと、話していたの？ 私は全く可愛くないし、アイドルだつてなれない。モデルだつて、女優だつて。憧れたことはあるけど……私じゃ無理なんだろうなつて思つてた。歯並びがきれいなわけじゃない。肌が白いわけじゃない。会話が上手なわけでもない。だから……お世辞だよつて思う。

「それに……！ 後輩くんだつて言つてたよ……！ 星野先輩はきれいだつて」。素直に喜びなよ」

「んー。お世辞を、ありがとう？」

私じゃなくて、みんなきれいなんだよ。恋する女の子はきれいになるつて聞いたことがある。好きな人に可愛いと思われたくて、オシャレしたり、ダイエットしてみたり。みんな努力してる。だから、可愛くて、きれいなんだよ。

出来るだけ笑顔にしてみて、美咲に笑いかけた。

中途半端なところで切りました。次回は三年生夏編。でも、主に夏休みの話になると思います。宿題は多くて、それに加えて部活もたくさん。校庭とかで汗を流しながら部活に打ち込んでいる人って、かっこいいと思います。

夏。去年とは違って、君の隣には彼女がいる。隣の彼女と一緒に部活をしながら汗を流して、笑い合ってるのかなー……。――

数ヶ月が過ぎて夏になった。太陽がジリジリと照り付けて、肌もすっかり日焼け。サッカー部や野球部は私よりも焼けてるけど、中には驚くくらい、白い男の子もいる。男の子は、日焼けしてた方がカッコいいけどな……。

前の席の子からプリントを渡されて一枚取りながら後ろに渡す。もらったプリントは、夏休みの過ごし方について。そう……明日から夏休み。

「分かっているとは思うが、お前たちは受験生だ。夏休みをどう過ごすかで変わる。分からないところはドリルでも買って、ちゃんと分かるようにしろよ。じゃないと、勉強についていけなくなる」

先生がプリントを見ながら話す。先生も必死なんだね。生徒に、高校に受かって欲しいから。

私はぼんやりしながら先生の話聞いた。だって、まだ受験生なんだという自覚がないんだ。行きたい高校も、目指している夢だっ てない。なんとなく、で選んでいるだけ。本当に自分のしたいことがなくて。先生の話も、受け流した。

「あゝ。先生の話、長かったね。高校なんて、まだ決まっ てないよ。ほとんど、決めているのにね」

「あれ？　美咲……確か専門学校に行きたいって言ったよね？　夢を叶えたくて、行くんでしょ？」

帰り道、先生の高校の話をした。美咲はてっきり高校決まってると思っていたから……。意外。私みたいに、夢がないわけでもない。なら、なんで『決まってるない』って言うのか分からない。私は、美咲に諦めてほしくないよ！

「そうなんだけどね。反対されたの。公立に行けって。親に反対されたら……。もう、仕方ないなあって。」

クシャッて、美咲が泣き顔を見せた。ずっと、美咲は夢を追いかけていたのに……。小学校の頃から、ずっと……。いつも、私に言ってたね。

「絶対に夢は叶えるんだから。」

私、美咲の夢をずっと応援してきたよ。頑張ってる美咲を、見てきたよ。だから、美咲が夢を叶えるために、してきた努力、知ってるよ。諦めないで……。美咲。

「美咲、諦めないで。夢はこれで終わったわけじゃないよ。高校に行っても、夢を追いかければいいんだと思う。夢、叶えるんでしょ？」

「本当に、ココロは優しいよね。うん、そうだね。悩むなんて、私らしくないよ！　ちゃんと話してみる。遊びじゃないってこと、親に話してないしね。」

口調で明るくいう美咲だけど、まだ落ち込んでいる。でも、さっきよりは元気になったかな？　美咲は落ち込んだらだめだもん。もし落ち込んでも、私が支える。美咲が私にしてくれたようにね。

「ココロはどうなの？　高校、決まったの？」

「まだだよ。やりたいこともなくて、夢もないんだ」

そう。夢もなくて、適当に高校選んで。なんとなく通う。それでいいのかなって、幸せかなあって考えてもいい案は浮かばないの。やりたいことがあったら、もっと決まるのかな？

美咲も考える仕事をしただけ、なにも浮かばなかったみたい。

「ココロ……ヘルパーとかになったら？　前に、働きたいって言ってたよね」

そういえば……そうだ。職業体験で老人ホームに行って、話相手をしたり、お茶を入れたり、ドライヤーで髪の毛を乾かしてあげたりした。去年の……寒い時期だった。大変だったけど……ヘルパーさんになりたいって思ったんだよね。今も、諦めてはないけど……すっかり忘れてたよ。

「でもね、私がヘルパーさんになれたとしても、続けられるか自信ないんだあ……」

それが本音。私、辛いこととか引きずるタイプだから……続けられるのになって。なれたとしても、仕事がつくて辞める人が多いって聞いた。うつ病になる人もいるんだって。それを聞いたら、私なんか出来るのか不安になっちゃう……。

「大丈夫だよ。ココロなら、大丈夫！　それにさあ、ココロが精神的にしんどくなったら、私は駆け付けるよ！　今と同じように励まして応援すると思う」

「美咲、ありがとう」

不安じゃないって言ったら嘘だけど。心が軽くなったのは、本当だよ。私は話すのが苦手で、言いたいことも言えなくて、聞きたいことも、はつきり聞けない。恥ずかしくて、感謝の言葉は言えないけど。今は笑顔でこうしか言えない。大人になったら、今より堂々と出来るのかもしれないね。

「悩んでたら、相談くらいはしてね？」 友達……だから～！」

美咲らしくないな、なんて思ってた。『友達』とか言わないから。『信じてる』とかは言うんだけど、それは真剣な時だから。こんな帰り道で言うのは意外で。どうしたのかな。

「な、なんで笑ってるの？」 こ、ココロが言わせたんだから～」

「美咲……可愛い！ はあ……面白い！」

美咲は口を尖らせてムツとした表情を作った。そんな表情でも、可愛いのは羨ましい。美咲が双子だったら……毎日ドタバタしてるんだろう。今でも、こんな調子だから。

「ごめんね。美咲、機嫌直して」

「も～！ なにも、謝ってほしいんじゃないよ～！ ココロがどんな対応するか気になっただけで。予想通りだけどさ～」

予想通りなら、今度は私が拗ねてみようか？　そう聞いたら笑うかな。美咲のことだから、笑いながら謝るね。別に謝ってほしいわけじゃないから、なにもしないし、なにも言わないけどね。

美咲はピタリと足を止めて、私に小さく手を振った。いつの間にか、分かれ道まで来ていたようだ。

「ココロも、ちゃんと親と話すんだよ？　進路はそんなもんだから」

「ん……分かってるよ。資料とか見てくるよ！　またね」

部活でまた会えるから、長々と話し合わない。それが私たち。それに、遊ぶことだって出来る。遊び過ぎはいけないけれど。

美咲と別れて、鞆を肩にかけ直す。うん。明日から、頑張ろう！

真面目に、勉強するんだから！

「手紙、今日のうちに書いておこうかな？」

千恵から手紙は来てるのかな。いつ頃に来るのか、書いてくれたら分かりやすいけど、会えるだけで嬉しいから……それに、いつ千恵が来ても大丈夫なように常に昼は家にいようと思うし。まあ……暇人ともいうだろうけど。

「ココロ！　千恵ちゃんから手紙きてるわよ」

「え！　ほ、本当だあ！」

お母さんが玄関に立っていたので、すぐに靴を脱いで手紙を奪って部屋に入って手紙のシールをはがして広げてみる。千恵の綺麗な文字が並んでいた。

「ココロ、元気ですか？ 私は元気だよ。高校も決まったよ。ただ、油断はしてられないので、そっちに行くのは三日間くらいになります。学校にも顔を出したいな、と思っているんだよ。あ、部活の日とかぶっちゃったらごめんね。だめな日があったら、連絡頂戴ね」

静かについた息は、すぐに消えた。私は明日から夏休み。連絡してもいいけど、千恵が今住んでるところに私が書いた手紙が千恵に届くのは、一カ月という長い時間なんだよね。手紙を今出しても…届くのは、夏休みが半分以上終わったときだよ。んー……どうしよう。部活とかぶったら、私も嫌だもん。千恵との時間が…千恵に会いたいよー！

「ねえ、ココロ…話があるんだけど、いいかしら？」

「おわあ！？ お、お母さん、いきなり来ないでよ！」

扉から顔をひょっこり出す。も、もう、びっくりさせないでよ！

わ、私…千恵からの手紙を読んだばかりなんだから！

千恵のこと、考える時間くらい、いいでしょ…。

お母さんはクスクス笑って「悪いわね」なんて言うけど、私は心臓に悪過ぎて…胸に手をあてて、バクバク鳴る心臓が、静まるのを待った。

「は、話ってなに？」

お母さんが部屋に来たのは話があるからなんだよね？ こんなとき、決まって嫌な予感しかないんだよ…。現になんか緊張した雰囲気漂っているもん。

「ココロは進路考えてるのかしら？ あなたも、受験生だか

ら……決めてるわよね？」

進路の話か……いつかはされると思っていたけど、終業式のあとにされるなんて。今日は、進路のことばかりだな……。去年からずつと言われてきたけど……毎回言われると、イライラする。心配するのは、分かるよ？ 私の成績じゃ、ランクの高い高校に行けない。少し下げないといけないのも、分かってる。でも……。

「決めてないなら、公立に行きなさい。私立は絶対にだめよ！ 私立に行かせるくらいなら……高校なんて行かせないからね！」

私……誰かに決められたのは嫌だよ。自分でしっかり決めたいの。行きたい高校も、将来も。親になんでもかんでも決められるのはやめたいの。

お母さんの目を見て、しっかりと言えたか分からないけど……お母さんは黙ったままで。不安になる。生意気なこと言ったかな？

「そう。なら、好きにきなさい。でも、高校は公立にきなさい。それなら別に反対しないわ」

許してくれたのか分かんない、曖昧な言葉。どういうこと、って聞こうとしたら、お母さんは黙って部屋を出ていった。はあ……あんなこと言っただけど、高校のことはよく知らない。資料、見たいけど資料だけで分かることは少ないし……。偏差値だって知らない。先生に、相談しようか？ 進路担当の先生……誰だったかなあ？

そういえば、美咲はどうなったかな。親と話せたのかな？ 納得してくれたらいいのに。美咲が真剣なこと……伝わればいいな。ゆっくり目を閉じて……高校生の自分の姿を想像してみる。髪の毛は、長いのかな？ 細身かなあ？ メイクとかして……オシ

ヤレするのかな？　今では想像出来ないことばかりだ。今の髪の毛は、長いわけじゃなくて、鎖骨くらいで、ヘアアレンジは全くしない。いつも下ろしたままの髪。毛先がはねて、ボサボサ。アレンジしたいなあ、って思っても……出来ることは限られているし。たまに……体育の時とかにひとつに結うだけ。

「ココロは、伸ばした方が可愛いよ！」

いつか……友達が言ってくれた。伸ばしてみようかな……。髪の毛を切ったのは、少し前だから……。すぐには伸びないだろうな……。そういえば、ファッション誌とかも買ってないやあ。千恵に見せてもらったことはあるけど……。買おう、とまでは思わなかった。今持ってる服だって、オシャレじゃない。おかしいな……。前までは興味なかったのに。ファッション誌を買いに……。コンビニに向かう私はなに？　一緒にいられるの、最後だから、可愛くうつりたいとか……。考えてるから？　棗に可愛く思われたいの……。わがままかな？

「う……明日、バスケ部も部活あるんだ」

部活予定表を見て、ため息をはく。買ってきたばかりのファッション誌でヘアアレンジが載ってたから、明日試そうかなあ……。なんて笑った私は、どんな表情をしてただろう？

朝、早く起きて雑誌を見ながら髪型を変えてみた。いつもはねている毛先をスプレーとくしでまっすぐにして、ゴムで横に括って……上手く出来たとは思う。な、棗……今日会うかな？ 会ったら嬉しいけど……恥ずかしいなあ……。

「時間、まだあるや。……へ、変じゃないか、鏡見ようっと！」

鏡で確認するのは、今日で何度目だろうか。普段は髪型とか気にしないのに、バスケ部も今日いると知ってヘアアレンジする私は単純なのかも……。棗と会えるのすら、分からないのにな。……ううん、だめだめ！ 気にしたらだめだよ！

「よし！ 行ってくるね！」

十分前に家を出た。九時までには美術室に着いてないといけないから……ギリギリだな。八分かかるってことは二分前に着くのかな？ 遅刻したことはないので、焦ってないはず……。でも、足が早く進むのは、期待してるからなんだ……。

「おっはよー！ あ、可愛いね！ ココロ、似合ってるよ
おー！」

結局……登校の時は棗には会わなかった。残念だな……仕方ないけど、見てほしいなあって思う。ヘアアレンジなんて、そんなにしたことないんだし……。友達に褒められて嬉しいよ。でもね……好きな人にも見て、可愛いって思われたい。褒め言葉をもらったら……幸せすぎて倒れるかも！ そういえば、棗はどんな髪型が好きか

な？ お団子？ ポニーテール？ ゆるふわ？ 棗の好み……知りたい。はあ……私っていつからこんなに欲張りになったのかな。

「あ、おはよ星野さん。髪型変えた？」

後輩くん……聞かなくても分かっているでしょ！ 目がニヤニヤ笑ってるよ！ そんなに笑わなくてもいいじゃん……。私だって、不器用だから綺麗に結えてないけど！ これでも精一杯したんだよ？ 朝……何時に起きたと思ってるの。

「そうだね、似合わないよね。綺麗に纏められてないもんね」

「別に似合わないと言ってるだけだよ！ まあ、いいんじゃない？ 俺は好きだけどな、この髪型」

な……！ 褒められた！？ 後輩くんが……褒めてくれた！ ええ！ し、しかもこの髪型が好きなんだ？ 初めて知ったよ……後輩くんと、好みの話とかしないから……好きって言われたの、初めて！ うわあ……な、なんか恥ずかしいな……。まるで、私が後輩くんのことが好きみたいじゃない？ いや、好きなのは好きだけど、恋愛感情とは少し違うもの……なんていうんだろ？ 恋愛感情に似てるものなだけで、少し違う……。違う愛情？ 幼い子供に向ける感じ。幼稚園児とか、低学年の……。うーん……弟に向ける家族愛なのかな。弟、いないから分からないけど。可愛い、と思う。後輩くんは、私の弟？ ううん……私以外の人も、後輩くんを弟のように可愛がっているもん。みんなにとって、弟的存在。

「あー！ おはようー！ 可愛いねえ、後輩くんたちは」

！ 彼女とか、いないの？」

「はよつす。男に可愛いなんて言うもんじゃないですよ？

これでも、一応は男なんですから！ てか、なんで彼女なんです
か！？」

あー……私より大人っぽい女の子には、ちゃんと敬語なんだよね。
確かに私、童顔で……中三になっても、小学生に間違われるけど……
少しは大人っぽい顔立ちにならないかな？ 親からも、友達か
らも「顔つき、幼い」って言われるし。友達も、身長高いし……雰
囲気がクールだから、小学生に間違われることはないらしい。逆に
私の雰囲気「ふわふわしてる。天然」とか。意味が分からない……
…。

「え、先輩って彼女いるのお？ あたし先輩のこと狙ってた
のにい！」

後輩の、中一とは思えない色気付いた香水をプンプン漂わせて後
輩くんに近付く中一の女の子。少し前に入部してから、後輩くんを
「先輩」と呼びながら追いかけてまわしている。後輩くんが先輩にな
る姿を見るのは、慣れない。あんなに暴れ回っていた、小さな男の
子がねえ……。今も暴れてはいるんだけど。

「いや、いないって！ 先輩こそ、彼氏いるんじゃないです
か？ 受験とか、大丈夫なんですか？」

「さあ？ どうでしょうね？ ま、受験はなんとかな
るよ。私立も受けるから、ね」

私、この場を離れよう。受験の話はついていけないのはもちろん、

後輩くんを狙ってる後輩ちゃんの目がこわいよ！　肉食なんだ、きっと。後輩ちゃんが目をギラギラさせて目が語ってるよ！

「あたしの先輩をとるんじゃないやねえよ！　先輩はあたしの方が似合ってたんだよ！」

そう、幻聴が聞こえるよ。まあ、後輩ちゃんが後輩くんを好きなのは見てて分かる。恋する女の子の瞳だもん……。時々、後輩くんに熱い視線をおくっているのも、知ってる。後輩くんは、相手にしてないみたいだけど、少しくらい気持ちに応えてあげてもいいんじゃないかな？　容姿とかも可愛いから、褒めたりすれば飛び跳ねるほど喜ぶだろう。それに、二人は似合っている。後輩くんは、かつこいいとまではいかないし、背だつて男の子にしては低い。可愛い感じ。なんか……弄りたくなる、後輩くん。そういえば、後輩くんをこんなにガン見したことないかも。後輩ちゃんが惚れるのは……ん、微妙に分からない。

「ねえ、先輩！　あたし、先輩が好きなのよお！　だから先輩の彼女にしてえ？」

「いや、無理。そんな軽い気持ちで付き合えない」

後輩くんらしくない、真面目な表情。後輩ちゃんは頬を膨らまして、腕にしがみついたり甘い声を出して後輩くんに必死にアピール。後輩くんの冷めた目に、気付かないのかな？　なんか……こんなに冷たい目をする後輩くん、見たことない。

「なんでえ！？　あたし、こんなに先輩が好きなのにい！」

「ごめんな？　俺、好きな女の子がいるんだ。好きでもない女とは、付き合えない」

後輩くん……。一途なんだね。

後輩ちゃんはウルウル目を潤ませて、顔を手で覆って泣き始めた。はつきり言われて……。辛いね。後輩ちゃんは、あんなに好意を寄せてるのに、叶わない。好きで仕方なくても……。届くことがない恋だつてある。言葉にすることも許されない思いだつて……。自分がどんなに相手を想つても、相手が自分を想ってくれなきゃ、意味ない？ ……私はね、そんなことないと思う。相手が自分を想ってくれなくても……。どうやったとしても、振り向いてくれなさそうでも好きになつたらとまらなくて……。相手の笑顔が見られたら嬉しくてあの人に恋してよかつたつて笑えるようになれば……。意味があるよ。そうじゃなくても、好きになることは必ず意味があるから……。

「ひ、ひどいよお……。！ あたしは、先輩に似合う女の子になるために……。オシャレしたり……。ダイエットしたりつ、女の子らしくしてみたり、先輩の隣に立つても恥ずかしくないために……。頑張つたのにいっ……。！」

後輩ちゃんも、好きな人に振り向いてもらおうつて、頑張つたんだね。頑張つたから、後輩ちゃんはそんなに可愛いんだね。細くて、髪の毛もクルクル巻いてて……。後輩くんにはもったいない女の子。後輩くんが好きになれないのはなんでかな。

「本当に、ごめん。強制されて、簡単に誰かを好きになれないだろ？ お前が、俺に『好きになつて』とか言つても、正直……。好きになれるか分からない」

「う……。うええっ！ も、いいよお！ あたしの自己満だったからあ！ あたしも、先輩のこと強制で好きになつたわけじゃないもん！先輩が、いつも……。あたしに笑ってくれるから、先輩が……。優しくて、面白いから……。大好きなんだよおっ！」

自分に想いを寄せてくれても、その人を好きになれるかは、違う。後輩くんと後輩ちゃんが付き合えれば、幸せなのに。でも……それじゃ、後輩ちゃんに失礼だ。好きでもない人と付き合うのは、相手にも自分にも、苦しいだけ。

「えっ、え……先輩に、似合う女の子になるためにっ、頑張るからあ……先輩も、あたしを少しは見てねえ……？　もちろん、先輩と先輩が好きな人の邪魔……しないから、お願い……」

「ん。分かったよ、ちゃんと見る。てか……そのままでも可愛いと思うけど？　泣くと可愛い顔が台無しだって」

後輩くんの言葉に、後輩ちゃんはまた泣き出した。二人にした方がいいから、黙ってその場を離れた。顧問の先生はいつも来る時間が遅いから、後輩ちゃんのことはなにも知られないはず。その間に……二人が恋仲にならないかな。

ボーツとしてそんなことを考えた。

部活は昼を過ぎたら終わり。なんだかんだで後輩ちゃんは後輩くんと一緒に帰ってた。後輩ちゃんの意外な一面が見れた気がする。美咲と帰ろうとして、声をかけたら、違う人が応えた。

「星野さん。時間あるかな」

「は、はや、隼人！？」

ええ……なんで隼人が!? 部活、終わったの? 時間はあるけど……美咲がいるから。断ろう。そう思って美咲に目をやったら、いない。鞆もないし……帰ったな。いつも、行動はいいよ。

「うん、いいよ」

「なら、体育館裏でいい? 話があるんだ」

おかしいな……。体育館裏はあんまり人が通らない場所。不良が集まる時もあるけど、それは授業があるとき。夏休みの今は、不良もいない。つまり、誰も通る人はいない。なんでそんなところに……?

体育館裏に着くと隼人が振り返って私を見た。真剣に見つめられて、息をするのが苦しい。喉もカラカラしてきた……。

「気付いてるかもしれないけどさ……僕、星野さんが好きなんだ。付き合って、くれない?」

え……? 今、『付き合って』って言った? 聞き間違い? 幻聴? 空耳? 隼人が私に……ないない。きつと、これは冗談だ。私がどんな反応するか試しているんだ……。

「冗談はだめだよ。好きな人がいるなら、その人に言わないと」

去ろうと背を向けて足を一歩進めたとき。隼人に後ろから抱きしめられた。私の首に隼人の細い腕がまわる。隼人がどんな表情をしてるか……分からないよ。本気、なの? 隼人が言ったの、本気? 確かめるために、隼人の腕に手を添えた。隼人の力が強まって、顔をしかめた。

「星野さん、今日可愛いから……我慢出来なくなった。会えればいいと思っていたのに」

息を吐く隼人。隼人の息が耳にかかって……くすぐりたい。でも、私……隼人に告白されても、どうしたら？ はっきり、自分の想いを告げる？ 好きでもない人と付き合うのは失礼だよ、ね。

「ごめん……隼人……」

情けないくらい、自分でも呆れるほど、声が震えた。

「ごめん……ごめんね隼人……。私、隼人の気持ちを利用したくないよ。誰かを……利用したくない。」

「僕じゃ、だめなの？ 棗しか無理なんだ？」

「なんで……隼人が？ 私が棗を好きなこと知ってるの？ 一部の人が知らないの？ まして、男の子に言ったりしてないのに。柴崎さんが言ったのかな？」

「星野さんを見たら分かるよ。ずっと、見てたんだからさ。星野さんは、いつも棗を見てたよね」

「ギョって、力が強まる。苦しい、苦しいよ……隼人……離して。こんなところ、誰かに見られたら、大変だよ。誤解されるよ？」

「ごめん……隼人の気持ちに応えること、出来ないよ……」

「泣かないでよ……。ごめん、僕もしつこいね。嫌な思いは、させたくなかったのになあ……。いいよ、応えなくて。僕たち……友達だから」

「ごめん……ありがとう隼人。友達に戻れるの……ありがたいよ。隼人と気まづくなるのは、嫌だから……」。

私は帰ろうと隼人の中から出て、門まで黙って歩いた。いつも、隼人に振り返って手を振ってたけど……それは今、出来ない。しちやいけない。隼人の優しさにこれ以上甘えたらだめ。

「好きだよ……ココロ」

隼人の呟きに、知らないふりをするしかないの……。

なにやってるんだろう……今日、伝えるつもりはなかったのに。いや、これから先も伝える気などなかった。前……好きだった女の子に振られたことを今でも引きずっているんだ。あれは、振られたというより捨てられた、かな。別れたのも、そうだし。

「隼人」

名前を呼ばれて顔を上げた。嘘だ……なんでいるんだ？ 引越したんじゃないの？ 僕と別れて、他校の男と付き合ってたんじゃない……。

「千恵……」

「久しぶり、隼人。ココロに告ったんだね？ 振られたみたいだけど……大丈夫？」

元カノ……千恵。確か小学生のときに付き合って、引越して……また中学生になって再会した、前に好きだった女の子。今の好きな人、星野ココロの友達。星野さんに会いに来たのか？

「隼人がココロを好きなのは知ってたよ？ バレバレだよ、あんなの！ 気付かなかったココロがすごい」

「星野さんなら、門に向かったよ。追いかけないの？　星野さんに会いに来たんだよね」

じゃないと、ここに来る意味がない。僕に会いに来るのは有り得ないし。振ったのは、千恵なんだから。僕のことを笑いにでも来たのかな。あの頃の僕は、千恵が好きで……引き止めるために必死だった。

「隼人より、かつこいい彼氏が出来たの。別れてくれない？」

「千恵……僕は千恵が好きだよ……。千恵は……違うの？」

なんて、言い合っていたなあ。今は、千恵のことを好きだとは思わない。むしろ、好きなのは星野さんだ。あんなに可愛くて、素直で……笑った表情がとても好きなんだ。可愛いのに、もっと可愛くなる。棗が羨ましくて、何回嫉妬しただろう。棗も、星野さんが好きなくせに、なかなか言わない。言えば付き合うことになるのに。あ……きつと、柴崎だな。柴崎と付き合ってるらしいから、星野さんとは付き合えないのか。棗のことだから……星野さんを諦めようとしたか、他の女の子と付き合って、星野さんを忘れたいんだ……。二人は、互いに想い合っているのに、上手くいかない。いつそのこと、付き合ってくれれば……僕は、星野さんを諦められるのになあ。

「星野さん？　ココロって呼んでたじゃない。『好きだよ、

ココロ』って。隼人、そんなにココロが好きなのね！　少し……

ココロに嫉妬するかも」

なに言ってるのかな。僕に、今さらなにを言えっていうの？

あの頃みたいに、ひたすら千恵を追いかけてた僕じゃない。もう、星野さんしか好きじゃないんだ。千恵の時よりも、激しく好きなんだ。会うと優しく笑ってくれて、話すと癒してくれる。落ち込むと

慰めてくれて、元気をくれる。僕は僕らしくすればいいと、言ってくれるんだ。千恵より、好きなんだよ。こんなに人を好きになれたのは初めてで。見ると、切なくなる。会うと嬉しくなる。笑顔を見ると苦しくなる。目が合うと、心臓がバクバク鳴って、ぎこちなくしか笑えない。彼女のためなら、なんでも出来る。彼女が僕を好きになっってくれるなら、なんでも差し出す。こんな苦しく、愛しい想いは初めてなんだ……。

「隼人がココロを好きでもいいの。私ともう一度……付き合ってほしい」

「ごめん、それは出来ないよ。好きな女の子しか本気で付き合えないんだ。千恵と付き合う気は、ない」

千恵はポロポロ泣き始めて、僕はそこに立っているだけ。慰めは……好きな人だけに使いたい。友達を慰めたりするけど、女の子を慰めるのは苦手。しかも千恵。元力ノだから、慰めようと思わない。優しくして、誤解されても困るし……。ただ黙ってそれを見るしか出来ない。謝るのは、違う気がする。なんて言えいいんだろう。女の子が泣いた姿は、何回も見ってきた。僕に告白してきて、断ると目の前で泣かれた。泣く前に、走り去る子もいた。でも、僕はなにも言わずに……ただ泣きやむまで傍にいた。……それで満足してくれるなら。千恵は、満足なの？ 傍にいて、慰めてもくれない男なんか。

「隼人……私ね、隼人が好き……。王子様な隼人を、独り占めしたかった。でも、付き合ったら違った。それだけで……満足出来ずにいた。隼人が他の女の子に優しくしたり、笑いかける度に……嫉妬したの。隼人に嫌われることが……怖かった。醜い私を見て、隼人はどう思うんだろうって……」

僕も不安だったよ。千恵が話す度に他の男の名前が出て。いつか、千恵は他の男のところに行くんだろうなって。だから、千恵に好きになってもらおうと頑張った。他の男なんて、目に入らないように今思えば……僕は必死過ぎた。なんであんなに千恵にしがみついたのかな。

「隼人を、愛してる！　隼人だけしか、愛せないよお……っ」

千恵があ頃の僕と重なる。僕も、何回千恵に伝えただろう。

『千恵だけが好きなんだよ！』

何回伝えても、心に響かないことだっである。学んだ僕は、成長出来たのか……それすら分からない。心が手に入らないと分かっている、言葉にして、相手に伝えたり言ったりする僕ら。気付いたら、言ってしまう。自分で言わないように注意しなければ。でも、伝えられずにはられない。今だって、叫びたくて仕方ない。

「ココロが、世界で一番好き」

言いたいし、叫びたい。でも……言ったら星野さんが困るから。困らせたくないんだよ。振られても、諦められない。嫌われたくないんだ。

「ごめん、ごめんね千恵。それと……僕を愛してるって言ってくれて、ありがとう。僕なんかを好きになってくれて、ありがとう」

『ありがとう』と言ったら伝わるだろうか。こんな、感謝でいっぱいの子。いつか、言ってた女の子がいるんだ。

『槇野くん……謝るのはやめて……。謝るのなら、ありがとうって言つてよ。たとえ、振られても……好きな人に「好きになってくれてありがとう」って言われたら、嬉しくなるんだよ』

謝るなら、感謝しよう。ごめん、よりありがとう、だね。その心が少しでも、軽くなるのなら。僕を想い出にして、再び笑えるようになるのなら。何度だって、伝えよう。

キミに、ありがとう。

「隼人は優しいから……私にそう言ってくれるんだね……。うん、分かった。隼人はココロが好きだから、邪魔しない。勝手に、好きでいさせてね」

ニツコリ笑った千恵は、きれいだった。涙で潤んだ目も、彼女を飾るアクセサリーに見えた。泣き笑いの表情の彼女……前に知らなかった、強がっている表情。きれいな笑顔を見せてから、千恵は学校から去った。星野さんに会いに行ったのだろう。夏休みが終わったら……星野さんに言おうか。僕と千恵の関係。千恵に、迷惑がかかる？ 星野さんは気をつかう、かな。でも、知っておいてほしいんだ。そして……棗と仲直りしたことも。柴崎と付き合った棗は、僕に謝ってきた。それで、分かった。棗が星野さんにしたこと。好きでもないのに、柴崎と付き合っていること。星野さんを傷付けたのを知ったとき、危うく棗を殴りそうになった。僕には関係ないのに、許せなかった。棗……ちゃんと星野さんに伝えてよ？ 僕、応援するからさ……。星野さんの、幸せな笑顔が見たいんだ。キミの、眩しい笑顔が。僕が一目ぼれした、あの笑顔。大好きな、笑顔。

夏休みが終わって、久々に星野さんの教室に来た。棗もいたけど、柴崎と話してるから邪魔したら柴崎に怒られるな。

「隼人……？　おはよう。どうしたの？」

星野さんが後ろに立っていた。確かに、あの状況で教室にいるのは辛いな。棗に手を振ってから、僕のクラスに星野さんを連れてきた。キョトンとした彼女が可愛くて、口走りそうになる。いけない、いけない。

「隼人……棗と仲直りしたの？　手、お互いに振ってたよね！？」

「棗とは仲直りしたよ。少し前にね。だから、僕たちに気をつかわないで。棗とは、前みたいなライバル関係だから」

星野さんが原因で喧嘩したのなんて知らないだろうね。棗も、星野さんをとられたくなくて、僕に嫉妬してたんだよ。だから、星野さんは自信を持っていたいいんだよ？　希望はまだあるんだからさ。柴崎より、可愛いから。柴崎も美人だけど、星野さんはふんわりした雰囲気で癒される。柴崎にはない、雰囲気なんだ。

「あの……千恵から聞いた話なんだけどね……昔、千恵と隼人って付き合っていたの？」

「うん。ほら、僕が前話した、一方通行な想いだよ。元カノの話」

すると、星野さんは表情を曇らせる。なんでそんな表情するのか分からなくて、首を傾げていると、突然頭を下げた。僕じゃなくて、星野さんが。どうして頭を下げるのか分からなくて……謝る星野さんの顔を無理矢理上にあげた。

「千恵とのことで謝らないで。話し合ったから……それに、千恵のことは恨んでないし、むしろ安心した。ああ、変わってないなあって」

星野さんに笑ってほしくて。思った通りに言ったら、ホッとした表情をした星野さん。良かった……僕のこと、辛い思いはしてほしくない。星野さんが小さく笑って、つられて笑った。僕の好きな柔らかい、初めて見たときの笑顔ではないけれど。ああ、やっぱり好きだなあって思った。

「私、進路決めたんだ。夏休みに、親とか友達とたくさん話して……行きたい高校、見つけた」

「良かったね！」

本当は。とても知りたいよ。星野さんが行く高校。でも、それじゃあ僕も前に進めない。また、自分の気持ちを押し付けて、相手に縋るのは嫌なんだ。だから……聞かないでおくよ。僕は、ちゃんと前に進むから。あと、少し。少しでいいから……星野さんを好きでいさせてね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1162s/>

蜜柑色の君

2012年1月14日15時53分発行